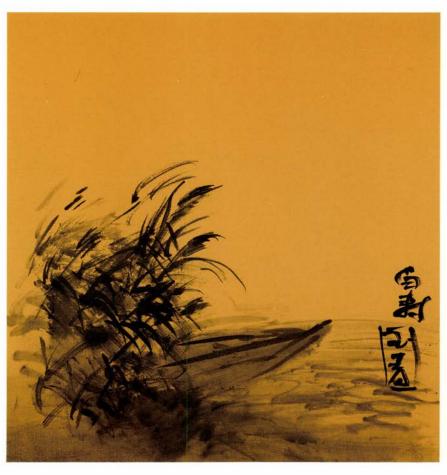
## 川柳杨



No. 906

特集・第8回川柳塔まつり 十一月号

## 年賀広告募集

にご利用をお願いする次第です。広告のスペー ます。同人・誌友ならびに各句会(川柳会)の アピール及び誌上名刺交換の場として、積極的 本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたし

★個 みのほど、 よろしくお願い申し上げます。 スと掲載料は、左記のとおりですので、お申込

人 一口岩頁 二、〇〇〇円 **火頁 三、000円** 

次の四種といたします。

(氏名・住所・電話番号など掲載

★団 体

①%頁六、〇〇〇円

③%頁一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁一八、〇〇〇円

原稿締切

11月23日

<del>▼</del>
5450005 大阪市阿倍野区三明町二-一〇-一六 TEL06-6629-6914 ウエムラ第2ビル202号室

111 柳 塔 社

★新年号特集★

## ■今年中に発表された句に限ります。 一締切 11月23日(本社事務所宛)

# 川柳塔社同人参加(一人一句)

私の一句

#### お 知らせ

ら五時までとします。締切りは二時半。会場はい 寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時か

ずれもアウィーナ大阪です。

平成十四年 (二〇〇二年)

十二月六日(金) 十一月二日(土) 四階

平成十五年(二〇〇三年)

月七日(火) 七日 四階 金剛

三月六日(木) (金) 金剛

#### 九死に一生

#### 河 内 天 笑

り、それから最初の親が決まってゲーム 人目が振って出た目がトン(東)場とな 人が卓を囲んで一人がサイコロを振り二 マージャンは場所決めにはじまる。 加

る前夜祭を堪能させていただいたあと、 めて頂く事になった。傘おどりにはじま ある弓削川柳社重鎮の恒弘衛山氏宅に泊 橘高薫風、そして私の四人は会場近くに 川柳大会を控えて田中好啓、寺尾俊平、 平成二年八月三十一日、翌日に西日本

ら、サイコロの目は私の念じていた通り、 クーラーを背にする事と相成った。「極 に座れたらええのになあと思っていた 題。出来ればあのでっかいクーラーを背 いしいこと。それも請求書なしの飲み放 衛山氏宅の二階応接間でいざご開帳。 お風呂をいただいたあとのビールのお

> とことんついとるで--楽のあまり風とはこのことや」、今日は ケームは開始された。 ーとほくそ笑んで

どうですか」と言って下さった。 さんが優しく「すこし歩いて来られたら お待ちどうさん」と言いかけたら、俊平 ぜんぜん痛くない。「あー治った治った。 もなかったかのように振っても叩いても みがとれて、あんなに痛かった頭は何事 頭をかかえていたところ、すーと急に痛 るが痛いもんは痛い。そして五分十分と になっても頭は痛いが、じっと我慢する。 転んだ、と言うより倒れたのである。横 に後頭部への衝撃。私はその場にすぐ寝 ける」てな調子で三十分ほど経ったころ ン通ればリーチ、セブンスターに火をつ かな美少年」は田原坂。「右手のウーピ 「いたたたた」。ぐわーんと殴られたよう 三人さんが心配してくれてるのが伝わ めてに血刃ゆんでに手綱、 馬上ゆた

> さん。長谷川紫光さんなど弓削川柳社の が屯していて「おーっ天笑さん」と声を その店は夜はスナックだった。何人か男 掛けてくれたのはまぎれもなく濱野奇童

れた。お酒をごちそうになり演歌を三つ 執行部が、大会の打ち合わせをしておら

災病院とのご縁がこの時に始まった。 河内天笑氏をよろしくお願いします」と の裏に紹介状を書いて下さった。大阪労 薫風先生が、同級生の伊藤篤先生宛名刺 したのは十時を過ぎていた。 歌わせていただいて、皆さんの所へ帰還 後日、件の頭痛と別のことで「友人の

でしょうと言われた。 や高血圧)とても持ち応えられなかった ところ、それは大変危険な状態だったそ 成二年)後頭部の激痛の事をお伺いした ある日、 院である。その折は一ヶ月入院したが、 命を助けて頂いたのは勿論、大阪労災病 平成八年三月、心筋梗塞で入院し、 血管の脆い状態の人なら(糖尿病 主治医の岩井先生に前述の

と唾をのみ込んだ。 瞬頭がまっ白になり、 思わずごくり

やろ」と思いながら喫茶店に入ったら、

に面していて、私は狭い歩道を南へ一キ 口ほど歩いた。「あの痛みは何やったん

恒弘衛山氏の家は岡山市に通じる国道



#### JI 柳 塔 十一月号 目 次 題字・中島生々庵 /表紙・直原玉青

自選集 第八回 麻生路郎物語 水煙抄 ..... ■巻頭言 柳塔 の死亡記事 同人吟 九死に一 生. 東 安 奥田みつ子選 河 河 内 天 寿 大 天 美 選 子 笑 八 : : : : 1 4 58 2 53 83 86

第八回川柳塔まつりに参加して ......

都倉求芽・小野句多留・三島淞丘・櫻庭順風

波多野五楽庵選

:

99

付いて床ずれだらけにはなりたく無いようで

大体の人はコロリと死ぬのがご希望で、寝

もまた楽しからずや、と思ってしまう。

**クさせて人を脅かしたい人。読んでいると死骨格標本になってバネ仕掛けで、顎をカクカ** 

ていた人、遺体は解剖実習に使ってもらい、

中には、射殺死体でごみすて場に捨てられ

96

同人総会·各賞表彰記念句会·懇親宴

### 私の死亡記事

#### 安 藤 寿美子

咲かせどんな事にも驚かぬ」と岩陰で笑って 生は飛行機事故で日本海の底に眠り、 いらっしゃる。 で、ポプリの香りがするだろう。時実新子先 ような墓碑は風が吹けばハープのように奏 らと思う事を、 した事したかった事、 から見て死亡記事にしている。生前の自分の 前提で百二名の人々が、自分を第三者の立場 金巵満盃を愛し、笑謔を好む」(一部)。この のである。田辺聖子先生の墓誌は「清談長嘯、 その中で大正生れは十五人だけ、減ったも 死を考えることは生を考えること、 同名の単行本が文芸春秋社から出ている。 面白く書いてある。 死亡の日時こうだっ という

	駅伝の走者の奥に母の顔	▶私の句	● 蟹の泡 不平は僕にだってある	● 座右の句			■編集後記	十一月各地句会案内	柳界展望	抽	碑建立		秀句鑑賞   同人吟	初歩教室「叩」く」		路集   煙	喋	茴香の花	排風柳多留二四篇研究 <b>47</b>
.14	森											古	早	吐	宮	高	黒	政	
71	村		甲		L		楓塞	į				谷	Ш	田	野み	橋丘	田く	岡日	
1,	美		吉)				楓楽・義子					節	盛	公	野みつ江	岳水	くに子	岡日枝子	
	花		_		N		子					夫	夫	_	選	選	選	選	
A	10			1	7		:	:	:	:	:	:	:	:	:			(	
3'.		M	•	1	I		132	130	128	114	113	112	110	108	107	106	106	104	102

たきにされて死ぬほうが手っ取り早い。 ある。 筒井康隆氏はすごい。散歩の途中気にいらぬ若者を見掛けると、魔女私だって気にいらぬ若者を見掛けると、魔女私だって気にいらぬ若者を見掛けると、魔女になってこいつらを猿かナメクジに変えてやると思ってしまう。まあ魔女の修行には何千をと思ってしまう。まあ魔女の修行には何千ると思ってしまう。まあ魔女の修行には何千ると思ってしまう。まあ魔女の修行には何千ると思ってしまう。まる魔女の後行には何千ちかかるだろうし、ドジ魔女になってナメクジのつもりが青大将に変えてしまっても困る。いっそ筒井氏のように、乱闘のすえ袋だったきにされて死ぬほうが手っ取り早い。

『安ドースミこ(九四歳)七○歳で夫と死 関「あんた地獄へ私浄土へ。ほなさいなら」 と墓石内離婚を企み、死ぬ前は若い男と見れ と墓石内離婚を企み、死ぬ前は若い男と見れ となり一室に収容した。ところが、監禁され となり一で大小便を派手に洩らし、吐瀉物を っドの上で大小便を派手に洩らし、吐瀉物を っだ、脳も内臓もボロボロで使い物にならる かった。生前葬と称し度々一族を呼び集め香 かった。生前葬と称した。遺体は献体し 気管に逆流させて窒息死した。遺体は献体し

ほな軟派でいくか。

した顔が浮かんだ、そうか、硬派はあかんか。ぐらい大人しいにしてや」という、うんざり

そこまで考えた途端、息子たちの「死ぬ時



河

内

天

笑

選

竹原市 小 島 蘭 幸

にらめっこ仁王はとても美しい い顔追いつめられているのだな

一字一字こころ平らになってくる

写経百巻そして私の句碑の字を

淋しい人が集まってくる樹になろう 妻の選んだネクタイをする晴れの日だ

大阪市 西

出 楓 楽

淳

西宮市

長谷川

ポケットに尖った石が二つ三つ 順調に老いていますと五体言う ハーブティー笑い上手は生き上手 温度差があるおおきにとありがとう 背番号重くなる日が来ぬように

つっかい棒のひとつは電子広辞苑

話す人逝って独りの不味い酒 人類の釜茹で近し温暖化 我が家にも孫と言うテロ幅きかす

藤井寺市

高

田

ジャンケンで勝っても勝ちは勝ちでしょう 十九段を昇る川柳塔事務所

砂時計さらさら今は戻らない 五十年思い出せない人がいる

公園のブランコ人を待っている いい事が何もなかった今日は雨

吹田市 Ш 本

蔦かえで女が女らしい秋

秋の彩いっぱいに盛る白い皿 モラル喪失シルバー席の秋の冷え 秋の天あなたと組めば走れそう つぼみ未だ持って健やかなる六十路

外交も私の恋も足踏みす

退院日

除隊日のごと喜々として

仏前で釈迦に説法般若経

バスに乗り遅れてもよい歳になり

- 4 -

(イ) 子 再降でで地の匿まらぬ永田町
1 で
珠富素紫
喜

苦労して作った皺だ大切に 織り上げて絹に木綿になる言 ふり切って来た片袖が落ちている 桃太郎いそうな桃を買ってくる 今わたし不思議 の国に生きて 出雲 る 市 城 喜 恵まれ ケー ひとりには美し過ぎる旅の景 近況に紅葉二枚が添えてあり タイで話す舞妓の京なまり ていると世 間 0 風 がいい う 尾市

屈辱に 仏さんに相談ばかり慶弔費 お浄土も秋ね仏飯山盛りに 耐えかね中座炎上す

白菜の二 毎日が日曜だから休めない 松茸を待ったりしない秋の舌 一枚ばかりで鍋料理

東大阪市 安 永

春

野仏に蛙の親子雨を乞う

電線の雀豊作語り合い いわね金魚のダンスに癒される

骨のあること言 テキパキとすれば疲れが出る明日 ばあちゃんの癖行儀よくさせる い出した孫娘 靴

八尾市

井

尻

民

凡人だが読みの深さを持つおひと 決断をかくし通 折り返し点で自分をとり戻す している孤 独

> 杉 + 歩

八尾市

髙

コスモスにまたさよならをしてしまう

生きているうちに咲かそう赤いバラ 朝食べたものが咄嗟に浮かばない 八尾市

この先はどう曲がろうと阿弥陀クジ へそ繰りの外なに一つない秘密

電気代夏の疲れがどっと出 関節も脳も時どき油切れ

一合寡黙の舌が回り出 す る

単に手術しましょうとは何だ

市

江

見

見

清

お札よりカードの数が多くなる

行革の論議の裏に甘い汁

女性には甘いと後で気付いてる ナアナアのようでも脇は甘くない

それ違う機械がカード突き返す て邪魔売るに未練のある蔵書

生 嶋

ますみ

相応の疲れ枕がすぐ寝息

肝腎な点です妥協できません 腰痛にほんとの歳を思い知る

篠原 VA 0 3

4

6

ゴン太の名はずかしめない家の犬 甘ったるい妻の声には身構える 関白で指図した頃懐かしみ 俺の 騒がしい地球の隅で鳴くオケラ リストラの椅子が倉庫で錆びて 向日葵の陰に日傘の立話 補聴器をはずして食べる披露宴 牛を追う犬から冬になる牧舎 狛犬が鉢巻きしてた神無月 鬱の字が書けるからまだうつじゃない 煩悩の淵をさ迷う古稀の舟 ロボットの懺悔は聞いたことがない ラッピングして飾りたい娘の素 たわいない話も旨い芋煮会 まだ野心あるから燃える紅を引く 遠い日の約束覚ますオルゴール 夢だけを見させて終るタイガース 考えることに疲れてするゲーム 柔らかく柔らかく愚痴聞き流す 点滴につながれ見つめている命 価値年金ほどの軽さか な 吹田市 吹田 吹田市 顏 る 面 市 市 野 岩 太 出 下 屋 田 之 美 セ 男 明 昭 改革の にがうりに養生された夏の膳 乾しものにうたたねしてた黄金虫 夕顔はたえがたそうに萎むなり 鬼やんま威風堂堂たる骸 失恋の猫をきれいに洗ってやる 灯の消えたまま暫くを走馬灯 こんちくしょう塩焼の鮎目が怒る 七転び八起きに遅い歳は無し 無遅刻無欠勤にも定年は確実に ワンマンの母語るとき涙ぐむ 初生りの庭の胡瓜の胡瓜もみ おしゃれではない老人の身だしなみ 代役が虎視眈眈で休めない 古傷の疼く演歌になるマイク 真っ直ぐに生まれ曲がってきた胡瓜 暫くは 荷崩れもなしに走れた終の駅 タマちゃんも都会の水が肌 拘置所で涼 一三本りんどう挿せば秋の部屋 扇子を使う冷房車 声にも株価知らぬ顔 しい顔の人も いる に合い 寝屋川 寝屋川市 枚方市 市 森 堀 海 老池 江 光

子

洋

茜

男にも賞味期限はございます カミソリの昔忘れたループタイ 寝屋 JII 市 岸 野 あやめ 恥じらいも蒸発します暑い夏 声かけた方も驚く人違 らなる肩が淋しい子の巣立ち 田林市

妻の手をじっくりと見たことがない お電話で返事しますとそれっきり パソコンが出来ねば狭い世間です 目が合うて以心伝心する本音 吉

凸凹でも使い勝手のよいお鍋 亡父亡母の近くの席を予約する 羽曳野市

ひねったら出る湯に慣れてゆく怖さ 男を皿に載せて女のティータイム

人目に見せぬ内幕つめたゴミ袋

留学の子と立つ地球の裏表

羽曳野市

安芸田

泰

子

入れ知恵をされた話で先が無 V

真夏日の炎暑が消した思考力

夢いくつ描いて消して老いの日々 落丁を埋められぬまま終章へ

わだかまり水に流した縄のれん 争を知らぬ世代の好き嫌

羽曳野市

JII

信

子

監督のサインが分ける明と暗

追伸 家中が乾いてしまう妻の留 日の価値を病に教えられ の一行愛が深くなる 守

> 本物は甘くないのよ夏みかん 影法師まで丸々と太ってる

間違いでありますように祈ってる

JII

寿

美

もう萩が咲いてる風の通り道 母の掌は神通力を持ってい る

大海の広さふたりに違う過去 善人も絞れば偽善見えてくる あと少し無色でいたい影法師

高齢化みんな歳より若くなり 義務だったシートベルトを固く締め 疑惑更迭辞任逮捕とかしまし U

病人に笑いがもどりホッとする お人柄みんな笑いに誘い込む

老いたとは自覚はないがよく転ぶ 昔なら歩いた距離をバスに乗る 定食の海老が着ぶくれしています

いい音色十人十色のハーモニー

藤

田

泰

子

富田林市

出 智恵子

片

さよ子

和

田 市

原

ひまわりの影わが影のあるがまま	逝く人を止める術なく別れたり	ヘソ出しで目立ち言葉が痩せてる娘	和泉市 中 川	お母さん妻があなたに似て来ます	面接の後ビフテキを食べている	ポケットで指輪イライラしています	息子より安い背広と重い靴	ゲームではないぞ仕事も結婚も	芸よりもまず挨拶を師は教え	河内長野市 加島 由	後悔の種あの事もこの事も	他人様に言われたくないわが寿命	恩にきせたくないので何もしない	腕組のその上のむつかしい顔	に味方はいない風ば	飢えのない国で神経すり減らし	高石市 浅 野 房		あの人が嫌いとパソコンに告げる	夜は不思議好きになったり恨んだり	好奇心旺盛でしたよく食べた	にこにこと笑ってるのも一つの手	大西瓜ホームドラマの真ン中に	藤井寺市 太 田 廿
			楓							—							子							扶美代
無言電話しばし無言の相手する	父さんが天の岩戸へはいったぞ	虎の子の酒をくすねて料理する	衝動買いしないと決めてつまんない	盛り場でもらったチラシナナナント	大阪へ帰るとまずはケツネうどん	堺		負け惜しみ言うて余計にみじめなり	背を押す言葉に嘘も入りこみ	れたしから若さかいつも逃けたかり	のによります。 のになり言葉で頭叩かれる	何が見とりと 四十つ タスオカー		界	真剣に自主トレします脳の老い	情かけ過ぎて子猫にひっかかれ	晩酌の終りにキムチ空になる	一つ屋根の下で時々遠い妻	お財布にカード一枚安定剤	強弱をつけてあなたへする返事	堺士	母似の手 父似の足の娘が嫁ぐ	父が娘に泣かされている披露宴	童謡を知らぬ子のふえ赤トンボ
						市志								市宮							市矢			
						H	I							本							倉			
						Ŧ							7	かり							五.			
						代	ì							かりん							月			

市 和  $\mathbb{H}$ つづや

コロッケをひとつ買うのは恥ずかしい 魂

がひずむとすぐに風邪をひく

新調の眼鏡で判る肌のあれ

置き場所に困る高枝切り鋏

ジーンズは膝が抜けても一

足並みを揃えるスキップが出来ず

多摩川の迷いアザラシは 髯男 大阪

市

板

東

倫

子

そんな人に見えない人が殺人犯 いねと言えば領 く人ばかり

墓まいり先祖と孫の初対面 血 を分けたことが愛情ふかくする

無表情な眉目秀麗の修業僧

ッペンを吹いて夢二の恋探す 大阪市

日を星座の運に動かされ

Eメール愛を伝えに宇宙まで

ポ

しさと自由の城にひとり住む

けゴマあなたを許すスペアキー り火が微かに女演じさせ

大阪市

杉

澤

汀

菊まつりいまは黄葉の城さくらそれぞれに真紅と橙ななかまどそれぞれに真紅と橙ななかまどれが、またであれて霜の朝

つつましく庭を彩る実南天

赤とんぼ里の豊作告げにきた 芋の葉に包んでくれた秋なすび

稔るほど値段の下る稲穂かな

大国

のエゴの無限を知

る 戦

体調を労りながら飲むお酒

川久保

睦

子

冗談にされて本音が浮いたまま ステーキも千切りにして母の口

絵手紙の返事絵ハガキ買ってくる

あばら屋を雲の布団で包み込み

やがて来る冬も間近

の秋時雨

弘前市

女

-10

蜜蜂や蟻にリストラないらし Vi 目 V

火事見舞へ水掛不動やさし

法善寺きばれ織田作ついてい 大阪市

のデッサン描 いて夢を追う

III

端

歩

中秋

年金にメス入れるとや敬老日

愛を売る花屋さんにも秋の彩

朝刊の良心痛むことばかり 孫たちの運動会に指を折る

当百もびっくり仰天火事見舞

大阪市

榎 本

H

0 出

秋

踏み出した一歩にからむ運不運 の背に止まれトンボに深い秋 風の音孤独な酒をのんでいる 人 でいる でいる でいる でいる でいる	中市の制になりたくて天を指す 知の音はまだまだ崩せない 知れぎれの記憶をつなぐ朝の水 切れぎれの記憶をつなぐ朝の水 切れぎれの記憶をつなぐ朝の水 があるから生きられる おいしょう はまだまだ崩せない	明市の成実そうな野菜とら 明市の成実そうな野菜とら 別市 宮 が風も別れも不意にやってくる りかでもやっぱり歩幅変らない か風も別れも不意にやってくる 見ぬ振りの方が気持を楽にする	いった。 中年と老年どこで区切りましょう 根っ子から腐る冷暖房完備 気がつけばつっかい棒のない時代 気がつけばつっかい棒のない時代
橋	橋	崎	瀬
政	岳	٤	霜
良	水	<del>サ</del> 子	石
ほどほどの幸で満ち足る奈良茶粥ずぶ濡れでヒールで駆けた日の別れずぶ濡れでヒールで駆けた日の別れずがぶ濡れでとしかぶ恋いなる秋夜長	た成庫西瓜ビールに余地がない お得意の昔ばなしが呆けてきた がぶ濡れの体型あらわ雨宿り ずぶ濡れの体型あらわ雨宿り がいらずも余談に見せる別の顔 はからずも余談に見せる別の顔	大変さんの裏に十薬干してある 横浜市 保田 網を生みそうな鍵ボケットに 曲解を生みそうな鍵ボケットに 曲解を生みそうな鍵ボケットに	ラ歩有
	子	子	花

押さえてる古傷私の裏面史に すぐキレル堪忍袋ないくせに 美しいラベルの裏は黒かった 片意地な芯もこの頃骨そ症 乗り換えの駅が私をそそのかす 突いて退く世渡り上手生き上手 影法師君も小さい器だね 均等法男も涙もろくなり 人妻という別人に妻は化け 百円ショップで散財をした自己嫌悪 口 よく喋るから先頭に立たされる めくれば汗切れば血が出る古日記 立板に水胸の芯まで滲み込まぬ 舌をぬくバイトを募集エンマ庁 七色の虹がかくしている魔力 嘘言えば嘘が返ってくるこだま 言い分はあるが黙って茶をすする ばあちゃんの秘密はすぐに風に乗る 悪気ない言うから余計おそろしい ボットが開業するか書道塾 言が過ぎて外野がさわぎ出 す 熊本市 松山 香川県 III 県 市 永 宮 神 III 田 尾 保 崎 坊太郎 俊 4 ひかり のり 子 見られているうちが花だったと気付き めぐり巡って僕の茶碗に 昔話の好きな港の洋食屋 洗濯機漱石さんが目を回し にがうりに恐る恐るも箸を付け 夫婦して薬の水を回し飲み バス停へ急ぐ途中でガス電 傷癒えて涙色した昼の月 コマーシャル流れるお手洗の 地蔵さまのおつむに秋がきて止まる 細く長く続いた家計簿の重 親展のママの封書は請求書 舶来のグルメに勝る握り寿司 べんちゃらが下手で左遷の荷を纏 精巧さトンボに劣るコンコル 影法師お前も杖が要る歳か その裏を読んで賢い笛を吹く 乾いてる心に咲かせる水中花 人生の余白で拾う誤字脱字 黄昏の駅で拾った残り福 なりゆきに任せて生きる数え歌 猫の 気 時間 飯 和 和 K\* 歌山 歌山市 唐津市 8 市 古久保 木 久

和

子

本

朱

夏

保

IE.

剣

起死回生しっかり握るこのチャンス 素顔ですわたしの誠意お見せする 大正の頑固時流に乗り切れ 調子良い話は信じないことに 向かい風負けず嫌いの血が騒ぐ 逆発想する手もあって生き延びる 仏ごころ起こして腕をねじられる 失敗を恐れてる間に歳をとり ご先祖へ臍まる出しの掌を合わせ いつも たまさかに背伸びするからずっこける なにもない遺書うなずくか怒るかな 鉋もつ汗ひさしぶり俺が居る 霧すこし晴れてなるほど霧ヶ峰 幻の双肌が舞う諏訪太鼓 河童橋穂高に抱かれとけてゆく 姿見の不平不満をもてあます 栄枯盛衰父在りし日の道具箱 似合わない仮面も生きる道連れに 猫の目に鬼心仏心見抜かれる 抽斗の雑念がまだ捨てきれぬ つの星を見上げている影絵 da 和 竹原市 歌山市 岡 山県 原市 大石 森 Ξ 西 井 宅 Ш あすなろ 不 居 朽 幸 戦争への階段なのか有事法 鎌を研ぐことも覚えてボランティア 手術室の前では息を殺してる 盆がゆく葬送曲か蝉しぐれ 日本ハムへにたりと笑う雪印 鈴の音が聞こえ花野に来てしまう 句会なら行って来いよと病夫が言う 秋灯下寂聴源氏読み耽る 乳臭い腕に麻薬の痕がある タイムカプセルに楽しかった日を残す 古里の名菓とわかる包み紙 母宮に抱かれ手を振る愛子さま 犠牲者の涙世論に火をつける 交渉は対話が始発好感度 華やかな風と遊んできた蝶 おだやかにくらす我が家の鶴と亀 茸狩り野性に戻る眼の動き ポケットの底から過去が浮上する 母さんがエステで少し若がえる |球で老父の叱咤は待ったなし の嗚咽をきいた海がある 4 島根県 島根県 倉敷市 森 伊 井 藤 上 茂 寿 富

美

子

美

てが尻 風四気	<ul><li>性診の先生バツを付けたがり</li><li>をの隅小さな秋のこぼれ萩</li><li>をの隅小さな秋のこぼれ萩</li><li>出雲市 園</li><li>出雲市 園</li></ul>	秋ですネ少し疲れたふくらはぎ 生きている証に開く自動ドア 生きている証に開く自動ドア 価値観というシグナルに止められる イレギュラーした幸せというボール 口止めをされた話に行きあたる	相性のよい人がいる向う岸闘病の友の小さな傘になるアングルを変えて見直す人の価値 出雲市 岸
Щ	Щ		
久	多	あ	桂
子	多賀子	あきら	子
は出して生きよと神が背なを押す を査するたんびに少しずつやつれ とでっきりとせよ足の裏ふくらはぎ のとではいれがまっすぐ歩けない はにしたがまっすぐ歩けない しゃっきりとせよ足の裏ふくらはぎ のとであるし		お節介過ぎて味方に逃げられる 少子化で無縁仏にされそうだ と草書使い分けして生きのびる と草書使い分けして生きのびる と草書使い分けして生きのびる と草書使い分けして生きのびる	会いたくて青い蛍になって飛ぶライバルの塀の高さが見えてくる三面鏡わたしの好きな森がある
藤	7.	(A)	5.5
<b>月</b> 秦	•	田	田

京

旋

風

佳

子

新道が商店街の風さらう 待っていた夕立ぱらり見せて止む 同居して親も大きな脱皮する これからを介護抜きでは語れない チャンスにもピンチと思う癖がある ゆっくりと食べるものではない茶漬け 時刻表すごい約束だと思う 人相が僕に似ている知能犯ヨーイドン聞いて走れば出遅れる 七人の敵の素顔を知り尽くす 波乗りが上手になってから孤独 難聴の姑を相手にする喜劇 喜んでいいのか長寿世界一 海に来てなんと悩みの小さいこと 年金が食べるだけだと念を押す 花咲かす種を探しにバスに乗る バス停でつっかい棒がほしくなる むらさきの袱紗が義理の重さ知る ふる里の庭から虫の声が降る 夏バテの脳蘇る秋の風 漁火に誘われそうな闇 の中 鳥取市 鳥取市 鳥取市 鳥取市 有 岸 岸 録 沢 本 本 沢 せつ子 宏 風 章 子 花 覗きこむ読めぬカルテへ湧く不安 鍵をもつ妻には逆らわぬことだ べっぴんさん揃えて送る梨の箱 身に覚え笑い話へ笑えない 珍客へ日の目を見ない皿をだす 変り者大器の兆し垣間見せ こころざし高くあるかとお月さま 勲章を喜ぶ人と嗤う人 利子よりも多い一円玉拾う 停電のせいでご飯が炊けてない 夏の窓我が家の恥が漏れて出 現役の傘寿半端じゃ無い 大波も小波も海のメッセージ 欠席の口実が無い出て見るか 食欲もやる気も湧いて風は秋 辞書三つ今日のクイズは手強いぞ 愛という宝みんなが持っている 日記には今日も残暑と二文字だけ 下戸なのに酒好きの人ばかり寄る 毎日の音読親は暗記する 一連の仏事も無事に夏終る 努力 る 鳥取県 鳥取県 鳥取県 石 新 羽津川 谷 家 完 公

司

乃

わず波乗り弾む日本海 取県 ± 橋 睦 子 渇水のダムに車が現れる 剪定の端から庭が広くなる 素うどんがおいしいときの隙だらけ

レントゲンに恋の傷跡写らない

|季問

コスモスの笑顔が待っている歩道 株わけの花に期待をして冬に

萩すすき四十五度に垂れて咲く

思い出を山から貰う独活の花

晶

門 脇

米子市

太陽にひまわりきっと自己主張 ぶつぶつと栄螺の不平きいている 夕蝉

が八月の暦終らせる

梨の木が収穫されて深呼吸

秋日和人懐かしく赤蜻蛉

生き残る方程式をといている

米子市 政

出

日枝子

禁断

の桃を齧ったミステー

空間に身を委ねつつ旅をゆく

底なしの暑さ金魚の泡もふえ 究極の波乗りこえる立ち泳ぎ

除けすぎて左ばかり塗る車 病院と病気で同期盛り上がる

数々の 痛み加齢という事実

米子市

白

根

3

4

梨とどく日本中から谺する ラムネが刺さるからからだった喉ほとけ 国文祭いよいよ手綱締めなおす

> 子 気のおけぬ客だキッチンでお茶にする

毎食が命をつなぐ源だ

ほろ酔えば民謡うたう父が好き 長い目で見てやりましょう反抗期

危険信号出たぞ食事に気を遣う

煌めく星にあしたの幸を祈ります

墓場まで持ってゆく気で金貯める 悪足掻きばっかりしてる青い鳥 脱皮して鮭の巣立った母の

III

倉吉市

\*

田

幸

子

リストラは油が乗った頃にくる

ばあちゃんは口にテープを張っておく 西宮市

西

VI わ 多

いい友と熱いお酒があれば好い 時々は悪と組みたい時もある 刻まれ

て只の石ではなくなった

あの 空の青神話ストンと落ちてくる 寸志には温い心も入れておく 頃はメルヘンだったお月さま

米子市 光

# 玲

子

兵庫県 大 谷 幸次郎

尼崎

市

長

浜

澄

子

夕立が雨滴となって遠雷に

老僧に団子の艶を褒められる やせ蛙泳ぎの技は冴えている

こがね色一色で待つ村祭り 気位も目玉も高い金魚買う

中

塚

相生市

言い出した手前定刻五分前

キッチンで定年制の一人言 足並みを改札口で揃わされ

役割りを一つもろうて嬉しがり 手拍子の中に乱れたのが一人

屋

市

黒

田

能

子

容赦なく終りを告げる笛が鳴る

席ゆずるに中途半端な歳らしい

フィナーレはショパンの曲と白い バ

ラ

衝動買い旅の土産をもて余す

八合目ちょっと休憩長すぎる

千と千尋お伽話も様変わり

尼崎市

内

 $\mathbb{H}$ 

美也子

踏んばった今日一日が宝なり

老境へ負わず気取らず風の旅 働けば老いと言う字もふと忘れ

ブランドも失墜しそう百均屋

礎 石

花時計 思い出の味には賞味期限なし

福耳と言われた耳も遠くなり

本性はラベルを変えて見たとても

尼崎市

松

下

比ろ志

大殺界らしい予期せぬ事ばかり

前進も勇気 後退するも勇気 試行錯誤つづけ夫婦という鋳型 平穏に言いたいことも腹八分

ほどほどに枯れた味出す父と母 綺麗な時が流れてる

光るのは心の底にある真珠

嫌なことやってられんとお茶にする 年寄りのわがまま心向くままに 反省はするがひらりと身をかわす

目いっぱいおやつしをするヒステリー 八十代とても自由な風の下

台風がみんな外れて秋迎え 酷暑大雨 遠い娘と長電話

海越える総理の胸に波しぶき 星見えぬ空に芒が背伸びする

OB会に集える人は幸せだ

春 城 武庫: 坊

尼崎市

尼崎

市

春

城

年

代

手の込んだ芝居が出来るうちの猫	世も末と言いつつめしを食べている	効能はどうあれ薬には弱い	尼崎市 田 辺 鹿 太
爆発の寸前顔をだす遅刻	頭では分かってる腹八分目	入院の友を気にして飲んでいる	川西市 西 内
			朋

月

夏末み分交の干後時上まるケアハウス手花火囲む車椅子
---------------------------

幸運は寝耳に水でやってくる

港まで来ると訣れを思い出す

銭湯の帰り月見る話し声

おそろしや今日八月の庭の照り

伊丹市

Ш

崎

君

	耕
	治
人生にスマイルという機微の花	神戸市 池

田

善

守

一・三日だから楽しい孫と風呂

亡妻の日記に知らぬことばかり 目覚ましを止めたことだけ覚えてる

-	子	l cha		_
にして、三年)子コンドング・ニ、バラーへ向	神戸市	嫁姑 親子以上の仲の良さ	暑い暑い汗ふき出てる生きている	気がつけば古稀という名の歳になり
	木			
	村			
	貴代子			

+	由	344	_	-bt:
友の輪に癒されてゆく寂寥感	事故あまたこわされた幸思いいる	淋しさについ手が伸びる甘いもの	三回忌過ぎてまた来る脱力感	荒れた庭君を恋うごとバラ一輪

里の栗まるまる太り秋連れる

二度咲いて月下美人の夏終る

川西市

米

原

雪

子

穂

征く人の手も握らずにあの頃は 九・一一の祈り八月六日忘れまじ

あの世とは出来ないものかメール交換

神戸市	Ш	П	美
思い出したように風鈴が鳴る残暑			
水引草小さな赤で秋を告げ			
衣替え痩せたら着られるので仕舞う			
老骨がまだまだうたう反戦歌			
物忘れこの頃アホやなと独り言			

投げられたリストラボール避けられず

横綱が一喜一憂させてい 終焉の準備よいかと胸に問う 休み明け朝のリズムに乗る家族 物忘れ自慢のように話し合い

る

予想紙と英字新聞両隣 名月へ芒一本独り酒 貧相に痩せる女のダイエット ジパングで二人揃うてお葬式 銀婚の頃から逆転した夫婦 切られ役あって残った枝光り 剪定の枝毎にある自己主張 案山子にも御苦労願い稲実る 盆栽の松に自由のない躾 土に生き土に死ぬ気のほほかぶり 三田 三田 西 宮市 市 市 久保田 秋 北 野 元 T 哲 + る 男 代 欲しいとき欲しいものだけ買う暮らし 甘い香を部屋に残して孫帰る 甘い罠と知りつつ嵌る甘ったれ 枕もと元気を出せと朝日さす 地球儀がいろんな欲ではちきれる 百円の賽銭安心買いました 護摩札は二つも歳が跳ね上がり 毎日の仕事をくれるプランター イチローの顔が毎日でるテレビ 酒追加ふと肝臓の御機嫌は 西宮市 西宮市 西 宮市 Ш 井 坪 本 Ŀ # 義 松 子

煙

手漕舟 嫁かぬ娘が黙々彼岸仕度する 子供の絵いたずら書きではありません 視力あるうちにと旅へ誘われる あの人の嘘はビョーキと笑う妻 老船頭は話し好き

満天の星に会いたい街ぐらし

お地蔵さんのおわさぬ街に住みなれる

終点でおりて歩いてソバの花 分っててもウェーと思う利息なり

宮市 菊 池 トミエ

鈴の音がやけに大きい空財布

西宮市

亀

尚

哲

子

どこまでの嘘かまことか酔芙蓉 崖っぷちに根を張る度胸百合の花 ひと休みしたら知恵の輪ふっと解 なーるほどと納得上手聞き上手 遺伝子組み替えミニひまわりの背の低さ 17

石仏が並ぶ野原を守る里 南無大師祈り続ける墓参り 原爆忌平和を祈る夾竹桃 老人に言葉巧みに接近し アフガンの飢える子供は裸足なり

	夏休み飲んで寝て起き食べている	日記帳ぼくの心のコピーです	絵日記の第一ページ夏の海	西宮市 刈 田 泰 司 大和郡山市
うてみる		×п		郡山市
				坊
				農
				柳
				弘

すり鉢の底で未練をすりつぶす 宮市 門 谷

少しずつリズムが狂い喜劇になる 人ひとり許せぬままの秋の風 息を入れて余生の風を読

たず子

両手両足しっかり上げてウォーキング 西宮市 緒

CT検査の結果待ちですお月さま

方

美津子

だんご鼻いつでも甘くみられ 甘いもの嫌いな父の糖尿病

がち

籠

水際を幾度走った父の靴

いち早く秋の姿に鰯雲

ああ夫婦老いの足並揃わない

古

姬路市

JII 奮 水

ワラを積む夕日に溶ける父の背な

香芝市

大

内

朝

子

花摘みの花になれない彼岸花 朝顔が少し小振りに秋を咲く

まだ胸がキュンとなるからおもしろい 髪型を変えて新たな風を待つ

自転車を天まで漕いでゆく秋だ 奈良市 天 正

八十路のパワー足元もふらついて 青い酒ついで名曲に酔うている 旅人となりて故郷の土をふ

ひと刷毛の雲かかりいし三笠山 菩提樹の下で勝ち負け口にせず

労いの言葉に泣いた定退日

奈良市

米

田

恭

昌

川の字に寝た子も今は反抗期 ITの渦に溺れている父さん

幽霊も怖くて出れぬ文化都市 背信の移り香プンと午前さま

道百選

鼓弓率いる風の盆

無農薬表示に信条逃げている 好物を集め野戦の料理する 骨折の妻に代って市場

ダム涸れて元学校の基礎が出る

-20

+

梢

和 歌山県 中 後 清 史

やすらかな妻の寝息を聞く安堵 みみっちい話は止そう秋の夜

どうしてとなぜに梃摺る児の育ち

身から出た錆がパンチを浴びている 九条を守る砦にいる誇り

和歌山市

取り敢えず笑って済ます勘違

屋上のおいなりさんが守るビル ファックスでカタカタカタとくる投句

CMで伸ばす老舗の底力 中座全焼私の若さ焼く如く

置 当 代

如月の事故からずっと疎遠なり(2/15交通事故に遭う) 歌山 市 玉

まだ少し早いと閻魔に帰される

忘れよと言うがショックが強すぎる 意のままに動いてくれぬ指五本

命拾いをしてほおばった握り飯

和歌山市

楠

見

章

子

シンプルな暮らし風鈴楚々と鳴る すれ違う妊婦はみんな美しい

朝顔のやんちゃな蔓が呼んでいる

受胎告知広がっていく青い空

幸福の玉がふくらむ三ヶ月

千 秀

桜

井

気配りが空回りする秋の風 地球儀を回してさがすビンラディン

俺よりも先に死ぬなと含められ

アザラシが人に怯えて逃げまわり 恋心命の炎尽きるまで

平手打ちくれた貴方は福の神 卵一つ気軽に借れる路地住 丸腰で来たライバルに隙がな まい V

一戸建ちへ終身刑のローン組む お歳です実も蓋もない聴診器

ゆっくりと胡坐をかいて泥鰌鍋 和歌山市

Ш

根

めぐみ

バスツアー口が食べてる喋ってる 仲間からはじき出された流れ星 口笛を吹いて不惑のふりをする

実相をみつめ毒舌のみ下す

献立は夏バテ防ぐ嫁の知 歌山

市

吉

村

まれに会う血縁いつも喪がからみ 構えなくていい友達で安らげ 3

ブランドもユニクロも吊る孫の部 いろいろの顔して無事に今日暮れる 屋

和歌山市

上 地

枝 鉄

和歌山

市

治

21

風向きを変える素顔が炎えている秋彩の深さに惹かれ逢いに行く	手ぶらでもいいからすぐに翔んで来て	覚悟した運命のなかで抱く絆	空腹を癒す峠のにぎり飯	和歌山市 松 原 寿 子	強かな汗拭い去る萩の風	どんと来てぶつぶつ帰る雷さま	千灯に笑む化野の仏たち	マンションの独りを覗く夫婦鳩	Eメール信用したら火傷する	和歌山市 福 本 英 子	扶養家族の妻があれこれ指図する	食べすぎと食べない孫が居て不安	煽てには乗らぬ私を御存知か	いつだって自分正しいのは貴方	確実に母の血を引く慌て者	和歌山市田中みね	夕餉には氷川きよしに似たさんま	ナイフ・フォーク二組セットして秋に	本箱の隅に埋もれる縄電車	リストラに妻子支える椅子がない	カタルシス月の光の輪の中で	和歌山市 福 井 桂 香
喜寿過ぎて人生喜劇だと思う似たような顔集った従兄弟会	敬老日すめば孤独な万歩計	敬老の日ぐらい酒を提げて来い	敬老日五体の電池チェックする	鳥取県 上 田 俊 路	有難うだけで心の和む親	歯に衣着せぬ有名ゲスト陣	親の苦労知らず大きな顔をする	忠魂碑空しく風化して平和	町外れ突然出来たニュータウン	, 海南市 谷 口 義 男	突然のことで香奠張り込めず	奥様によろしくと言うライバルよ	空想の旅に出かける時刻表	旅心見知らぬ人に会いたくて	列島に住んでよかった花暦	海南市 三 宅 保 州		看護士のこぼれ笑顔に救われる	病院で待たされてから不調風邪	山の湯が恋しくなって来る九月	なるようになって九月の空が澄み	和歌山市 細川 稚代

鳥取県 土 橋 は るお

にはいつも他人を立てている

美しい人と被って見たい波 腹の皮縮んで狂う腹時計

尻餅をついた振りして物拾う

寝て待っておれどチャンスは巡り来ぬ

鳥取県 H 村 きみ子

今朝もまたチラシを覗く夢覗く

苦をいくつ耐えたのだろう古のれん

新鮮な野菜下さるおばあさん

自律神経失調症とケンカ中 泣きぼくろあるけどわたし楽天家

鳥取県 崎 みさ江

喜劇もう始っているもの忘れ 人生の午後に喜劇の幕が開く

悲喜劇の根っこは一つかも知れぬ

椎の実と一緒に拾う幼い日 咲かせたら忘れてしまうお礼肥

鳥取県

绤

村夫子卒然と逝く日本海(村夫子と評された多哥由さんを偲ぶ 5句)

片想いと地酒とバラと多哥由さん 恋心うたって照れた村夫子

村中を集め旅立つ村夫子

寬 子

鳥取県

近

藤

春

恵

弛みない句の武者修行あの世まで

の風に稲穂が重く揺

このところ雀蛙も田に来ない 朝顔 の棚に繁って花小さく

の孫が髪染めやって来た

テロ一年隠れたままのビンラディン

玉

森

武

子

倉の鍵ガチャンとかけて今日終り 鳥取県

じっと見る今年の稲の出来上り 迎え火をたいて賑やか盆に入る

今日の海ひどくないでる笑ってる 人生の波はそれぞれ違う色

身体中まつりになって輿かつぎ 鳥取県

朝の空気いっぱい吸って気を貰う 人情はいつもあふれている故郷

童唄歌いたくなる田舎道 いびつだが手作り茶器で飲む新茶

満点をあげたい夕陽今沈む 満点は無理無理親に似てるから

逃げ道を考えてから意見吐く 変身をしても蛙は蛙の子 満点はあげられないがいい嫁だ

> 和果 林

露 杖

黒

田

くに子

子供等に言って身辺整理する無口でも温い心は通い合う病床の窓から余命ふと思う病の窓から余命ふと思う	ででは でである。 でである。 ではでは、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 で	能かしら心わくわく持つ受話器 出来不出来みんな揃って親思い は来不出来みんな揃って親思い にその赤長いこと長いこと によった。 によった。 は、これでは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は	を見にひとつ老いたという証 運ばれた独り住まいのおばあさん 運ばれた独り住まいのおばあさん を見にひとつ老いたという証 を見にひとつ老いたという証 のおばあさん	鳥取県一西
	沖	田	尾	原
	彰	幸	か つ 乃	艶
	雄	枝	乃	子
大声で笑えば悩み逃げてゆく年金で逃げも隠れもせぬ暮らし年金で逃げも隠れもせぬ暮らしりれてるこころの奥は見抜けない	鳥	県東県 小 公 での蝶ホクロの位置がよく変る での蝶ホクロの位置がよく変る での蝶ホクロの位置がよく変る はできる母の注意は天の声	は 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	鳥取県小公
	羽	谷		谷
	直	孝	次	

年毎に脳の軽さを知る枕光らない余生ゆっくり石を積む晩学は文字の大きい辞書と更け晩学は文字の大きい辞書と更け夢おぼろ遠い昔のままの里	栗おこわ子らに見せたや秋まつり飾らない言葉で回す夫婦独楽をいるとり芝居がまだつづく秋の畑ひとり芝居がまだつづく	嫁のない息子に老母の手弁当へいるさとに悲しさ捨てる場所がないたるさとに悲しさ捨てる場所がないたるさとに悲しさ捨てる場所がないがあるさとに悲しさ捨てる場所がないがある。	自分以上にならないように生きている 三世代 洗面台の壜の色 三世代 洗面台の壜の色	鳥取県
	福	さえき	下	原
	田	<b>*</b>	田	
	登	P	茂 登 子	みさを
	美	え	学	を
変化球まともに受ける癖があるいじわる神が母の笑顔をかっ攫いいじわる神が母の笑顔をかっ攫いいのの窓みんな閉めよう母が病む	タ食は熱燗がいい熱帯夜 鳥取市 倉 益かの傷直ちにお酒治療する 小の傷直ちにお酒治療する かの傷直ちにお酒治療する	は が が は が は の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	はの眼 前罪許す慈悲溢れ 原歴書に変り者だと書いてない を疑って見る死亡欄 はの眼 前罪許す慈悲溢れ はの眼 前罪許す慈悲溢れ	鳥取市 岩 原 喬

鳥取市	加	藤	茶	人	鳥取市 山 宮 愛 恵	忠
とりあえず資格はあるが就けぬ職					夏草のパワー我が家が好きらしい	
甲冑を脱ぐと私は泣き上戸					ガラス戸へ守宮が元気つけに来る	
飲む打つ買う男なんぼのものですか					丸描いて丸の補修をねんごろに	
エレベーター何を思うか皆黙り					特報にくだけた腰が起立する	
病人が太り付添人が痩せ					おリボンも母の生甲斐フラダンス	
鳥取市	宮	脇	道	子	鳥取市 杉 本 孝 男	为
切られてもまた咲く韮のしたたかさ					そのままで息を止めてが長すぎる	
野ボタンの花を数えて夫の影					人生のらせん階段よじ登る	
散歩道高笑いする老いた友					池の鯉足音聞いて餌ねだる	
我の強さ歳におんぶで顔を出し					良いカメラ買うと旅路へ足が向く	
青春をお国に捧げ老い最中					みな元気わが家の平和揺るがない	
鳥取市	田	村	邦	昭	鳥取市 田 中 憧 子	1
いいテストばっかり親はみたくなり					入院の妻は支度も家事もして	
これからは妻の健やか祈りたい					気の弱さ見抜いて試食無理にさせ	
沈黙はプライドなりという男					笑ったら損するらしい友の妻	
貧乏性やはり多忙が性にあい					安心へ旅にも薬ひと揃え	
悩みごと夕立に消え明日がある					テレビつけ時計代わりはもう止そう	
鳥取市	山	本	益	子	鳥取市福島庸一	_
人格のレベル上昇苦戦する					目立ってはならぬ心が揺れている	
朝食抜くとわたしの脳は目覚めない					喜んでくれる悪友ひとりいる	
リハビリに歌う童謡ハトポッポ					辻褄を合わす冷や汗かきながら	
現世には油断あやつる鬼が棲む					ひと言を言えない悔いがいつまでも	
満たされた回り道なら考える					パニックのたんびに度量はかられる	

鳥取市 徳 田 ひろこ	鳥取市 福 永 ひかり
笑い声そしてピアノも漏れてくる	神様に聞えるように命乞い
老醜が漏れないように気遣いぬ	半月も大事な時に寝てしまう
馴染客だけに配っている素顔	疑えばあれもこれもが黒くなる
次望の皆没限りなくつづく	コだナ ま 一人 立 ち し て い る の だ が

107

7

倉吉市

猪

JII

働いていないと損をしてるよう 不景気がビラの上にもビラを貼る 色のない夢ばかり見るわが余生 勘のいい人だ強さを仕舞い込む 踏み台に乗っかる日々の喜劇など 欲望の階段限りなくつづ 鳥取市 夏 目 粋 新二千円札いったいあれは何だった 最後には天が裁いてくれるはず L ナレ に 一 ノ ご せ し て

臓器移植ハートまでもが同化する 善処します期待は出来ぬ言葉だな 愛子さまのファッションママが真似はじめ タマちゃんに河川汚染を教えられ

腹割 私も痛む心を持っている って話せる友がいて足りる

遊ばせてくれたら治る肩のこり 浮かれすぎハートの中を見透かされ 細やかな布だ手塩にかけてある

忙しいけれど寝る暇だけは取る サポーター忙しいときありがたい 好きにやり忙しいとはぜいたくだ あれこれと引き受け今日も忙しい

蝉むくろでも殺生はできません

鳥取市

春

木

圭

郎

忙中も好きなことして息を抜く

鳥取市

武

田

帆

雀

大船に乗って買えない肉コーナー

日ハム入りのサラダに嘘が盛ってある 看護師の笑顔は注射より治る 正論をぽろり顰蹙買いました

> 最 Ŀ 和

> > 枝

倉吉市

保育器の中の無限が欠伸する

よう飲むと言うな飲むから働ける

口髭の剃り忘れしてお人好し

選挙来るたびに大事にしてもらう 雑巾を振り上げ妻のハエ叩き 名刺帳一冊人の浮き沈み

倉吉市

野

口

節

子

腹心の秘書が秘密の裏話 都合など聞かずに万障繰合わせ アリバイがばれてしまった領収書 しがらみが無く独裁になって来る 矢印が途中でとだえ午前様 米子市 なに気なくむくげが咲いて散ってゆく 泥だんご私も中に入りたい 生きすぎたようにも思う長い夜 神さまは逆転劇を好まれる 戸があかぬ隣へ鍵でたしかめる 共に老いうれしい時を分ち合う 転がってだんだん円くなる小石 老年の務め遺言書きましょう 平凡を大事にしてる馬の脚 米子市 あのあたり赤く噴きだす彼岸花 長かった峠をこえた海の色 老犬を庭の月夜に座らせる 人百態 私もしっかりその一人 白い風人にやさしい秋つれて	腹心の秘書が秘密の裏話 都合など聞かずに万障繰合わせ アリバイがばれてしまった領収書 しがらみが無く独裁になって来る 矢印が途中でとだえ午前様 なに気なくむくげが咲いて散ってゆく 泥だんご私も中に入りたい 生きすぎたようにも思う長い夜 神さまは逆転劇を好まれる 戸があかぬ隣へ鍵でたしかめる 共に老いうれしい時を分ち合う 転がってだんだん円くなる小石 老年の務め遺言書きましょう 平凡を大事にしてる馬の脚 米子市 常 のあたり赤く噴きだす彼岸花 長かった峠をこえた海の色 老犬を庭の月夜に座らせる 人百態 私もしっかりその一人 白い風人にやさしい秋つれて	対して、 対して、 を看る月日の長さ振り返る 倉吉市 山 中 康 子 を有る月日の長さ振り返る 倉吉市 山 中 康 子 をフェスタ今日まで生きた甲斐がある を言っこそと国文祭がうるみます 宝くじいつかいつかの夢を買う 全方こそと国文祭がうるみます 宝くじいつかいつかの夢を買う 全方にんげんのなりンゴに負けている ロダン像みて頬杖に自信つく 雨宿り話はつきぬリンゴに負けている ロダン像みて頬杖に自信つく 原にんげんの驕りが氷河まで融かす 大企業の椅子が古物市に出る たん業の椅子が古物市に出る を引の側に通され表彰額ずらり 色所の奥に梅漬けラッキョ漬け
	井 見 戸	一

鶴

郎

子

き

信号が青でも危険おきているV字型鳥の社会もある序列仏わくわく松茸飯が噴いてくる「なっクハーケン未踏の山に憧れる」長野台風大あはれして元の鞘(知事再選)	都会人寝不足顔の並ぶ朝 米子市 野 坂 な 書道展記帳する手の重くなる 米子市 野 坂 な ぶ三日厨に自分取り戻す	タ日という癒しは海のセレモニータ日という癒しは海のセレモニータのという癒しは海のセレモニータのという癒しは海のセレモニータのという癒しは海のセレモニータのという癒しは海のセレモニータのという癒しは海のセレモニータの大きでは海のセレモニータの大きでは海のセレモニータの大きでは海の地では、大きでは海の地では、大きでは、大きでは、大きでは、大きでは、大きでは、大きでは、大きでは、大き	九月十三日七十九歳金曜日 米子市 林 瑞乗用車軽を十年乗るつもり 米子市 林 ポープ かんり	米子市 本 吉 宗
	4	枝	枝	光
逃亡者緑になって森を出る隙のないカラスが鳩に油断する酸欠のわたしに星が降って来る酸欠のわたしに星が降って来る	この夜景平和と思う街明かり 大企業案外モラル無いようだ アフガンに学びの笑顔輝く眼アフガンに学びの笑顔輝く眼	妻と娘の話僕には無縁なり 松江市 小園が好き人間だってもっと好き 鬼の留守妻の携帯昼寝中 鬼の留守妻の携帯昼寝中	水たまりいくつも越えて強くなる水たまりいくつも越えて強くなる 大敗を糧にしながら七十年 ひと夏を癒してくれた発泡酒 方言で喋るとみんないい笑顔	島根県多名
	Щ	Щ	島	多々納
	昌	注	凇	テル子
	枝	湖	丘	ル

松江市 JII 本 畔

か雨森羅万象慌てさせ

にわ

どんぐりも転がりながら風起こす 足の裏忙しいのを知っている

前掛に風を包んでお見舞に

足の甲少し膨れて残暑かな

三雲市 竹 治 ちかし

出

幸せの隣に座して気が付かず ときどきは ゆっくりと時が流れる里の家 海を眺めている孤独

生活の匂いが隣から届く

簡単に時が薬と言って去に

吉 出

出雲市

きみえ

1曜日なのにだあれも来てくれぬ

日

役め終え白にもどった夏帽子

疑いもせずに毎日のむくすり Ш 1ほどの山の高さの恩を知る

同じ悩み痛みを分かつ長電話 出雲市

涼し風ゆっくり書斎動き出

富

田

蘭

水

うまい梨二十世紀名を変えようか 愛憎も包んで山は動かない マイナスのイオン右脳に入れかえる

横車押してよいのか迷うのみ

搦手の攻めに弱かったお

城

出雲市

石

倉

背をすっと伸ばして呼吸整える 急がない急がないでと裾を踏 む

お楽にと言われる膝が崩せない あどけない顔でしょじょ寺に出る狸

不器用が日びの暮らしに竿をさす

出雲市

久

谷

まこと

七転び八起きもいまはどっこい 失敗の数も自慢にならぬほど よ

年金の財布じゃ見栄も張られない 老い二人朝の散歩でやる気涌

七十歳笑い袋を膨らます

出雲市

佐

藤

治

代

芸のない私笑ってごまかそう 人の好い夫婦でいつも金がな

顔に合う服がなかなか見つからぬ 輪の中で同化してゆく丸い背な

出雲市

切れた糸結び直しが出来る友 転勤はしないそれゆえ平のまま 呑めばよく舌回転しまたも飲 丸腰の男に刀など抜けぬ

好きでない嫌いでないと天の邪鬼

板 垣 夢

出雲市	
小白金	
房	
子	
岡山	

お遍路の白衣残暑の陽が刺さる 紅白で送る島根の早場米

熱帯夜 網戸を通る虫の

朝夕の涼しさ肌に種を蒔く 秀才はおらずドングリ仲がい U

出 雲市 伊

藤

玲

子

カラコロの日本の風情遠ざかる

お日さまを食べたトマトに気をもらう おにぎりを半分こしたのがご縁

ゆっくりなあなたと暮し忙しい お蔭さま食べたいものが食べられる

温故知新まだまだ父に尋ねたき

Ш

県

小

林

妻

子

命拾いをした戦友にも恩がある

催促のない人間の恩返し とても返せぬ恩も仰山溜まってる

にせぬ方が円満親の恩 岡山

県

矢

内

寿恵子

世相には勝てず老舗の灯が消える

スパイスが効きすぎたのか心病む 丸い輪の中で心も浄化する ードルを幾つも越えた父の椅子

リストラの風は何処まで行くのやら

逆転のスリル風まで向きをかえ ぐずぐずしてるからチャンスに逃げら 気がゆるみ座りかえても大あくび

いい歳をして広告にだまされる

円を拾う勇気を出してみる

晩学の指にこぼれる電子辞書 真実を知っているのは足の裏

夕やけ小やけ子供の声も遠くなり 遺伝子が物言いたそうまるい

かなしみも乗り越えて来た泣きぼくろ

晩酌の楽しみをとるいやな医師 台風がたっぷり恵みの雨をつれ

捨てかけたがらくたをまたしまいこみ ホームラン味方に荒い祝福を

ゆっくりと仮面外して眠り就き

Ш

市 III

端

子

秋風の来て貸店舗札ゆれる 昔まいた記憶もうすれ花を嗅ぐ

さんま焼いた煙の中で食べ終える それはそれでよかったじゃない手を合わ 人間の皮着るけもの類の列

せ

川県 富

坂 志 重

岡山県 Ш

本 玉 恵

をあチラシそんなにみんな読めないよ 悪人も深呼吸する青い空 悪人も深呼吸する青い空 悪人はローマ字若さ見えてくる	日本を変えるコールに酔うていた は見等へ差し入れされし茗荷の子 球児等へ差し入れされし茗荷の子 が見等へ差し入れされし茗荷の子	朝日より夕日 春より秋が性に合う 明探りの茄子が小さな秋を抱く 朝探りの茄子が小さな秋を抱く はかけい かんしゅう かんしゅう はいしょう はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はい	を を を を を を を が の で の で の で の で の で の で の で の で の で が の で が の で が の で が の で が の で が の で の で が の で の で の の の の の の の の の の の の の	<b>倉敷市 小 野 克 枝</b>
諺の通り切れ目は金だった古希過ぎて慶より弔のほうが増え合鍵を渡されてから火のドラマ会翼を渡されてから火のドラマ	字部市 平 田 実 男を知られたの日本探検川紀行を印が無いから人生面白いを印が無いから人生面白いを変すべて平和祈願の種を蒔く	<ul><li>有目紅恥しそうに濡れている</li><li>有目紅恥しそうに濡れている</li><li>がする決意</li><li>がりウムを飲んだ話をしみじみと</li></ul>	大婦漫才オチがつかずに日も暮れる 大婦漫才オチがつかずに日も暮れる お気流 株のグラフが落ちつかぬ たい はい	竹原市 古 谷 節 夫

啖呵切ってみたが私の負けでした 運を天に任すと空は晴れていた 次々に訃報わが耳信じか 美祢市 安平次 弘 道 翔ぶ距離が天道虫の空である 墓参り年金額に見合う花 じわじわと美食の付けの保険料 津 市 宗 水

笑

喜寿の顔目指し精進してみよう ボランティアの靴音母はじっと待つ 落語から浮世の義理を教えられ 過去ばかり追うから夢が広がらぬ 脇役に徹し主役の夢を見ず 唐津市 市 丸 晴 翠 物かげの好きな警官ネズミ捕 露出狂そんな気もするニューモー 陰口を覚悟の軽いのし袋

亡き父母へ土産話を紡ぐ日日 家計簿の中味は軽くした余生 寝室のコケシ今夜は向こうむき 客足が減って思案の招き猫

夜どおしの越中おわら風の盆 敬老日持ち上げられる爺と婆 育児休取ってゴルフの棒を振り 心太突けば涼しい風が吹く 唐津市 桶 輝 夫

安住して大樹の蔭で苔伸びる 大声の舞台に習う点がある 虫の声風より高いひとりの夜 クラス会経費余って小為替で 一次会は気遣われてる幹事役

けばけばと自己アピールののし袋 畑侵入の芝奴に負けてなるものか 抱きしめて子の哀しみを貰いたし 買いすぎたスーパー腹が減っていた 合併で市になりますと言う案山子

平和すぎ唯我独尊ばかり増え

傘寿越え急に命が惜しくなる

自民党カイ党すると獅子が吼え

唐津市

井

Ŀ

勝

視

熊本県

高

野

宵

草

苦労した過去が頑固を支えてる ひと様の句に鞭うたれついてゆく ただ歩く言葉は要らぬ亀と亀

唐津市 Ш 高 明

1º

警察もお手上げ公開捜査する 犬猫を飼うておとこを寄せつけず

熊本市 岩 切 康 子

33

褒められると勝手にシッポ動い 父の歩いた道だと気づくコップ酒 手をつなぐ目の不自由な妻だから てる 県 中 居 善 信 目頭を拭いても泣かぬ父の意地 長命は粗食に耐えたかも知れぬ 目には目を思えど耐えている辛さ 県 成 重 放

任

初ものをたっぷり入れた土瓶蒸し 松山市 丹

役者だな笑顔を撒いて握手して

気を許すひとは一人でいいじゃない

下

美津子

これからはしないと誓う孫に負け かんかん照り竜神さまもおかんむり

許す気の傘が待ってる雨 0 駅

夕立にひまわりの首しゃんと立ち

毒舌の主が涙に脆いとは

ユーモアで答えたつもり座が白け タイミング逃して礼を言いそびれ

口下手の痛み真意が届かない

そう聞けばそうにも見える人の顔

香川 県

瀧

井

勝

体力も知力も老いて情ばかり しい唄が音痴の口 E にある

自家菜園メニュー 失敗の数なら負けぬ言わぬだけ 少ないのが悩み

我が事はみーんな棚に上げてある

橋

宏

松山

市

高

臣

全身が映る鏡に目をそむけ

終焉は手こずった子に看取られる

燻し銀の腕見込まれた宮大工

素っぴんで愉快な女達の 万十で欲にくらんだ目を洗う 宿

高知県

泉

どうしたの 父には見せぬ娘の すずやかに日本の秋をいとおし パソコンのキー一本が越えられぬ 「を終えた善い人顔揃え to 小 澤

お四国

火葬場の煙未だまだ若すぎる

色あせた服気にとめず母の着て

便の色見て健康知る母の愛

清 III 玲 子

県

ポケットに弁解詰 め てゆく

握手する人が味方とかぎらない ブルのかげで両手を握られる

テー

プールより池が得意の河童の子

鮒釣りの池にピラニアかかってる 香川県 池 内 か お n

-34

大生の視野を広げるパスポート パスポート一期一会の夢を抱き 悪うまま少年のまま九十くる 美しく咲く花嬉し声あげる 咲く芙蓉早起き朝を立ち尽くす 願われて務めた教師十余年 真心が通う心に差異はない 自堕落な息子のネジは妻任せ 丸刈りをして男性と間違われ 見栄捨ててサロンパス貼る歳になり ながながと口説いて逆に断わられ ながながと口説いて逆に断わられ を売りのチラシを持って列が出来 秒針が早くて困る楽しい日 K点を越えた一言修羅になる 野菜より草が背を越す雨上り	のの人に会った上で、ボーボールでは淋し過ぎます遠花火 一人では淋し過ぎます遠花火 高知県
須 相 北	赤
郷馬川	JII
井 一 竹	菊
蛙         萌	野
原雲を抜けて故里近くなる 整理する物がわんさかある机 目が合って会釈をされてはて誰だ 同が来る人のおもわくなど知らず りんごの樹喜べ雨ぞ実が太る 雨の日の梟なぜか啼き忘れ 森の樹に秋見せつけて雨上がる がバーコード付いた茸に汗がない ふる里の風だ素直に涙拭く 借りてきた猫が豹変する地酒 剣山に嫉妬も生ける花鋏 落ちこぼれ阿弥陀の坂のたちくらみ 自動ドア抜ければ砂漠無限なり 中流の貌で参加のバス旅行 今日の愚痴 酒に吐いてる泣き河童	コーラスの口の形はみな同じ オットット蟻が獲物を運んでる 弘前市 福 士 慕
ネ 峯 林	-1114

弘前 市 櫻 庭 順 風

アルプスの赤いポストに疼き出 す

入学願書金庫に保存したまんま 駒草の風に耐えてる嫋やかさ 合同葬と泣き叫ぶ

群れて来るはだしの子にもあるチャー チ

地引網

弘前市

出

本

花

匠

敬老会 初招待の面映ゆさ

衣擦れの粛粛として秋を舞

錦着て悟るお山へ秋仕舞 コスモスの君に喝采チャンス撮る Vi

後光拝す孫あんぐりと仏前に

夏茣蓙に大の字になる唐枕

静岡市

薗

田

獏

沓

庭木一本死角になって事故を呼び 一かく迎えてやろう実習生

温

思 い出を胸に畳んで盆供養

ベテランのスカウト原石探 し当て

富士宮市

渥

美

弧

秀

祝米寿 玉入れ歩行リハビリ室が動き出 命はぐくむ金杯

す

大道芸に固唾飲み込む輪の一人 絶景の富士を包むか憎い

燃え尽きる命か空しさも残る

唐突に子の結婚が伝えられ

東京都

後

藤

早.

智

大江戸で呉服売る気の京訛 久々に開く祝い の畳紙 h

平服の招待状に泣く呉服 呉服手に娘に回せばと気を許

懲りもせず無駄玉ばかり打っている 東京都

播

本

充

子

花を売る笑顔が花よりもきれい

性格が良い分損も得もする 犯人は妻だと思う肥満体

先生をやってる事は内緒です

そこそこの利益へ人の目が刺さる

横浜

市 清

水

潮

華

団地まで連れて行かれる迂回バス ポケットの飴で仕事の疲れ癒え

押し通す自分流儀へ敵も出 成功を祈り見守る子の転機 来

頼み事トーンを下げて聞い ている

浜市

小

野

句多留

報復という名の下に人が死に たこ焼きを待つ子供等の舌も秋 ルーキーは研究されて二軍落ち

ホームレス襲う子供の顕示欲

帰省した娘にFAXが忙しい別時計家族四人がみな違いというである。 しんしゅう かんしゅう ほうしん いんしゅう はいしょう はいい かんしん いんしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいましん 紙芝居	山に来て山の高さを確かめる 富山市 酒 井 輝 山に来て山の高さを確かめる 富山市 酒 井 計画に心あそばす山の本	名言も上の空です披露宴 富山市 島 ひかる お陽様に背を押されては動く日々 は 動く日々 が と 褒めれば続く娘の料理	を登んで月がだんだん冷えてくる を登んで月がだんだん冷えてくる を登んで月がだんだん冷えてくる を登んで見がだんだん冷えてくる	横浜市 菊 地 政 勝
旅楽し飛騨の地酒のアイスクリームドラマ万歳 さくらさくらの餅や酒(TV朝ドラマ) 四空の思惟菩薩は笑みながら(郷土館) エア朝ドラマ) 大平の銀杏が今に国分寺(千二百年)	電岡市 井 上 森 生石段を上がる日傘を杖替り も風を心待ちする水不足 おびっ子が寄り切る福祉大相撲	変析の心配もなく三十年(糖尿医) を欠かすことなく嫁の意地 を突めに行く日に席を譲られた を強めに行く日に席を譲られた	冬	愛知県 早川 盛 夫

京都市
高
島
啓
子

剥く晒す母だからこそ栗ごはん 携帯のためなら食費まで減らす

クレジット確実に来る引き落とし

九十四 毎日吸っている葉巻

赤ちゃんへ背の番号多過ぎる

京都市 都 倉 求 芽

かっきりの時間ではじまる防災訓練 カネがあるうちは面白い大都会

地球儀にオゾンの破壊伝わらぬ

水平線のどぼとけのよう雲垂れる

定期検査済んでビールに手がのびる

前

たもつ

タマちゃんが九月の残暑また見舞い いくつでも女に似合う甘い色

自分のためと思えば心楽になり

人の世や白寿の上に茶寿皇寿

恵みの雨さらさら流すビルの街

大阪市

古今堂

蕉

子

わくわくとさせてくれたは五歳まで クーラーも別れ話に更に冷え

こんな波と思うた波に足とられ 生む事を考えさせる世になりぬ

エンゲージ刻んだイニシャル薄くなり

医師の談聞いたばかりにどん底へ

女偏に太刀打ちできぬ長電話

酷暑続く中新米の有難さ

子

うかうかとしてたら今日も陽が沈む 同情をすると男がすたります

骨だけは若くなれない検査表 目も馴れた茶髪携帯胸の線

焦げた鍋母いつまでもほかさない

大阪市

木

有難うメスが命をくれました 三ツ指の話は嫁も知りまへん

バトンタッチやっと余生も楽しめる 義理の仲 躾加減も苦労です

皺入りの服バーゲンでやっと買い

限定の札でさばいた売れ残り

わたくしのどくろ歯医者のレントゲン 水面下知らない国があるらしい

メデュウサの顔みたようなグラウンド

絹

子

世紀越えここに陽の目や一葉忌 仕掛け花火これぞホテルの予約席 駅からの電話に先ずは茶の仕度

浦

 $\mathbb{H}$ 

綏

信じると冷えた心も融けてゆく 大阪市 糸 昭 子 苦労する妻のいびきに手を合わせ 暑いとも言えずに妻の台所 大阪市 奥 村 Ŧi.

月

それぞれの夏終りたり地蔵盆

汗の栓飛んでしまった酷暑です 勝手口覗いて猫の朝帰り

信じると固い蕾も花になる

本 間

大阪市 満津子

お茶入れて話しましょう午後 借金も財産も無し遺書もなし

ワン切りの電話は誰か気にかかり

錯覚か当り籤また見直して 今日一日有難うさん無事に済み

大阪市 安 達 はじめ

冗談もうっかり言えぬ今日の地位 熨斗袋義理の篤さを量られる

残り火をしっかり抱いた老い二人 貧しいが友は沢山もっている

人恋しワイングラスが秋を告げ

大阪市

中

 $\mathbb{H}$ 

あ V 子

花束のかげでチラホラする打算 ぬけがらの蝉をこわがる小学生

生かされて生きて今宵の天の川

岸和田の幼児ダンジリリズムすき 大粒の妻の涙におし切られ

> このチーム鳥対策プロジェクト 焦りからパンダに飲ますバイアグラ 起きる前床で体操今日のため ソ連消え大国のエゴ強くなり 茶柱を見ることのない粉末茶

席替えて好きな彼女と並んでる

悪い予言当らないよう祈ってる 遅刻せず間に合ったけど日を違え

八月の脳裏離れぬきのこ雲 宿題の日記天気は纏め書き

その時の事を考えする整理

大阪市

小

泉

ひさ乃

耐えている背がいとおしい束ね髪

良く使う脳から知恵が湧いてくる 一日が始まる母の勝手口

かき氷一ぱいの幸せだってある

子

大阪市 置 英

不況など忘れて狂う阿波おどり 天秤に酒と命をのせて見る 調書取る美人刑事の河内弁

玉

夢

大阪市

榎

本

39

にがうりを薬と信じ食べてます配が、おりので、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これで	書き魔大阪市津	大阪市 津高さ避け夜のウォークスリルあり と と 電話を貰う誕生日 かまなのに雑用する気おこらない ひまなのに雑用する気おこらない ひまなのに雑用する気おこらない	を 注徳の二字が転んで行く谷間 さわさわと青田を渡る秋の風 さわさわと青田を渡る秋の風 を はずの小指がうずき出す	大阪市 津
	守	守	尾	村
	なぎさ	柳伸	柳 右 子	志華子
農薬へ虫食べぬ菜を人が食う生きるため一匹ぐらい鬼も飼う生きるため一匹ぐらい鬼も飼うが入れで出逢った遠い日のわたし	大 前 りち 様	大阪市 ででは、 ででは、 ででは、 ででは、 ででは、 ででは、 ででは、 ででは	大阪市 日本にブドウを供え酒注ぎ 大阪市 日本にブドウを供え酒注ぎ 神木にブドウを供え酒注ぎ かんしょう しょう アルカー はい	大阪市 去
	大	鶴		寺
	Ш	田		井
	桃	遠	章	東
	花	野	久	雲

若い時には苦労している丸い人係達が線香持って墓参り係達が線香持って墓参りが、 いってる	<ul><li>流木を磨き時間はとまってる</li><li>カンテキの秋刀魚を猫が見張ってるかくし持つ特技がひょいと顔を出すかくし持つ特技がひょいと顔を出すかくし持つ特技がひょいと顔を出すかくし持つ特技がひょいと顔を出すかくし持つ特技がひょいと顔を出する</li></ul>	他国より青テント民先ず救えをはのぼのと御子の周りに笑顔沸くをないが森と消えをしただ株へそくりが霧と消えをしまらずの場まとまらず。	大阪市 東命のびて何か不安がつきまとう が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 が、大阪市 大阪市 大阪市	
	岡	栗	中	ſ
	本	田	村田田	1
	吉 太 郎	久	叡 達	Š.
	郎	子	子  子	-
気を楽にインスタントの抹茶のむーつまみ塩の力で粥すする一つまみ塩の力で粥すする真四角に生きて一人が浮いている真四角に生きて一人が浮いている	大阪狭治を見ります。大阪狭治を上返事退屈らしい午後の祖父生返事退屈らしい午後の祖父生返事退屈らしい午後の祖父を追める。	日本丸どうするどうする株下落府本地震近い近いと言われても南海地震近い近いと言われても不審船上がり有事の皿並びで開済切手気楽な利殖法	若者に正義の日本期待する動労に感謝の暇なくパートこの国が菊で埋まる文化の日はらまきの外交いつか綻びるばらまきの外交いつか綻びる	
ぶのむ 子いる	狭る山市	次 木 市	泉 佐 野 市	
のむろう	狭山市	次 木市 藤	泉佐野市 山	ij
のむといる	狭る山市	次 木 市	泉 佐 野 市	司 

内長野市 水 谷 Œ

子

秋風を群 n て鰯が泳 いでる

声出ない友との会話紙とペン 満洲 の消えた国旗を孫にかく

阿波踊り今年は出れん日ハム連

渡し舟清盛も聞く瀬戸のうた

本 弘

森 風

交野市

心では謝りながら愚妻です 河内長野市 Ш 富美子

時々は目の保養にと百貨店 年金がビールに替えて発泡酒 中座燃ゆ正弁丹吾道連れに 覚えるに十一桁は大き過ぎ

不発弾 目が澄んでいたばっかりに騙される ハロー ワークに満ちてくる

秋暑し不正データに偽ラベル

道頓堀わたって行った片思い 広辞苑ひらいて探る発火点

河内長野市 植 村

代

岸和田市

木

村

正

剛

満天の星見つめてた夕涼み もう会えぬ隙間なく星ば った夜(昭和十五年想いで

ぶんぶんと蚊に朝まで起される 誕生日孫に買う自転車を迷う 流れ星降る夜怖いと幼い日

> H の丸の歴史が背負う深 傷

欲張りの日課ぎっしりカレンダー

豊年の祭囃子を聞く案山子

パソコンと付き合い始め若返り ああ地球ストレスためて回ってる

岸和田

市

井

クーラーの使用にビックリ電気代 年金の記事は逃さず読 んで Vi る

やれうれし水やり休む雨が降り 秋風に脳細胞が動き出す

盆踊り孫は興味を示さない

入れない墓へせっせと詣る夫 ふる里はお盆の供養だけに在る

限りなく侵略可能な有事法 新妻も死語となるできちゃった婚 子宝もあてにならない車椅子

候文一 よろめきながらゴールイン 度も書かず喜寿迎 え

ビオロンの音を三日月に聞 葉と英世が世間渡るら Vi

てい る

慌てずにゆっくり逝こう皆の衆

河内長野市 井

Ŀ 喜 酔

伊 東 吉

岸和田市
髙須賀
金
太

熱帯夜とぎれて強し虫の声 甲子園終わり私も夏終える

電話ではとっても若い美女でした

柿の実が叫ぶと秋が深くなる 青空を食ってビルばかりが太る

岸和 田 市 野 H

さりげなく足を踏んでは注意する 結局は値引きで勝負見積書 定年の辞令出発の酒の味 社長とはいえど淋しい独裁者 宿泊簿右に同じと書く住所

岸和田 市 岩 佐

乾杯はいつも私のためにする サラ金のCMばかり見せられる

蝉しぐれやんで改革遠くなる 底打ちの景気を笑う青テント

裁くのも過ち多い人だろう

市 源 田

堺

八千代

揺れたって折れはしませぬ秋桜 げなくぽたぽたしたる水蜜よ

リス飼って向日葵植えているコント

また本音ズバリ言いすぎプツン切れ

オーバーに鏡に笑う淋しい日

市

神

原

文

オカリナを吹くと少年の顔になる

シャンソンの中で掃除も洗濯も マンドリンの弦が奏でる恋ごころ

尺八と琴の余生のはずだった 一上りの三味の次元に恋うつつ

私をズタズタにしたばらのとげ

九ちゃんも空で見ている遠花火 夜半目ざめ鈴虫の音に耳すます

盆おどり娘と二人輪に入り 日は赤飯がつく朝のぜん

市

齋

さくら

買う気ないマツタケ値踏みしてしまう ほんのりと色づく柿に秋の風

大家族ドラマの中で許される 愛しさを詰めた育児記色褪せる 節水に協力したら菊が枯れ

見てくれで汚染野菜を買っている おみやげの和菓子に孫は馴じめない おみやげのバッグ婆ちゃん持て余し 米寿とは見えぬ筆勢曾祖父さん 菊香る曽孫誕生喜寿の宴

> 市 西 村

43

市

黒

真

砂

堺 市 村 上 玄 也

側に居た僕に小言の 流 n

波乗りが下手で日陰を歩いてる

血税を奪い合ってる族

議

員

口紅を珈琲カップに残し秋

悪人の顔で写った免許証

市 渡 辺 さだを

キナ臭い噂たえないここイラク

涼しいね受付嬢の腰ぷりぷり

気分どう婦長と同じ更年期

タイガース見えて来ました指定席 マイコンで動く金魚に餌をやる

虫の目で見るとあなたも隙だらけ

四条畷市

吉

峃

修

パレードを盛り上げているアルバイト

警策の響き禅堂目をさます

僕よりも財布の方が呆けている 暇はある粘り通してみるもよい

吹田市 穴 吹 尚 ±

欲みんな捨てたつもりの仏顔

年金の許す範囲にある自由 名も知らぬ人と注ぎ合う通夜の酒

バブル期に転んだ傷がまだ疼く 菜園の始末に困る大豊作

> 皿の山 雨乞いを祈る小さい庭の夏 回転寿司の息子たち

お彼岸を山で迎える御来光

船旅で世界一周済みました

同居した孫には啖呵きれません うつ時

饅頭とケー

キ二人のおや

吹田市

大

谷

篤

子

歯医者には口紅ふいて目をつぶる

流行の遅れた服でおしゃれする 古日記思い出の恋色あせる

もう一本いかがと言わぬ妻となり 外面だけを見てりゃ成程 近道の途中に並ぶ縄のれん 17 妻だ 傍

書き足した一本に泣くアミダ籤

六千歩以上を知らぬ万歩計

高槻市

Z

倉

武

史

飾り気も洒落っ気もなくて生一本 川柳が余生私のバックボーン

墓場まで煙草は止めぬ頑固 性懲りもなくパチンコの鴨となり 履物を出船に揃え几帳面 症

吹田 市 瀬 戸

愛子さま手の振りようも雅子さま

高槻市

島

克

治

不信任知事満々の返り咲きというでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	ではあちゃんの居眠り肩を貸してやる 会社より家のリストラなお怖い で自慢を次つぎ聞かされ褒められず ではしている。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	にまされてうれしい夜の酒の味 がある。 を垂れ今日の疲れをやり過す を垂れ今日の疲れをやり過す での気焔上げ にするのでである。 には、 には、 には、 には、 には、 には、 には、 には、	大輪の花を夢みて菊作り病葉の流れをじっと見て飽きず病き上る積乱雲に奮い立つ	高槻市
	生.	西	江	左右田
	田	谷	原	田
	義	治 三 郎	秀	泰
	? <u></u>	郎	夫	雄
名刺出ずる	白露とやり白露とやり	手鏡には、大田のでは、田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、大田のでは、日のでは、日のでは、日のでは、日のでは、日のでは、日のでは、日のでは、日	何にでも 大役所へた	
名刺出ずモガモガとボケ第一歩お彼岸の墓へ代参たのんどくうっかりと自分の杖にけつまずく断なかに杖ついた人多いことあの時に涙を見せたのは不覚	白露とやサルビア小さく咲きました白露とやサルビア小さく咲きました白露とやコオロギの恋しげくなり白露とやロンヤリ庭に小さい秋	手鏡に己の皺がものすごい豊中市上がけはよく回ります走馬燈無花果が亡母の味した旨かった無でした。	何にでも丸さが見える兄も歳と生置いて私ストレス捨てる夏大電場で友の心が神に似る反省は時に己を萎縮させ	高槻市
モガモガとボケ第一歩巻へ代参たのんどくと自分の杖にけつまずくくついた人多いこと	安	夏中市 た	歳 る夏 豊中市 山	井
モガモガとボケ第一歩巻へ代参たのんどくと自分の杖にけつまずくとりいた人多いこと	中市安藤	章中市 た	歳る夏中市	井上
モガモガとボケ第一歩巻へ代参たのんどくと自分の杖にけつまずくとりの杖にけつまずく	安	夏中市 た	歳。豊中市山門タ	井

一市市 樫 谷 郁 子

夏が往く風の匂いで秋を知る 酷暑だった汗汗汗で生き抜 た

晩夏には名残りの蝉の声わびし

萩すすき墓石を撫でる秋の風

ケータイで松茸匂いを伝えて来

いわし雲ひと夏の恋折りたたむ

直線を歩き続けた父の靴

富田林市 中 井 P

丰

私を煽り続けるカンナの朱 メル友に遊んで貰う淋しい日 順調と思う息子が書く辞表

橋 鐘

富田林市 大

鬱

軽く言う二つ返事が憎らしい

さよならを言おう嫌いになる前に 人も来ぬ電話も鳴らぬ今日の

うっかりと被った仮面外せない

水鏡恋の波紋に揺れている 田

林市

中

崎

深

雪

誤ちを内部告発する勇気 テロ対策に殺人は許されるまじ ラ色の錯覚おこすコマーシャ ル

ボランティアの妙味はやはり自己のため わたくしも宇宙自身を宿してる

造

感謝感謝朝昼晩の食

父母を敬う歳になりました

ママチャリへ私の命乗せている

この星を揺らす戦はご免です

寝屋川市

酒

井

勇太朗

サー 激辛のカレーわが家は倦怠期 子に辛く孫には甘い好々爺 ビス業父親参観不義理する

阪神の負け込みだしてテレビ見ず 貧富の差テロが尽きない理由とか

やめておこ いや買いに行こ外出着

甘党のヘルパーさんと気が合うた

守口市

結

城

君

子

咲きだした楊梅の彩ほめて 急病に夫婦存在みとめ合い

年金で暮してますとお断り 切り 寝屋川市

Ш

本

Ξ

郎

ばりばりと働きたいがこの不況 縄電車角を曲がって消えてゆき

店の名が書いてる傘の俄雨 欠伸して平和だなーと独り言

奥行の深い貴方に抱かれたい

ストーカーされそう公園の鳩に 寝屋川 市 平 松

かすみ

墓参する姉妹傘寿のナムアブダその時はそれでよかった赤い服我慢する口に放り込む飴ン玉孫が居て孫の手借りる竹細工	を屋川市 太 変屋川市 大 変属を 変属を 変属を 変属を 変属を 変属を 変属を 変属を	接屋川市 江 三劇だな泣いて笑って万華鏡 電劇だな泣いて笑って万華鏡 三劇だな泣いて笑って万華鏡	寝屋川市 坂でかられた人では、大田を出り、大田を出りですりんご買うたびうまくなってくるでした。 でいった 日を思う かたくしがおかしくなった日を思う おたくしがおかしくなった日を思う	寝屋川市 籠
	田		上	島
		ы	高	
	と し 子			恵
	子	度	栄	子
この秋も匂い袋を入れ替える教拗に咲こう造花である限りくといいています。	藤井寺市 鴨ない では できな できます できます できます できます は できる	東大阪市 北平の東京では、東大阪市 北平のがの洪水ノアの方舟目に浮かぶ十一桁私のコード語じる十一桁私のコード語じるではエーゲ海のではエーゲ海のでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずのでは、まずれる供えものできます。	我が社にも来たぞいよいよ不況風年金の話をそっと酒の席おい息子進めてよいか嫁話がい息子進めてよいか嫁話がいまったと電話ベルをう一人孫ができたと電話ベル	枚方市 一
	T与	4C	林	
	43	1.1	-1-	
	谷	村	本	宮
	谷 瑠美子	村 賢 子	本 節 子	呂山久

<b>元炎が本式こなって然えたが</b>	藤井寺市 中 島 志 洋
つたパンの為支ごかれら蚤がよい	羽曳野市 徳 山 みつこ

私には過ぎたお方と断られ 木枯しに帽子とられた千鳥足 冗談が本気になって燃えた恋

子育てが済んでペットを可愛がり

影までがひとり歩きが好きらしい 結婚で見えぬ鎖をつけられ る

ボランティアつくす自分のためもあり 結論がまとまりお茶入れ替える 甲斐性があれば私も妻ほしい

バケイショ 羽曳野市 酒 井

壺

夏休み映画館だけ混んでいる

子を親に預けパパママ

温暖化幽霊とても暑かろう

大空の闇は花火を待ちかねる タレントも線香花火のように消え

この苦海 儲け主義能率主義が生む腐敗 浄土たり得ず送り盆

羽曳野市

 $\equiv$ 

好

専

平

たそがれの駅で豚マン提げている あやまると損する国の住みにくさ

定食を原価計算して食べる

昭 子

藤井寺市

楠

トイレから戻った顔を見られたり よく使う母の形見の虫眼

駅の傘少し小さいなと思 発泡酒冷やして愚痴の相手する V

花時計蝶が逃げないよう回

すこしずつ喜劇の中に生きる場所 年重ね他人のよいとこだけを見る 八尾市

土になり水に還る日まで懺悔 人の輪の外で自分を試してる

寂聴の風が吹いてる彼岸花

すこしだけうるさいけれど孫である 八尾市

内

海

生

僕だけが病人でない待合室 聞く耳になれと風穴あけられる 耳の奥に水が溜まった銭でなく

咳込んで一人の部屋の闇に座す

オナくしの位当たあれる馬力なし

空気澄む細胞がみな満ちてくる 欲捨てた形でしょうかこぼれ 宅配便送る私が満たされ 萩

小 池

松原市 しげお

宮 西 弥

生

八尾市 吉 村

風

躓いて老い知らされる諭される

酒飲めて妻あり八十路竹を踏む

心の笑顔忘れず余生丸く生き

ときめきへ字も踊ってる予定表

わだかまり流して秋の風にのる

ギア入れかえ秋を元気に立上る

八尾市

宫

崎

シマ子

大阪府

澤

田

和

重

杯の酒百年の知己にする

招かざる客も加わり祭りの日 菊日和息子の婚の荷が届き 過去となる夏をビールと呑みくだす

熱帯夜犬もあくびをくりかえす

八尾市

神

原

まさと

窓開けて眠れる町で暮したい クーラーで風邪引きました熱帯夜

追憶の貴女は今も美しい 言い負けてしぶしぶ出した妥協案

墓参りもう秋だよと法師蝉 八尾市

村

上

ミツ子

娘のこころ覗くアニメを見ています 気持だけ走りからだは悲鳴あげ

ごはん抜く薬のむのも忘れてる お断りする言いわけが見つからず

> 更衣 缶ビール冷やして聞いてほしいこと 母のしていたようにする

方言に戻り墓参の立話

別れてはまたもつれ行く秋の蝶 ティータイム帯へ挿しおく秋扇

丁寧語使いサラ金から電話 肩肘をはるから仮面外せな Va

正論が遠吠えしてる縄のれん 離婚の日節目に女強くなる

大阪府

\*

澤

俶

改札機が鳴るテレカード入れられて

二軍でもついて行けたら良しとする

柔らかい顔できびしいことを言う 私にも当てがいぶちの背番号

マスター老いて茶房も古び青春もまたひと言に背中刺された淋しい日

反主流吠えてる声の空元気 白い萩白露の風を連れてくる

大空を仰ぐと視野が広くなる てにをはで半日迷う句の仕立て わが家にも十一桁が二人いる

大阪府 籾 Ш

隆

盛

八尾市 長谷川

春 蘭

子 - 49

倉吉市 牧 野 芳 光

手を抜いた壷が炎にひび割れ る

自販機がお釣りしぶしぶ出してい る

あお向けに倒れてもこの道をゆく マッサージしても治らぬ石頭

米子市 永 井

藁に寝て藁に縋って独り生き

何彼にと兄弟喧嘩飽きもせず 銭美貌無いけど笑顔たんと有る

飾らずに素直に思う心書く

夏祭りのボリュームみんな手話となる 吉

鳥取県

 $\mathbb{H}$ 

孔美子

娘の部屋に施錠疑念は増すばかり やれ湿度ダニ キャンプには蛇もいる

歌舞伎町素顔はきっと偽者だ

取 県 平 井 栄

翁

自販機の前でお札の皺延ばす 藁舟で雛が仲良く旅に出る

年毎に同じ鍬でも重くなる

錦より人出がほしい過疎の村

稲の穂へ太陽さんもほがらかな

取県

乾

喜与志

忙しさ楽しみにして靴を履く

ボサボサの孫の頭を撫でて朝 酒の友遠ざけてから一人ぼち

行く夏を惜しんで白い夾竹桃

夕食に先ず一杯をかたむける 一年ぶりと言う孫の顔すかしみる

アラほんと日朝首脳初問答

気取らないとこが取り得の割烹着 向う岸無限に花が咲いている

鳥取県

西

III

和

子

お化粧を落し本音で語り合う

ひとしずく漏れて尾ひれが付いて飛び

温泉にゆうゆう寂の境地なり

鳥取県

鳥

羽

玲

子

物忘れ 足折った記録のページ重くなり 神平等に背負わせる

老い深し貯めるばかりも味気ない

松江市

佐野木

2

え

焦点をたどれば見える生きざまよ 赤いシャツ今頂上で旗を振る

絵手紙の西瓜食欲そそられる 深夜放送に慰められる不眠症

松江市

安

食

友

子

犬猿のような仲でも一つ墓

今更に自分の歳はオブラート

影絵からすっと近付くドンファンよ

くさぐさが本音洩らしに行く波止場

出雲市

小 玉

江

夏プラン残したままに頬に秋 関プラン残したままに頬に秋 フルバムの昔と遊ぶ雨の午後 アルバムの昔と遊ぶ雨の午後 レベルを下げると幸せ見えて来る ふと我にかえるひととき禅の庭 ラプラン残したままに頬に秋	π	不景気に破れかぶれの日を過ごしています。	がまわりに元気を出せと背を押され がまれりに元気を出せと背を押され がまれりに元気を出せと背を押され	島根県
宮	村	西	中	榊
野	上	岡		原
み つ 江	直	洛	宗	秀
江	樹	酔	明	子
世にあわせ甘みに走る夏みかん 世にあわせ甘みに走る夏みかん をんの音分からずじまい寝そびれる なんの音分からずじまい寝そびれる なんの音分からずじまい寝そびれる 大リーグ野茂は勝っても膨れっ面 待合室咳撒き散らす子 止めぬ親 (医院にて) 待合室咳撒き散らす子 止めぬ親 (医院にて) 様にあわせ甘みに走る夏みかん	を口で鍛えた肝臓弱くなり を力には美人の多い昼下がり 車内には美人の多い昼下がり しょう かんしゅん かんしゅう かんしゅん かんしゅん かんしゅう かんしゅん かんしゅう かんり かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんり かんしゅう かんしゅん かんしゃ かんしゅん かん かんしゅん かんしん かんし	要かさに慣れて不平が多すぎる本の枝に結んでみくじ結果まち木の枝に結んでみくじ結果まち木の枝に対がり三になり	安まと死ねば一心寺へという 海ともにしても師弟の礼つづき 海ともにしても師弟の礼つづき は本捨てることもバブル期から覚え	吹田市 目
21.	22.12		<del>11</del>	早
木	達	原一	上	Щ
政	忠	正	桂	棲

子

央

和

作

世

#### 第73回

### 大阪川柳の会

題と選 各題 日 が 時 を まん 者 + 12 月 河 4 4 顆 内 皺 1 日 天笑 ビル 住 ル本館3F322号宮水)17時開場・18時線 田 △今年 英比古 0 户 1呼ぶ 室締 礒 泉比 切 かさむないという

大丈夫というおばち宮仕え済んで羽化さ の妻が勝手な妥協 はちゃ る 2 の太い #

首

唐

兵

市 本

堅物 く夏をバ 佩載若さは に漫画 1

神礼を兼 所説所望され いますの はじける学園 ta 秋 0

虫

心に触れぬ親心にまた風呂敷が大にな なり 松

岸  $\mathbb{H}$ 

中 市 付む 孫 て

いた心に

る子の

頬をそー

来て朝夕笑う

第6回井笠川柳会笠岡誌上大会

壁 ひこばえ

題(各題2句・3名共選)

「赤」 「青| | 黄 |

/太田紀伊子 三柳 /板尾 岳人 新家 完司 藤井 福島 直球 北灯 千寿 四郎 |河原 \北村 環 1000円 (定額小為替) 発表誌送付

応募要領 B5大用紙1枚に計6句列記 郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社

締切 14年11月20日 (水)

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会宛

> TEL 0865-63-5858 FAX 0865-63-6131 お問い合わせは戸田さだお迄

1位に石碑贈呈(3名・本人希望句・1年以内建立) 3才に粗品呈(句碑獲得者除く24名)

会員募集 新会員募集しています。

年会費 2000円 年4 回あすなろ発行

### 京都塔の会 秋の吟行句会

日時と行程

11月25日 (月)

10時20分 阪急電車「桂」駅西口集合 10時30分 送迎バス乗車

紅葉の「嵐山・高尾パークウェイ | 経由 12時頃 京都北山オオモリサンバレイ着 昼食(地鶏すき)・句会

京都市北区大森東町294

TEL 075-406-2822

4 時頃 バス帰路周山街道(162号線)経由 桂駅 5 時頃着

☆歩くところはありません

当日雑感・背・やたら・凹凸 (各3句)

会費 5000円(当日)

申込み 11月15日まで 都倉求芽あて 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通 松原下る弁財天町328 075-351-4109

# 選

愛子さま白菊に顕ちバラに顕ち愛子さま日本の玉のごとおわす 変子さまほら鳩ポッポ汽 車ポッ 术 橘 高

薫

風

木

村

あきら

河 井 庸 佑

大漁旗

漁港の朝は賑わしい

こりもせず夢追い掛ける宝クジ

出たら目な観光地図に騙され

る

子育てへ自分の過去をダブらせる

愛子さま末は国母のおん姿

愛子さまはよ絵かきませ字かきませ

紙一重 死線を越えて六十年 (大戦従軍 激流を越えた石には角がない

木守り柿五 カーテンを開けると今日が動き出す

辞書にない方言も出るローカル線 六個が揺れて晩秋

T. 藤

吟

笑

生きている幸せ今日も陽が昇る 薄味にせよと主治医の目が光る

スマートな笑顔も見せて三宮 ふたりずつ歩く元町宵の街 (神戸5句

港に灯神戸は歳を忘れさせ アロードで外人さんに追い 越され

香

III 紫

黒

穴倉の酒場気安さくれてよし

見納めと行くたび思う高野山

溜飲を下げた言葉に裁かれる めがね拭くすこし明日が見えるかも

いつまでもお若い世辞と知りながら

人混

みに人の心が紛れ込む

好機危機

背中合わせを肌で知る

JII

島

諷云児

自信持つ球を打たれて奮起する さりげなく母の安否を問う電話 苦し紛れ打った一手が生きてくる

秋というのに天の高さは知らぬ 腹 病院か二十四日は 彼岸花苑で法話を聞いている 牛乳が甘い元気でいけそうだ 名月も動作ばかりで観ず仕舞 溜池に百姓一揆の血が滲む 出稼ぎの父も見にきたネット裏 切れ味はどうかと草に聞い 平凡な暮らしを好きな菜っ葉汁 哀愁って口に蕩けるブル 練りすぎてわけのわからぬ句になった 意識ないままで長寿の中に入る 捨てるにはまだ惜しいから積んでおく 使途不明そんな便利な金もあ 鈍くなった脳せきたてる救急車 喋っても進まぬものに村おこし 妥協するしなやかな画布白く塗る 傘閉じて雫の重い 傷は 杯食べ コー て油断をしてしまう 4 館で忘れよう m 余韻抱く 液 の検査 1 てい ベリー る まま る  $\mathbb{H}$ 小 小 藤 林 旭 虹 由 雄 多香 汀 劦 R 手で丸を作って帰るスキップで 术 自惚れを賞味期限に笑われる 残高とはかりにかける余命表 山荘 落書を笑うてばかりして消さず 雑兵が乗り降りをする無人駅 文化進んでステテコで歩けな 下積みの苦労知ってるかすみ草 枯れてきてだんだん深くなる絆 酸欠の街に育って街が好 やるだけのことはそこそこやってきた 山百合が迎えてくれた露天風呂 八十のいのちを洗う森と川 母方の遺伝子ひそむぼくの詩 古ランドセルを後列開けたがり 四字の賀詞 父と娘に似て鉄道橋 二兄弟ちがうゲームの段を持ち ケットの の鞄を提げてゴミを出 に三代つどう傘寿宴(奥香落山荘 中 世紀を通す父と兄 で承知は ハープ橋 せぬ (大正末入学) 月 玉 竹 田 原 置 中 内 宵 重 IE. 紫

坊

明

その昔 火 玉 伝言板怒り半分字が曲がり どん底まで墜ちて決った糞度胸 ぷちぷちとうんざりしてる妻の 狂うほど一途な恋をしてみたい 約束を思い出せない赤とんぼ 葉緑素たっぷり玉露しぼりだす 防災の日の豚汁は百人分 浄土からこの世へ渡る風光る うぬぼれのマイク素顔を見失ない 犬飼うて子飼い 本性がちらり覗いて西瓜食う パンの耳好きな長女の長 老人のひと言多い癖が出る 海は黙って温暖化が寄せる 親切な外国人の日本語 スピードと欲は出 こんな芸あったか酒も喉もい の性が傘寿卆寿でまだ燃える 一串へ預けたままの愛が涸れ 忠孝という掟あり の猫に出て行かれ したらきりがな Va 脚 U 乱 西 遠 + 恒 橋 H 山 松 柳宏子 叮 П 螢 住 紅 ばあちゃんに叱られ孫に庇われ 自分から惚けたと言うなおじいちゃん 補聴器を外すと曽孫呱 夢で会うご先祖さまに煽てられ 倖せは元気長生き孫の披露宴 夏休み終わり宿題だけ残 阪神連敗新聞みるのも疎まし ぎょうぎょうしく残高零の通知くる 昔話になってしまった十五 隣人は他人答えはだから合う 礼節を知人友人他人まで 他人ですそうかもしれぬカネ次第 星ほめて二人手を組む夜の すでに秋背中の凍えを解くカ いいときに法事の案内状届 血 田舎またよし遠い日の栗拾 雨しとど雫孕んできた小菊 目 縁にすがり他人になってい の奥に二ツ三ツと秋 式もちろん社長他人です 々の声 0 H しじま イロ Va 3 野 野 西 村 部 村 田 太茂津 素身郎 早 四

郎

苗

## 波 多野 Ŧi.

楽庵 手と足のリズ

芳

地

狸

雪も 埋 憎 一めきれぬ溝もあろうに耐えている め な 風も描けない い人から届く決闘 画家になり候

鎮 道を立て名を成し今も病んでい (痛剤ごくり一つ行き止まり る

舟 木

与根

探しものい

つもしている老い二人

の盆

葱坊主と組

んで境は譲

らな

Vi

藤 井 明

小言より寝言に近い捜し物 人間を番号で飼う国となる 台風が秋を連れてる風

朗

煩悩を詰

めた袋を踏み潰

便りに乗ってくる

名優の幕が

しずしずアンコー

ル

コ

スモ

ス

0

V Va こと風

0

明日のスタミナ妻のお酌で上機嫌

長寿日本へ人生が変る二十一世紀

全山紅葉風

の便りは冬を告げ

x

晚齡

の鼓動伝わる寡黙の

H 死

進む老い静かに願う尊厳 物忘れ己の背中軋む音

残老のいのちに弾む遠花火

木

千

代

女

藤

村

まわ 手術日は未定 目の鱗ほんとに落とす明日の りにも気遣いさせる眼 神にも報らせずに 0

私 暦

18

ッチリと目が覚め今日も生きてい

る

九条を我

が家平和

の糧とする

月おばろ言

いたい事がまだ言えず

屋根の傾斜が似

合う柿たわわ

かない太鼓叩いている夫婦

手さぐりで掬うだいじな五色豆 不安なり きっちり揺れ動く振り子 おどり手の 十万のおどりに ゆかた姿に燃えてい 4 K 茶の間がわ 酔ってい V る桟敷 てい る (阿波おどり

ヤットサーの声で始まる総おどり 顔も生き生きしてるおどり衆

ば かりに見えてくる都会

悪

V

盆おどり

田舎の良さが残ってる

沖縄の 達者です残暑の中の畑仕事 旅 戦争は忘れよう

海美しい島沖縄よ

森

宮

笛

包装紙 久し 残暑なお犬が欠伸してござる 油 絡みつく土に減反詫び切れぬ ままごとの馳走忘れた赤まんま 住宅地で猿振り回す駐在所 タマちゃんの人気がほしい 五七五簡単ですよ入門書 過疎の駅に途中下車して聞く民話 三連休どうやと近場の旅に出 歳ですねすぐに昔の話する マンネリな家族で話題のない真昼 寝たように死ねたら神へ礼を言う 金以外心を許すものがな 飽食は罪だ飢

断した夢が小皿をこぼれ落ち

呵

萬

萬

的

制 服を脱げばお ぶり新地で出会う千鳥足 いらの親父だな

指切りはしたが多恨のひとり旅

けつまずく石に恩師の声がする 海荒れる日の灯台は男の

八十  $\dot{\mathbb{H}}$ 洞 庵

洋 K

両

Ш

餓の子今日も死ぬ

秋桜

恋をしたのか鬱になる

風船が窄んでからでよい返事 言いにくいことを知ってる水車

たずらを許してくれる女坂

小屋

板

尾

岳

生きるとは信じることよ高い

奥

H

み

男坂すべりやすくて秋深し

ちぎれ雲あっけらかんと生きてゆく 一十五時 明日がニッコリ呼んでいる 空

九月の 秋風に悩みあれこれ裏返す 風 心の襞を深くする

雑音が暑さよけいに暑くする やせている癖 人なみに汗をかき

三面鏡 乱心のごとく真夏の蝶は舞い 浮気心へ向きを変え

る

大根は捨てるとこなしみなうまい

贈答品の値ぶみする

妻の愚痴と茶粥いっしょに流し込み つっ込みがだんだんきつくなった妻 大過なく来たらしいけど味がない **ぼけたふりしたらほんまにぼけてきた** 漫才のセリフをひとつメモしとこ

金バッジ

石

Ш

侃

流

洞

河

内

天

越

笑



## 奥 田 みつ子 選

## 内長野市 大 西 文 次

惚けた振りいつもしている訳でない みんなよい顔してる里帰り

敬老の日も父さんの職探し

肩書が取れて肩の荷楽になる

夕涼み昔の味で飲むラムネ 人生は未だともうとのせめぎ合い

神戸市 両

III 無 限

しっかりと生きる軍手が干してある

夢語る男いっつも金が無い

石一つ投げて波紋の外に居る

十本の指からもれる運その他 突き放すチャンスを母は知ってい

る

同性の妬み一番手きびしい

CTで隠れた疵をうつし出す 知らぬ間に鬼子育った脳の隅

岐阜市

平

野

あずま

太り気味の婦長の笑みが頼もしい 入院の鞄柳誌も詰めこんで

献身のナースへ老いの身が甘え 看護婦の個性注射ひとつにも

折り折りの花を楽しむ散歩道 吹田市

スキップを踏んで余裕をたしかめる

ワンテンポおくれて何時も笑われる 虫のいい話に乗った日の誤算

ほのぼのと不満知らない顔で逝く 一人居に鬼も女神も顔を出す

道草を食ってる内に消えた虹

東大阪市

田

中

はしゃぎ過ぎ空しさだけを抱いて寝る こころにもアルプスの水飲ませねば

幸せな夫婦が踊る三拍子 棘ひとつ夫婦のリズム狂わせる

> 栄 子

宮

堺 市 藤 井

沖縄の歌 神に誓う声凛として結ばれる(柳本直美君結婚 国に満ち終戦日

終戦の涙を知るや蝉しきり

五百羅漢みな秋風の中に立ち(長弓寺)

み仏の微笑の中にひそむ秋

、取県 西 垣 美知子

つらい日は信じた母の辞書を引く ふる里はゆっくり眠る指定席

じっくりと聞いてやりたい子の悩み することもやがてなくなる日が怖 V

平和な世しっかり掴む手がほしい 堺

市

良きにつけ悪しきにつけてアメリカよ ニューヨークと同じ悲しみアフガンも

タクシーにビルにはためく星条旗

愚かさは戦の歴史二千年 涙なく声なく爆心地の静 か

崎市

小

林

悲しみの極みに涙出てこない JII

苦労した娘に贈る旅行券 自分史の中の自分に酔ってい 生き様の皺が手にある顔にある

定年の気力が戻る習い

梶 本 哲 平

標識も信号もない生きる道

よく回る独楽に生き抜く芯を見る 生き甲斐を素直に今日の糧とする

お若いと言われちょっぴり無理をする ゼロ金利どこかで誰かほくそ笑む

追う夢に歳はとらないものと決め ハンドル の油 断衝 かれ 離

る車間

距

京都府

前

F

英

厳しさの増します老い 今日もまた水の音から朝が明 身も心も祭り気分にする囃子 の坂遥か

it

シャ ボン玉とぶ気楽さを学びたい

横浜

市

近

藤

道

子

うしろ向くくせで昨日が気にかかる 言い訳が上手に出来て寒くなる

意気ごんで飛んで飛べない水たまり の日の空へ離した千羽鶴

テロ

高知市

小

Ш

てるみ

煩悩を捨てる座禅がまだ組め 頼ること覚えた妻の皮下脂肪 ず

出世払い口約束の脛かじり 鳩尾に昨日が残るわだかまり

若い日の肌が恋しいコンパクト 秋田県 凑

修 水

コミックの哲学書読む文化の日お茶いれて一服僕の文化の日お茶いれて一服僕の文化の日まれるとは口にせず	湧き上	ー献にまだ息づいていた誠意 中献にまだ息づいていた誠意 で献にまだ息づいていた誠意	東京都 や何ごとも程がよろしい気配りも 好にもございますのよプライドは 女にもございますのよプライドは ガニンダーフリー私らしく生きてます	高い筆買うたがみみずそのまんま 高い筆買うたがみみずそのまんま 場系の中に昔の後ろ指 場系の中に昔の後ろ指	綾部市 藤
	上		やまぐち	森	田
	和			純	芳
	輝		珠美	子	郎
雑析子尺花草るぞれ	Щ	満老贅土	先 母 嫁 美 孫	妻今呆頑車	
雑草よお前も必死か生きるため祈るだけ曾孫羽ばたく日を思い子や孫の顔に生きてる亡父の顔尺取虫亡父の指尺思わせる	山一つ越えれば裏の顔に会う	満点の栄養摂ってやせている老いの身にカタカナ用語の雨が降る贅沢でないねと自問旅の宿土づくり評価は菊がしてくれる	兵庫県 (	妻や子が居るから画ける私の絵原固者腹はそれほど黒くない原固者腹はそれほど黒くない事や子が居るから画ける私の絵画格子妻の豊かな愛で生き	岡山市
よお前も必死か生きるためたけ曾孫羽ばたく日を思い保の顔に生きてる亡父の顔と生きてる亡父の顔に生きてる亡父の顔のりなが、	青森県福	点の栄養摂ってやせているいの身にカタカナ用語の雨が降る沢でないねと自問旅の宿	乗の欠片が落ちている 夢の欠片が落ちている をからないので生きられる がよくも悪くも顔一つ りよくも悪くも顔一つ	トラックを表の豊かな愛で生き と子が居るから画ける私の絵 はそれほど黒くない はなと言われて呆けた顔をする はそれほど黒くない は一つでは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は	岡山市 藤
よお前も必死か生きるためだけ曾孫羽ばたく日を思い保の顔に生きてる亡父の顔と生きてる亡父の顔に生きてる亡父の顔のりなが、	青森県 福 士	点の栄養摂ってやせているいの身にカタカナ用語の雨が降る沢でないねと自問旅の宿	兵庫県かからないので生きられる 夢の欠片が落ちている を すいからないので生きられるのよくも悪くも顔一つのよくも悪くもがなる。	が居るから画ける私の絵好き明日は今日よりもっと好きなと言われて呆けた顔をするなと言われて呆けた顔をするといい。	
よお前も必死か生きるためだけ曾孫羽ばたく日を思い孫の顔に生きてる亡父の顔と生きてる亡父の顔に生きてる亡父のが明に生きないがあります。	青森県福	が降る	乗の欠片が落ちている 夢の欠片が落ちている をからないので生きられる がよくも悪くも顔一つ りよくも悪くも顔一つ	が居るから画ける私の絵が居るから画ける私の絵を言われて呆けた顔をするなと言われて呆けた顔をするとがらまれると好きがあるが、	藤

一生を十一桁で縛られる。 遺伝子にない才能を子に求め、子の遊ぶ声も聞こえぬ夏休み、発がしている。	大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大	対ビングのいい音亡夫と二人して対ビングのいい音亡夫と二人して対は速いぞ孫よ輝け燃えよ孫以は速いぞ孫よ輝け燃えよ孫国産びいきでアンチブランド頑なに	大脈を上手に泳ぐ水すまし 一日酔い娘に説教をされる朝二日酔い娘に説教をされる朝二日酔い娘に説教をされる朝 一日酔い娘に説教をされる朝 おおり かんしゅう はんしゅう はんしゃ はんしゅう はんしゃく はんしゅう はんしゅん はんしん はんし	
出世払い期待した子はフリーター  「特きした料理旨いとほめられる  「おきした料理旨いとほめられる	京都市 三 宅 満およいの足げらげら笑う下り坂をいの足げらげら笑う下り坂をおいるとは思わなかった蹴った石をいの足げらげら笑う下り坂	でも怖さを知らぬ紅葉の手 何にでも怖さを知らぬ紅葉の手 がまりエサがうれしい猿の芸 がまでが回らぬ舌でオーイお茶	で手くそな演技黙って騙される 藤沢市 妹 尾 安下手くそな演技黙って騙される悩み 生アコンの温度差を知る嫁姑 受話器にはいつも元気な顔を見せ	横浜市 芦 田 鈴

骨になるまで前向きに足の裏うす味に馴れ健康を取り戻す大根の芽の出揃うただけで満ちいい汗を光らせ朝の万歩計	一夕立ほしい畑に鍬をうつ 吹田市 木 下 敏 子	車座になって本音を語り出す初掘の芋 小さくて父の忌に肩たたく相手があって旨い酒一本橋意地で渡って見せる父	間くだけはきいて力になれぬ鬱世と子の絆が揺らぐ子の巣立ち明ストラへ男のロマン幕おろすで生きる生きいき日が巡る	大阪市 三 浦 千津子をから、大阪市 三 浦 千津子をのときはどうかよろしく閻魔さんをのときはどうかよろしく閻魔さんがみ放題に誘われる歳でなし	大阪市 尾 崎 黄 紅
+ + + a M		lel To wi me			化工
ながながと寝そべる傍に妻がいる転んでも手を差しのべる人がいる妻の愚痴ぬるめの燗で聞いているゆっくりと回っています夫婦独楽飾り気のない人だから気を許す	目に	性格が出る新聞の回収日B面の心が自分かも知れぬひと言できのうの友がきょうの敵愛情が咲いた花にも現れる	神戸・バードルを越えたか息子でかく見えがイエット夏やせもなく夏終わる秋風が吹くとおしゃれがしたくなる秋風が吹くとおしゃれがしたくなる様電話特効薬となるパワー	を 大方 で で で は は は に な に な に な に な に な に な に な に る る に る に る に る に る る に る る る る る る る る る る る る る	
いるるる楽	映る	の敵	たくなる たくなる 神戸市	枚方市	吹田市
いいが独まするるる楽	映	の敵	神戸市 木	るてたな	吹田市 木
いい流楽	映 神戸市	の敵	市	るてたな	
いいるる	映る神戸市山	の敵	木	ないないない	木

媚びること止めた手酌が水っぽいもう一人のわたしが孵化を始めそうはまれ出ることを信じていた胎児生まれ出ることを信じていた胎児生まれ出ることを信じていた胎児	であればわたしの季節リフレッシュ 会はなれ娘ばなれ出来ず人の妻 はなれ娘ばなれ出来ず人の妻 であればわたしの季節リフレッシュ であればわたしの季節リフレッシュ を加えれば答出て来そう	落するルイン	けいる良市	伊丹市
	安	永	乾	延寿庵
	土	浜		
	理	加 津 子	春	野
	恵	子	雄	靏
腐敗しれ	小心でよ	あ 赤 子 も パ た 信 を の ソ	浮き 点 遠い日	
腐敗したこころを洗う水を飲む原色の服着てわたし主張する自慢するわけでもないが金はない自慢する人のそばには近寄らぬす伸びしてみても体がついてこぬ	は が心で大きい夢はよう持たぬ が心で大きい夢はよう持たぬ が心で大きい夢はよう持たぬ が心で大きい夢はよう持たぬ がいで大きい夢はよう持たぬ がいで大きい夢はよう持たぬ がいで大きい夢はよう持たぬ がいで大きい夢はよう持たぬ	を またたかい風になってる褒め言葉 赤信号やさしい人が手を握る 赤信号やさしい人が手を握る がいるまの丸い背な	自分史に流れる星を光らせる 正念場心を癒やす広い海 正念場心を癒やす広い海 では、日の墨の香恋し母の文字	和歌山市
たこころを洗う水を飲むぬ着てわたし主張するぬ人のそばには近寄らぬしてみても体がついてこぬ	- に誘い安らぎくれる友ロマン派よくぞ共白髪ロマン派よくぞ共白髪	たかい風になってる褒め言葉 たかい風になってる褒め言葉 にう形のままの丸い背な が手を握る	和 歌 山	和歌山市 松
たこころを洗う水を飲むぬ着てわたし主張するぬ人のそばには近寄らぬしてみても体がついてこぬ	吉市	吉市	和歌山市	
たこころを洗う水を飲むぬ着てわたし主張するぬ人のそばには近寄らぬしてみても体がついてこぬ	吉市森	吉市	和歌山市土	松

米子市 小 塩 智加恵

挨拶の出来る孫です前に出す

今日の悔い忘れ上手で朝迎う

今日からの寿命知りたく辞書を引く 敏感な右耳鈍な左足

厳格な親に似合わぬのんびり屋

生き残るための本音をいつも持つ 鳥取県

Ш 出 久

ふところの鍵を開けたり閉めたりと 整えた息で辛さを耐える坂

孫嫁ぎ曾孫抱くまで欲がでる 庭の樹もわたしも秋の中にいる

大輪の夢ふくらます花の芯

島根県

武

島

ちよえ

気短な日に急かされる秋深し

捨てようか ためつすがめつ衣替え さんま焼くもう喋ってる換気扇 句読点増やしゆっくり下り坂

急逝の父に庭師がまにあわず 倉敷市

撰

喜

子

シナリオの通りにいかぬ余生です 母の書くシナリオ通り生きた父 庭のないアパートいやと過疎に住む

花の精さしずめわたし吾亦紅

枝 昭和史を共に歩いた母は逝く

山県

玉

米

きくゑ

道草の途中で拾ういい話 影法師泣くも笑うもついて来る

山野草 幸せも一緒に食べた体脂肪 かくし味卒寿の母の指示どおり 備前の壷にかしこまり

赤ワイン女未練を遊ばせる 風鈴の逆らわないで風に乗り

へそだって時に世間を見たくなる 日本のへそ瀬戸内の島育ち

人間の芯へそにある底力 へそに手を当てると心澄んでくる

背筋を伸ばせへそが小声でそっと言う

宇部市

高

Ш

清

子

倹約も我慢も知らぬ子が育つ 再会へ人妻という距離がある

登りつめた椅子札束ですべり落ち 華やかに咲いて散りたい老春譜

観

の違いで淀む話の輪

見よう見真似姑が歩いた道だから

一〇〇点の重さうれしいランドセル

岡山県

土 居 ひでの

竹原市

IE.

畑

\*

覚

優しさを拒み続けている独り 夢覚めて見ると憧れ消えていた 明日生きるためなり芋の皮を剥く 明と同じ明るい夢をみる	乗ります。 「別ではないが光っていたい自負性れずに右往左往の渦の中 性れずに右往左往の渦の中	送り火を焚いて本家の役終える 送り火を焚いて本家の役終える の日から兎が居なくなった月 原発の安全性は絵空事 「でする」でする。 でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、でする。 では、いどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいどより、となった月。 でいてしって、となった月。 でいて、しって、となった月。 でいて、しって、となった月。 でいて、しって、となった月。 でいて、となったり、	サンマ焼く隣も焼いてる小さい幸 いい人と言われ財布が空になる 一方イバルが何時でも一歩前に居る で重くなる で重くなる	香川県原
	子	ひみ	光	賢
	重野湾市	電へあれこれさがす標準語れんぱ妻と眼鏡の小半日もみと後向かせた月あかりきみと後向かせた月あかり	気息奄々お酒が入るまでのこと ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	高知県
	杉	貞	近	桑
	谷	岡	森	名
	-	佐 紀 子		孝
	栄	之	功	雄

顏 で並ぶ金婚二 百 組 (金婚 3句 尼崎 市 軸 丸 勝 E 夫逝き気丈と言われ目が疼く もせず世 話に もならず夫逝く 藤井寺市 增 # ヨシ枝

五十年振りだね写る金 V 屏 風

ご祝詞にこれは区切りと励まされ

間 をかせぐ聞こえぬ振りも老いの 知恵

東京都 井 F. つよし

すん あの人もこのひとも逝き夏終る なりと踊 りの指は月を指し

長生きのコツは苦にせぬ物忘れ 立 一つ鳥に名残惜し むか百日紅 (子石宗匠を悼む

背番号つい て囚われ人となる

京都 市 清 水 英 旺

緑蔭 夜来香の香惜しみつつ雨戸引く の古書市に 降る蝉 いしぐれ

父母の背を流すが如く墓碑洗う

大ジョッキー 気にあおる時おとこ

日 立

市

加

藤

権

悟

豊穣の棚田に父の鎌多弁

無人店 擢 戸板性善説信じ

の辞令を母はもち歩き

泉佐野 市 稲 葉

洋

似 思 挑 合うかと聞 い出を掘り起こしても不帰の人 戦をしたから壁の厚さ知 かれ困 っている鏡

行を追う歳でなし冬仕度

手の平にのった亡夫の軽いこと 心底の悲しみ涙も出 てこない

風涼 L -期 会のい わ し雲 和

歌

Ш

県

进

内

次

根

先輩はいい人ばかり趣味の つ供えて深い秋 いになる 会

少しずつ耐える力をつけている

波音は 風向きをよんだ男が出世する ゆっくりと月光浴の秋 ショパン九 月 の海とい の夜

る

江市

松

本

知恵子

山の花ひそかに咲いて実をこぼす

藤井寺市

若

松

雅

枝

里帰 アイドル りゆ のポスターもある里の駅 つくり 母 の愚痴を 聞 <

ゆっくりと鈍行にするフル 胸張って百点見せる一 年生 ムー

おもむろに老眼鏡でマイペ 1 ス

屋

市

出

本

動

四十年添うて二人の無言劇 山川をいくたび越えためおと劇

残り火を旅で楽しむ老い二人

66

穴一つベルトが緩む夏ズボン 竹薮とひそひそ話す風に会う 向日葵がどっと疲れて夏終る 浜風が夏の暑さを掬い取る 秋の空 母にやっとの夏休み 病み上り夫の背広の他人めき 朝の試歩ミルクキャラメルほおばりて アマリリス吹いて一群下校の子 親しみが増して油断をしてしまう 愛されていると勝手に思い込む 母さんの指揮棒今日も元気です ストレスがたまらぬように息を抜く 愛してると言うには歳をとりすぎた 好きだから恐くて心覗けない 次世代にヒロシマのこと語り継 笛太鼓聞くとうきうき落ち着かず 泉佐野市 愛媛県 鳥取県 鳥取県 取 県 澤 安 前 Ш 野 後 坂 下 (美佐枝改め) 裕 案山子 節 子 子 ほんのりと母に別れのうす化粧 隠されたDNAが子や孫に もみ手する仮面の裏にある打算 傷口を癒してくれる母の膝 蝶の羽化マイフェアレディー見るように 定年の自分に空気入れている 断りと苦情に笑顔付けて出す 記憶力だけは自信があったのに 保証印斜めに向けて義理を押す 熱燗が日毎に旨くなって秋 妻の言う愛情論がずれてくる 日焼け止めたっぷり塗って握る鍬 食疑惑趣味の菜園精がでる バスツアー命洗濯して戻り プレゼント素直にもらう敬老日 つうかあの仲で言葉を置き忘れ 八尾市 横浜市 西市 浜市 野 松 巖 井 秋

本

清

Ш

元

和

可

風向きが変わり明暗分けて行く変人と言われ正論はいているスランプは試練の一つかも知れぬふるさとがパノラマになる秋祭り

サルビアの燃え立つ色に喝貰うひとり居の部屋を覗いた通り雨貰い泣きわたしの過去に似た話原爆の霊に経読む蝉しぐれ

H

かず枝

葉

君

江

村

美

知りながら軽いジョークに乗ってやる 首かしげうなずく顔は義理らしい 締めなおす帯に気の急く祭笛 東京都 登められて明日の勇気がわいてくる 自己暗示かけて流れに添っている 自己暗示かけて流れに添っている	日焼け止めタップリ塗ってテニスづけ失敗の分だけ自分愛おしむ次のエトどんな暮しが待つのやら敬老会唱歌をハモる顔と顔野田市	日高市 不況慣れ急がず渡る無信号 上段の見端よいリンゴ陰に居る が表で夫婦のつなぐ手が惑う	幸せな日日消えていた泣きぼくろ 腹立ちをこらえてメガネ拭くしぐさ よく聞けば夫の悪口のろけてる	ニューオリンズ
清	那賀島	根	松	阿良喜
原	島	岸	井	喜
悦	雅	方	美 稚 子	
子	子	子	子	聆
何の罰 裏目裏目の老後です 何の罰 裏目裏目の老後です 横浜市 家計簿を丹念に書くボケ防止 横浜市 でいまうな寂しい日 まりしませんよと夫散歩させ かぎしませんよと夫散歩させ かまり 裏目裏目の老後です	子育てを悔いつつ愚痴る共白髪 弱点を握られ父が丸くなる 弱点を握られ父が丸くなる は手らが小まめに動くバイキング は重が過ぎライバルが先を越す	受験期の孫に恐恐声かける電くても歩ける足に感謝する乗粛といつものペース誕生日	カップ麺母さんの手は邪魔ですかござ敷けばもうママゴトの一戸建てござ敷けばもうママゴトの一戸建て	町田市
長	平	鈴	金	土
島		江	森	田
亜 希 子	達也	<b>純</b>	徳	今日子

墓まいりまたの逢瀬をお彼岸へ	束のまの愛たしかめて法師蝉	竹の香や流しそうめん夏は往ぬ	したたかに生き抜きました女郎花	大阪市	般若心経全部覚えて旅に出る	自分史に路郎師と飲んだことなども	戦友会消え月月火水の夢を見る	遺言を書いたと賀状のはしがきに	草津市	成人の孫亡き夫をだぶらせる	うつの日の満天の星飲みこもう	魂のつかれを癒す薬なし	いずれ行く私の通る道がある	静岡市	大昔のジャズのバイトが役に立ち	左手でカラオケ伴奏ひきうける	夏祭り指名ひきうけ審査員	杖ついてマンションぐるり歩いて見	横浜市	黒髪の良さを忘れた茶髪達	禁煙がやっと出来たが酒に化け	妬けるほど娘夫婦に安堵する	美人医の計る血圧割引いて	横浜市
				星					久					中					豊					石
				野					保					西					田					原
				きらり					和										羊					三
				り					友					雅					子					郎
地下鉄の出口違えて入る迷路	出会い別れ深夜ラジオのいい話	熱戦が終り秋風甲子園	孫帰り熊蝉の声遠くなり	河内長野市	秋風にもやしのひげをとっている	法師蝉秋はかならず来ると鳴く	女房が居ぬのにそっと歩いてる	職退いて二年埃の静まれり	交野市	喜寿祝う師の恩深しフルコース	月並なことしか言えぬ通夜の席	胸の修羅続いて汗の多いこと	病床で残り数える集印帖	大阪市	恥じらいを少し残して歳を取る	夢さめて顔の火照りが冷めきらず	自分には褒める言葉が見つからず	伊吹山霧の深さに身が竦む	大阪市	が不協和音を掻き鳴	近道へ見知らぬ路地は花盛り	神様を恨んだ事もある失意	傾いて一気に崩れ落ちる恋	大阪市
				木					田					熊					西					伴
				木太久					岡					代					Ш					
				正					九					菜					更					洋

月

子

紗

好

言い訳が枯れた遅刻の常習者燃え尽きた花火に孫が見入ってる燃え尽きた花火に孫が見入ってる妻と手を線香花火のいい余生	豊中市	甘すぎる政官財の危機意識	甘党の夫婦の旅は菓子めぐり	心頭を滅却出来ず涼を追う	爽涼の期待裏切る山の家	高槻市	いわし雲昨日のようで遠い人	断ってひりひり渇く喉仏	煩悩かふっとため息ひとつ洩れ	天高く静かに我を省みる	吹田市	明日という心の糧に六十路ゆく	待っている母がいるから頑張れる	歳忘れ夢ばかり追う忙しさ	筆運ぶこのひとときに幸をみる	堺市	あのそのとあれで通じる夫婦仲	まだ酒を飲める楽しみだけは持つ	聞かぬ耳持って聞く耳持たぬ人	長生きの秘訣若さを好きになる	岸和田市
	藤					大					須					大					亀
	井					崎					磨					橋					井
	則					侑					活										皎
	彦					子					恵					錦					月
屋本我こ 根当がの																					
屋根屋根へ幸せ願う月明かり本当はこうじゃないかと利休庵我が汗に力足りぬと言う考課この濁世耐えるに人は脆すぎる	枚方市	朝の気を一ぱいに吸い悪を吐き	定年という難しいお年頃	足腰の丈夫なうちの旅を練る	口げんかドアの響きへ置いて行き	東大阪市	重いものみんな捨てますシャボン玉	一つ屋根幸せすぎる梅茶漬	七転び八起きする頃不整脈	老人会苺パフェで弾んでる	東大阪市	錆びてくる脳の軋みに酒を差す	子が巣立ち棲み着く猫の居候	難しい話は御免紙コップ	下積みの汗にチャンスが巡り来る	羽曳野市	手提げ金庫バブルはじけて道具箱	言い方と聞きかたでつい角が立つ	造形の神にもピカソ好きが居る	手始めの自立厨のサシスセソ	富田林市
屋根へ幸せ願うはこうじゃない汗に力足りぬと	枚方市 大	の気を一ぱいに吸い悪を叶	定年という難しいお年頃	足腰の丈夫なうちの旅を練る	口げんかドアの響きへ置いて行き	東大阪市 今	重いものみんな捨てますシャボン玉	一つ屋根幸せすぎる梅茶漬	七転び八起きする頃不整脈	老人会苺パフェで弾んでる	笠	錆びてくる脳の軋みに酒を差す	子が巣立ち棲み着く猫の居候	い話は御免紙コ	下積みの汗にチャンスが巡り来る	羽曳野市 森	手提げ金庫バブルはじけて道具箱	い方と聞きかたでつい角が立	の神にもピカ	めの自立厨のサシスセ	田林
屋根へ幸せ願うはこうじゃない汗に力足りぬと	枚方市 大 昇	の気を一ぱいに吸い悪を叶	定年という難しいお年頃	足腰の丈夫なうちの旅を練る	口げんかドアの響きへ置いて行き		重いものみんな捨てますシャボン玉	一つ屋根幸せすぎる梅茶漬	七転び八起きする頃不整脈	老人会苺パフェで弾んでる	笠井	錆びてくる脳の軋みに酒を差す	子が巣立ち棲み着く猫の居候	い話は御免紙コ	下積みの汗にチャンスが巡り来る	市	手提げ金庫バブルはじけて道具箱	い方と聞きかたでつい角が立	の神にもピカ	めの自立厨のサシスセ	田林市
屋根へ幸せ願うはこうじゃない汗に力足りぬと	枚方市 大	の気を一ぱいに吸い悪を叶	定年という難しいお年頃	足腰の丈夫なうちの旅を練る	口げんかドアの響きへ置いて行き	今	重いものみんな捨てますシャボン玉	一つ屋根幸せすぎる梅茶漬	七転び八起きする頃不整脈	老人会苺パフェで弾んでる	笠	錆びてくる脳の軋みに酒を差す	子が巣立ち棲み着く猫の居候	い話は御免紙コ	下積みの汗にチャンスが巡り来る	市森	手提げ金庫バブルはじけて道具箱	い方と聞きかたでつい角が立	の神にもピカ	めの自立厨のサシスセ	田林市 稲

絽の袖に風がはらんだ若き僧熱帯夜二度と逢えない人の夢掃除機の音に隠れた愚痴一つシンプルな暮しが眉を下げている	八尾市 平	湧き水を両手で秋を飲んでいる世記好きてまさカの人か先に进く	ハンサムな医者に婆さんまで騒ぐ	独り身になって眩しい二人連れ	八尾市與	バーゲンの渡世上手な靴を買う	ドラム缶竹炭焼いてボランティア	真夜中の不眠を癒す深夜便	風鈴の夏バテしてる熱帯夜	箕面市 北	ジョギングのコース秋風虫の声	お茶の間に笑いが戻る子の帰省	楽しんでくればと子等が旅行券	家計簿に深いため息妻の愚痴	箕面市 寺	平凡の有難さ知る古稀間近	二軒先ゴミ出すだけに紅をさす	紙くずになるだけやのに宝くじ	食卓の花は手抜きを知っている	藤井寺市 俣
	Ш				田					Ш					井					野
	幸									ヤギエ					柳					登士
	枝				明					ナエ					童					登志子
触れ合って心の窓を開けた笑み雲の峰 象さんになりウサギにも働くを趣味としている父と母岩清水両手で掬う空の青	大阪府	ささやかなよい事した日スキップで 日焼けせぬ陰を捜してまだ女	子のように心が弾む旅鞄	最早お手振られる仕草愛子さま	大阪府	今日もまた時間足りない老いの幸	八月の仕事残してもう九月	防災の日も穏やかに黄金波	夏休みプールで元気貰った子	大阪府	夏休み今熱戦の甲子園	くもり空ふるさとの山静かなり	風呂を待つ窓の外には青い空	セミ時雨真夏の窓の青々と	八尾市	華道展野のねこじやらし風情そえ	嵯峨菊や姉の面影偲ばるる	敬老日派手なセーター面映ゆく	手土産の松茸焼いて座のはずむ	八尾市
	桑				前					野					鷲					中
	田				田					田					見					島
					田忠					田栄					見					島春
	田ゆきの														見章					

古希間近まだ持っている母子手帳 不眠症睡魔が襲う美容院 今茶髪昔鳥の濡れ羽色 農業祭手打ちの蕎麦に長 三歳児もう嘘泣きで騙す知恵 バランスが冴えて浮世の綱渡り 目立たぬが人を沸かせる術を持ち 胸を借り挑む力士の恩返し 決心がまた揺れている思案橋 悪事過多今夜も月は顔見せぬ 美しく青きドナウも荒れ襲う 色褪せる地球に燦と彼岸花 腐らせてゴメン野菜に手を合わす 苦労せず痩せる方法ありません 日付見て買うのに日付うそをつき 満月に餅つくうさぎきっとい 茶柱の立った緑茶に元気づく 友人と世間話でリフレッシュ 気は長く心は丸く老いは逆 菊花展手間掛けるだけ花笑う Vi 列 る 三田市 尼崎市 神戸市 尼崎市 大阪府 石 河 桑 藤  $\mathbb{H}$ 原 津 原 中 # 歳 正 東 郁 章 治 子 代 袁 子 九 青い空生きてる幸を噛み締める 葡萄狩り回り道して先ず母 賞罰は無し球児等の泥の汗 月下氷人私が呼んだ青 妻の愚痴慰めかばう歳となり 気の持ちよう風も味方に吹いてくる 太るなと言ってる医師が肥満体 涙かくし子らに笑顔を演じきる 桁違いショーウインドーへ 18 サラ金のティッシュにひそむアリ地獄 遠足を乗せた電車がはちきれる 残り火を燃やし尽くせと持つ絵筆 ツッコミとボケの夫婦で息が合い 歩こう会 半分参加しています うたたねで見た夢今も忘られず 幸せは歩幅にあわせほどほどに 月火水無理が重なる子の夜勤 スポー の輪切って切れない手品かも ーテレビ画面へ手を合わせ ト つかいくぞと期限切れ い鳥 、片想い 和歌山市 和歌山市 海南市 奈良県 宝塚市 堂 橋 今 江 飯 爪 E 波 西 佐 泰 正 子 歩 純

思い出がひょいと顔出す小抽斗 場を過ぎたら喜劇になってい 和 歌山県 た 森 下 順 子 寝つかれず不安たかまる手術の日 眼を病ん 前ミスのないこと願いこめ だ吾をいたわる友の愛 取 市

抽斗に女の歴史つまってる 冗談の深読みをする癖があ

ガン告知どとうが岩をかむように 誤解とけそれから多弁になった友 和歌山県 村 中

悦

男

思い出は押し花にしてしまい

置

鳥取市 3

永

原

鼓

雑踏をはなれてわれに戻る街

少し間を取って夫婦の晩年期 電話してまた電話するある孤独 和歌山県

中 村 君

枝

雑用に根気のほどを試される いばり癖きっと寂しい方だろう

プラス思考思い出づくり探す秋

谷荒れてそして静かに山を見る 取市 大 坪 天

涯

寝ころんで大空すべて手に入れる

手ぶらにて来いと書いてはあるけれど を飲んだらなぜか変身するみたい

兄弟も遠慮をし合う仲となり

谷 出 清

子

S 鼾せぬ夫の寝顔覗き込む S受けて張り切る子守歌

貧乏神追い出すチャンス狙ってる 小声だと噂話がよく通る

敬老の日とて変らず野良へ行く 夫婦げんかしても負けない姐御肌 (祝・稲垣寿栄さんご結婚

君二十歳明日へ向って船出する(祝・浦瀬順子さんご成人) 倉吉市 田

後継ぎになやむ農家の梨畑 無造作に投げ出している脚線美 子沢山寄ればいつでもお祭だ コンバイン主役になって農繁期

せいいっぱい演じひまわり去って行く は金が人間見て笑う

鳥取県

蔵

本

悦

子

地下足袋は所詮長ぐつにはなれ 人間を嫌いになった牛も Vi

ぬ

朝顔に元気出しなとはげまされ

難民の画面の子らに胸つまる 転びつつ幸せのわら捜してる

> 出  $\mathbb{H}$ 信

> > 恵

星

シャンシャンとしゃんしゃん祭の傘が舞う

鳥取市

近

秋

-73

旅の空 青田風 少しだけ毒持つお人チャーミング 首たれた稲田に鷺の静止する だんごでも個性は内に秘めている もしもなど決して言わぬだんご鼻 盆送り田舎は元の静けさに 快癒するきざし小走り出来たひざ プチトマト太陽の愛独り占め めずらしい話へ道化者の膝 たそがれの窓から孤舟みる不安 窓走る雨にうたたね深くなり 悲しみは言葉なくても目から漏れ 疑えば食べるものない市場 親切な心を拾う旅最中 子子孫孫取り越し苦労もうやめた 芸を売る慣らいを持たず自適する 老いてなおたそがれの山燃え上る 山の地図私だけの宝あり を見て 心の奥に染みわたる 泉を見てはコイン投げ(ヨーロッパ旅行) の針 路を決めている 鳥 鳥取県 鳥取県 鳥取県 取県 取県 岩 細 竹 池 吉 崎  $\blacksquare$ 森 澤 田 和 富久江 裕 弘 大 子 子. 子 鯰 ごめんなさいさっと言えないもどかしさ 蚊も蝿も叩くな孫が生まれます 捨てられぬ歴史を秘めた編上靴 予定表に病院行きが二ツ三ツ 骨折の痛みをバネに正 草笛を吹く童心の山のみち 彼ですと髭もじゃもじゃを連れて来た 仕事とはいえど白衣の逞しさ 我が手から離れて行った子守唄 老い二人一鍬ずつの秋を蒔く 暗中模索悟った顔の深海魚 時代めく古いのれんのそば処 片田舎一人暮しの母が待つ 文明はほどほどで良い田舎好き 挑戦をやめたらただの人になる 食欲は露地栽培の 雲走る風のい 孫からは好きと言われているけれ 良いことが 一寸だけ言い訳してる長電話 たずら帽子飛ぶ り道しているらしい 旬の味 信偈 島根県 安来市 島根県 出雲市 松江 الح 市 福 菅 原 JII Ш

Ш

煩

低個児

か

つ子

島

和

歌子

根

邦

代

間

博

利

びいいと言いつつ医者に会いに行く 激流にでこぼこ石も角がとれ 激流にでこぼこ石も角がとれ りストラを次は我が身と知らず告げ リストラを次は我が身と知らず告げ の山で遊んだ仲間今は老い	旧姓であえて呼びます好きな女 日本着るナースの笑顔眩しすぎ	アルムーン子の付添で楽しもう アルムーン子の付添で楽しもう 気を揉んで人の心に入れない	きりげなく女将が生けた草の花同窓会思い出せない顔が居て一枚の写真に歴史納めおく	折角の好意かなしや鬼あざみ 藤井寺市 伊命日だ親父飲もうかワンカップ	大阪市 伊
田	木	田	谷	藤	藤
保	英	章	静		博
子	子	司	江	ア ヤ 子	仁
Tち水し網戸で涼を確かめる 老妻の歩幅に合わす散歩道 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	秋深し人恋しくて電話待つ 世野にいとしい人を見失う 世野にいとしい人を見失う	百円の重さを知ったアルバイト 等光の過去は黙する再生紙 では、というでは、これでは、 では、これでは、 では、これでは、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	暑いのに口惜し涙が乾かない長将棋対峠して埒のあかない長将棋一概に自説を曲げず蚊張の外	目で話す言葉小さく泳がせる目で話す言葉小さく泳がせる鳥取市	尼崎市
岩	浦	吉	秋	西	林
崎	野	田	野	尾	
公	昭	喜代子		敬之介	昭
読成	志	子	宏	介	Ξ

妻が留守金庫を開ける術がない	煽てられそれで正直馬鹿をみた	カチワリがまだ叫んでた甲子園	堺市	似顔絵をそっくりに書き怒られる	恋人の手料理まずい言えますか	唯一つ休まず御飯食べ元気	岸和田市	太陽の匂いがしてる干し蒲団	様々な人生運ぶ深夜バス	平凡な暮しの中にある至福	岸和田市	夫が主婦お世話になって背も縮む	皴の手に欲しい指輪も諦める	年金も医者代車代に消え	河内長野市	乾杯で腹の探索おさまった	赤い糸切れないものと勝手すぎ	名刺から話題に入るもどかしさ	門真市	無理するな酒控えろと同期会	同窓会思わぬ人が泣き上戸	母の手は野辺にあるまま花を生け	大阪狭山市
			荻				坂				雪				印				矢				羽田野
			野				П				本				籐				阪				野
			像				英				珠				智				英				洋
			Ш				雄				子				子				雄				介
アカトンボの赤まで憎いまだ残暑	PL花火 星に宿題課して終え	ティッシュよりうちわ 地獄で会う仏	羽曳野市	手術の日いざ出陣と腹くくる	一週間留守をお願い妻旅行	ほこほこと湯気と一緒に食べる芋	羽曳野市	秋夜長一人でないと虫の声	お茶でもと言われる若さまだ少し	白一色絵になる村へ雪だより	羽曳野市	君と旅 逢魔が時の意味を知る	大和路の人力車夫の日焼けかな	初めてのお使い孫の後つける	高槻市	袖なしにミンクがのぞくギャル闊歩	持てなしはお任せ母の腕自慢	花嫁の小花に添えたメッセージ	高槻市	苦口も目標あれば飲み下す	野菜好き後のステーキ食べ残す	宝くじ当てる気分で夢を見る	堺市
			吉				濱				福				安				執				河
			村				口				田				田				行				盛
			久仁雄				フ				悦				忠				稲				龍

家が建ち姿を変える里の道短日が余命のようにうら淋し胸一杯幸福を吸う青田風	赤ちゃんをあやすばあちゃんいい笑顔 手花人の庭の明かりに猫のそき	をとくり至り月かって前りがで 萩の花絵手紙に乗り風を生む 大阪府	母卒寿孫の祝いに紅をさす 人間の煩悩よそに赤とんぼ 八尾市をえあればとてもやさしい夫です	新麗やね皿も値の内京料理 ・ はく夏を性しみ屋釣味り止まめ ・ はく夏を性しみ屋釣味り止まめ ・ はく夏を性しみ屋釣味り止まめ ・ はく夏を性しみ屋釣味り止まめ	生き甲斐が見えては消える老いの日々生き甲斐が見えては消える老いの日々よく喋る孫は電話で語り部に	枚方市
	小	畑	田	西	荘	小
	栢	中	中	村	司	Ш
	こずえ	節	トシエ	栄	弘	良
	え	子	エ	-	之	吉
食べてます飯も炊けます老いひとり逢うだけで心温もる君が居る予定表逢うためならば暇つくる	集まると姑の愚痴と孫自慢 姫路市 昭宝くじせめて三等当たるまで	三田市	適当に使い分けてるおつき合い ではくだけ買ってはくれぬ零の数 ではくだけ買ってはくれぬ零の数 では	アメリカの正義が少し歪んでる 神戸市 母	大ん様 阪府	大阪府 車
	服	辻	谷	伊 勢 田	高	東
	部		田	田	木	
	_	開	多美子	10	道	文
	典	子	8	毅	子	江
			— 79 —			

光りさす希望をもてる明日が見えバラバラで何時も意見が食い違い良い事が思わぬ事で舞い込んだ	和歌山市	誰よりも虫や植物季節知る	二人共年金暮らし粗衣粗食	懐かしい昭和のスター皆星に	和歌山市	銀行にたよれぬ今はマイ金庫	はきちがえ自由に悩む教師たち	台風も恵みの雨と頭下げ	生駒市	たわいない話に潜む二枚舌	ハーモニー取れないままに真珠婚	侮った犬にガンガン吠えられる	生駒市	百均の楽しみ雑貨あるものね	池がグランド老いのゲームの社交場	夏ごとに軽くなる身にふと不安	兵庫県	暑い日も蟻に負けまい精を出す	<b>蔓引くとカボチャごろごろ顔を出し</b>	敬老会次はカラオケ名調子	兵庫県
	宮				前				小				飛				岩				黒
	本				岡				西				永				本				崎
	三喜夫				健三郎				稔				ふりこ				美緒子				美紗子
浅黒い娘は個性美を持っている金魚図鑑を見ながら主婦のティータモンローのおどる形は泳ぐよう		人情の実る苗木を育てよう	人の字をなぞって老後支えあう	阿波狸祭り囃に夜もすがら		自転車で帰る私の背にトンボ	淋しい日無理矢理猫に声掛ける	八月の花火は五臓まで響く	ria di	天国の亡母と見ている秋の月	お洒落して若く見せたく背を伸ばす	亡夫のお陰梨を子孫に送り出す	占	洗い張り出来るだろうか人生も	花丸を貰い笑顔も花丸に	追伸のまた追伸でプロポーズ	和歌	笑顔見せ言葉にならぬ駅別れ	笑い声朝の匂いの散歩道	遠い声近くに聞こえ山歩き	和歌
タイム	米子市				米子市 *				鳥取市		はす		鳥取市・				歌山市 5				歌山市 :
1	池				猪				鳥取市 森		す		Ш				市根				市北
イム	池尾				猪森						はす		山 口				市根田				市北村
Á A	池尾保				猪森				森		はす		山 口				市根				市北
1	池尾				猪						はす		Ш				市根田				市北村

みかん狩り広告見つつ梨を食う 寺の鐘ダボラの一つ消してくれ 改革に議員の足が困ってる	鳥取県	餅まきで福がポッケに飛び込んだ	減反に初めてそばを打ってみる	主婦の枷三日の旅も躊躇させ	鳥取県	杖つけて腰曲げぬよう菊の世話	秋風を待って彼岸の赤い花	釣りしてる時は空腹感じない	鳥取県	雑兵が突然くらう流れ弾	殿様が飼えば明けの日お犬さま	これ以上肥えてならぬと万歩計	鳥取県	肌ざわりよくてまたもや着てしまう	受け継いだ父の火種がよく燃える	弱虫を引いたり押してみたりする	鳥取県	夏の葬流れる汗に耐えている	チャレンジの気迫失せたら老いが来る	師が一筆加えて画面血が通う	
	松				平				竹				鈴				平				岡
	Щ				木				信				木				尾				村
	行				公				照				-				菜				孝
	男				子				彦				弘				美				明
時々は私の足元確かめる 招かれて鞄にストレス詰めて持ち 医療ミス信じたくない世の空ろ	府中市 岩 本 雅 代	目を閉じて土笛聞きつその昔	古稀越えて亡母の言葉をしみじみと		島根県松本聖子	陽が沈む庭木水待つ息づかい	久々に揃う家族の輪の仏間	盆提灯回る炎に父母の顔	出雲市 加 藤 スズコ	ひまわりが希望を求め咲いている	花火見てなんの苦労も忘れてる	運動会自分も出たい若さ持つ	出雲市 栂 ミツヱ	松葉杖今さらながら身の重さ	生真面目な足あと続く砂の上	でたらめを許してくれた砂時計	松江市 松 浦 登志子	プロジェクトXで見るど根性	深呼吸しながら次の出番待つ		鳥取県 河 本 晴 子

家の 若者 花 雷 来る来ない 芋の蔓食うた命もへこたれ 先を行く人 0 何事も事すむ毎にありがとう 心情もくんで論 畑 B会昔話が 1 木添う影を拾いてゆく残暑 Vi V 折 締 Vi 柱 X 日の意見 め 荷を背負うた主の背もまがり 物は n 箸下手でも父が書きのこす の影さえ 褒 7 1 3 て夏 Ó 1 80 か 夕 5 Ġ 1 取 1 の行 狐 花 \$ n 赤 0 0 食い 終 狸 0 占 聞 が 億円と言う道路 た残りの形見分け 11 理に 見 の着 + 8 いで友を待 V バ いをする茶髪 動 て波立 シミ探 · 違う り込む れ ラ買う人になる 垣 筋 信 ぬ 間 通 L 2 ああ長治 してる と暑さ てず L る 愛媛県 唐 南 香 高 津市 JII III 知 玉 県 県 市 市 松 1 濹 宮 向 Ш 村 崎 原 村 本 輝 末 治 # 哲

史

### 第20回 鳥取県没句川柳供養大会

作者の分身の没句を迷わず成仏させてやりましょう 施主挨拶―両川 洋々 祝辞―鈴木 公弘 弔辞―加島 修 読経―藤木 大善 山名すなお

代表燒香-各川柳会会長

實

とき 12月8日 (日) 9 時受付開場 ところ 全労済ビル (Tel 22-8234) JR鳥取駅南 参加費 精進落しの宴 4,500円(軽食・懇親会) 兼 題 「敗者復活吟」川上大輪・「不器用」

選者 「色っぽい」春木圭一郎・「孕む」

谷季芳・「ポンコツ」蔵本悦子・ 「旅路」奥田保子・「おやおや」 下田幸子・「晒す」澤 裕子

席 題 なし 各題2句 締切11時 表 彰 総合10位(出席者優先1句1点)

大席投句 1,000円 (切手可 作品集呈) 11月末日が切り

**投句先** 〒680-0033 鳥取市二階町3-102 植田一京 宛

### 第44回 豊中市民川柳大会

延

夫

と き 11月23日(祝) 正午開場 ところ 豊中市立中央公民館1F (阪急宝塚線曽根駅東100米)

会費 1,500円

7.

軽食・記念品・発表誌呈

挨 拶 豊中川柳会会長 石川 勝

宿 題 「 石 」 田中 蛍柳 選

「仏」片岡湖風選

「前」 竹森 雀舎 選 「荒」 安藤寿美子 選

「強」 天根 夢草 選 「女」 阪本 高士 選

花 」 岡 良三 選

各題 2 句 披講50音順 切 午後 1 時 豊中市長賞他

**主 催** 豊中川柳会・豊中市立中央公民館 **連絡先** 〒560-0015 豊中市赤阪1-6-9

石川 勝

TEL · FAX 06-6854-1990

# —|三日路亭・遅日荘繁昌記

東

くもる日に米の騒ぎの夜をしのび "

子のために買うだけ銭を持っていず

一合の土ももたぬに子が生れ

路

郎

(米の騒ぎ=大正七年八月米騒動のこと・楊柳四

事でした。世間の事は何一つ教えて貰えず、 社交界の花形の訪問というのを記事にする仕 させたのでは寂しかろうとの思いやりからだ ろうと思います。婦女世界の記者というのも まかせ、知人のすすめる儘に婦女世界 市西区土佐堀裏町)の婦人記者になった。 はしかし『雪』を出し『土団子』を出した。 ートタイムの仕事なのです。生花の家元や この間、葭乃も三人の子供を二人の子守に 子沢山のしがない古本屋渡世の中に、 私の娘時代のフリーな生活を知っていた 私に年中子守とお台所の仕事ばかり

> ヵ月も続いたでしょうか」(葭乃書簡) から大変でした。この仕事も結局は、二、三 別口にあるし、手のかかる子供もいた事です 仕事でした。古本屋のおかみとしての仕事が

たみ、一家は萩の茶屋三日路へ移り住んだ。 ろか折角有卦に入りかけた古本屋の商売をた 破目になるなどして、ついに道頓堀進出どこ 不足に加え、子沢山の病気貧乏、葭乃も出産 を移すことも考えたことだが、先だつものが 路郎の古本屋葵書店も、この機に盛り場へ店 頓堀筋でさえ貸家札が眼につく有様である。 いたような冷え込み方である。そのため、 大正十年である。 つづきで病弱、さらに親戚筋の老女を引取る 大正時代も後半の頃は、世は不況を画に描

ぎりのつけ方とも考えられる。この新聞社 部主任として就職している。このためのふん 路郎はその前年の秋、大正日日新聞社経済

体質から注意をうけ、紀州は紀ノ川のほとり

へあずけられた。長男ロンドンの生まれたの

凡帳の蔭で暮してきたような私には不向きの

の入社を記念した形でもないだろうが 大正九年十月二十五日『川柳懷手』

大阪および東京の奎文堂発行で四六判二〇二

大阪柳壇の寂寞を破った刊行物であった

(山雨楼メモ)時に路郎三十四歳。

じ客員で一緒であった」(山雨楼メモ) に迎えられた。斎藤松窓、椙元紋太両氏も同 年三日路に住みつくと同時に『番傘』の客員 銭もつい眼と鼻の先の町内にいた。「大正十 地六六三に岸本水府が住んでいて、木村半文 この萩の茶屋三日路六六四番地の、 隣り番

あり、執筆の時間であった。その当時の若い ていたのもさこそとうなずける次第であった。 作家の作品は、みんな神経衰弱の傾向をおび 時から翌朝の十時頃までが路郎の睡眠時間で 供をしたのはこの頃だと思う)だから午前五 っても午前四時であった。(九軒の梯子のお 城である。路郎の帰宅もおかげで首尾よく戻 昼をあざむくネオンとジャズの交錯した不夜 も料亭でも徹夜営業だったから、五座の前は 揃った。夜は夜でその頃道頓堀のカフエーで 物の小鉢で一盃を傾ける面々が毎日のように は午前十時ごろから、かしわのすき焼や季節 達の家は、三日路亭とよばれた。というの 違えたような人ばかりであった。三日路の私 始った。路郎の交際範囲の人々は昼と夜を間 四女奈那は三日路亭で生れたが、腺病質の 路郎の新聞記者生活、作家生活はここで

もこの三日路亭であった。

参考になる点があったので、もしこのパトロ トロンは急逝した。路郎の仕事もパトロンに トロンがいたからである。不幸にしてそのパ 案の仕事をした。」(「川柳雑誌」NO362・古希特 為替の研究をやめてから桃谷順天館の広告文 路郎の名は消えていたかもしれない。路郎が ンが長命であったなら、おそらく川柳界から 殉死した。路郎の研究は当時財界でも大いに の研究に没頭した。研究費を出して呉れるパ 三日路亭時代の後半期に、路郎は外国為替

と同時に、大槻弐校長のご推薦で桃谷順天館 は、大阪薬専第一回卒業生で、大正九年卒業 阪市南区鰻谷仲之町(本誌発行所付近)にあ 集号·麻生葭乃 りであった。 に入社した。そのころの同社鰻谷工場は、貧 って営業部は信濃町にあった。私(島田兼好) 弱な施設ながら昼夜兼行の活気溢れる創業ぶ 桃谷順天館研究所ならびに本社工場は大

も一つになってそこへ移転した。職工が五十 交渉で、あまり話合う機会もありませんでし 実にルーズでした。水府氏は大正十年ごろ退 た。とにかく広告部の連中は出勤が不規則で いられましたが、私達技術家とはほとんど没 不平もいわずによく働いたものです。岸本水 人、女工が四百人、研究所員は八人でみんな 土地を求めて順天館は工場も営業所も研究所 やがて鰻谷から市岡五丁目の夕凪橋に広い 麻生路郎両氏はともに広告部に勤務して

> れといわれました。 く私たちの研究室にこられ、胃剤をわけてく の話など一度もされたことはありません。よ 生さんは、川柳の趣味があることなど誰も知 社され、福助足袋に就職されました。一方麻 っていませんでした。ご自身も会社では川柳

私は剣道四段の免許を持っていたので、剣道 や相撲部、ランニング部を設けることを奨め 食満支配人は私を何かと可愛がって頂き、道 あるため、時折来社されていたようですが、 合ったが私に歯がたたなかった。 意のようでしたので、数度土俵に上ってとり 部の指導に当りました。麻生さんは相撲が得 全社員の体位向上に資するようにしました。 んでもこなしていたことから、会社に剣道部 私は学生時代からスポーツに関心を持ちな 食満南北氏の御令兄が順天館本社支配人で

られたのです。この方は各新聞紙上の広告欄 りました。それでご自分の補佐役を求めてい くてはならぬというのが、長野氏の意図であ があって、しかしこれを按配する融通性がな のは、単なるPRの文句だけでは充分ではな ました。」(以上は島田兼孝=愛媛県大洲市本町二八=筆 頓堀の歌舞伎見物にもよく連れていって貰い い、小説でも詩でも随筆でも書きこなす才能 長長野晴浜氏でありました。広告文案という 転してからのことです。紹介者は時の広告部 ベージ全部を順天館製品の化粧品の材料に 「路郎が桃谷へ入社したのは、夕凪橋へ移

> して入社したのであります。 た。路郎の入社は、この方のアシスタントと して歌劇をかいて発表されたこともありまし

間があったのでした。 場させたものだから、開幕までに大変永い時 桃谷順天館の社員慰安会として曽我廼家五郎 人だから行ったのですが、あまり早くから入 座の観劇会がありました。路郎も社員の一 このころの路郎の失敗談をご披露します。

そうなものだ 「何もこんなに早く入場させなくてもよさ

ビ飲んでいた酒がどう回ったものか、 と思うと急に面白くなくなってきて、 じめてでした。」(葭乃書簡) なに前後不覚になった路郎をみるのは私もは 嫌いは決してしていなかったのでした。こん たのですが、何も大向うから野次るほどの毛 より、ごく自然な十郎の芸の方が好きであっ かれたそうです。もっとも路郎は五郎の芸風 になんぞ怨みでもおますのかいな』と人にき って下さったのでした。後で『あんた、五郎 ぶれた路郎を戸板で表へ運び車で拙宅まで送 のだから、芝居の係の人達が困って、酔いつ びに『五郎ひっこめ』と大向うからどなるも のでした。五郎が登場するころには、出るた わ)のやまたの大蛇みたいにのびてしまった 童子、と異名をとった路郎は、簸川

頃の転居転宅はしきりのようだ。 やがて路郎一家は鳴尾に移り住んだ。この

阪神沿線の鳴尾には、空を覆うような大

は充分な面積があった。 当季の野菜や、観賞用の草花を栽培するのにきな柳の木が表前栽にある家で、裏庭は当季、

遅日荘の門を叩いた。 をいたの句の通り、門人の人達は絶えずこの様であるが、〝遅日荘留守で三十九銭損〟と目荘と呼んだ。大阪から電車で約三十分の距日荘と呼んだ。大阪から電車で約三十分の距のでは、一切に、

遅日荘主人の路郎は、快漢路郎だのブルドッグだのと呼称されていた程、性格に烈しいところもあった。仕事に追っかけられているところもあった。仕事に追っかけられている時などは世間並みの会話のやりとりはまどろしいようでもあった。子供のくさりにつながれていかけていった。子供のくさりにつながれていかけていった。子軽には出ていけなかったが、た私は、そう手軽には出ていけなかったが、の外へ立った。往来する電車の灯りには都会の外へ立った。後来地帯へ人々を運ぶ灯りが立樹の影へ消えていったあとは、快漢路郎だのブルド遅日荘主人の路郎は、快漢路郎だのブルドッグだのとが高されていった。

た」(三柳雑誌・古稀特集号・麻生度乃) この鳴尾の家でアートが生れた。梨里が生 れた。そして長男のロンドンが死んだ。私達 には何もかもが悲しい思い出の種子である鳴 尾の家を引きあげ、岸の里へ移ったのは昭和 尾の家を引きあげ、岸の里へ移ったのは昭和 には何もかもが悲しい思い出の種子である鳴 にがまくなってから著述をやってい しからだがよくなってから著述をやってい しからだがよくなってから著述をやってい しからだがよくなってから著述をやってい しからだがよくなってから著述をやってい

その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ

刊号が出たのもここである。 路郎夫妻にとっては、この句は哀歓多い鳴路郎夫妻にとっては、この句は哀歓多い鳴

意飾北斎は生涯百回以上もの引越の記録を ちしい。 を の持主で、性格的な一種の、転宅魔、だった の持主で、性格的な一種の、転宅魔、だった の持主で、性格的な一種の、転宅魔、だった の持主で、性格的な一種の、転宅魔、だった の持主で、性格的な一種の、転宅魔、だった のお主で、性格的な一種の、転宅魔、だった のお主で、性格的な一種の、転宅魔、だった のお主で、性格的な一種の、転宅魔、だった のお主で、性格的な一種の、転宅魔、だった のおきで、性格的な一種の、転宅魔、だった

「私が南北さんに弟子入りした頃は笠屋町「私が南北さんに弟子入りした頃は笠屋町だったでしょうか。何しろ南北先生はよく転だったでしょうか。何しろ南北先生はよく転だったでしょうか。何しろ南北先生はよく転だった。

右の書簡にもある通り、葭乃は父声村譲り右の書簡にもある通り、葭乃は父声村譲りに動作家を志した一ときがある。婦人雑誌記者になった当時の事である。その処女作は記者になった当時の事である。その処女作は記者になった当時の事である。その処女作は記者になった当時の事である。

との便りが書かれている。この頃のことを彼とも何も知らぬ素人が、一幕ものを書いてみようとした厚かましさ、穴でも這入りたい気持で、どうぞ忘れてしまって下さい」持で、どうぞ忘れてしまって下さいが出ます。誰

(大正6年春)を発表している。玉屋町の房(大正6年春)を発表している南北居を路郎夫妻が湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が

「南北先生の最初の奥様は物しずかなやさしいお方でした。その奥様のところへきていられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありましたが、そられた可愛らしい娘さんがありません。

食満南北は明台十二年生れ、大正五年以来(大正8年4月)のころの若い彼らしい。 玉屋町の水府は、どうやらこの最初の結婚

昭和三十二年五月十四日が命日。齢七十八。 この辞世をもって風流人食満南北は死んだ 一今死ぬというのにシャレも言えもせず

# が潜まった

a

してホテル・アウィーナ大阪で開かれた。 人総会は、10月6日午前10時から98名が出席 2002年(平成14年)第37期川柳塔社同

時同人総会を開いて規約の一部を改定、前期 で2001年度の取組みとしては、5月に臨 別項のとおり事業活動報告を行った。その中 じめに河内天笑主幹があいさつ、同氏を議長 開いたこと、初の試みとして冬期の3回、 長1を選出したこと、2月・9月の2回、 同人総会で継続審議となっていた人事問題に に選出して議事に入り、坊農柳弘常任理事が 間に本社句会を開いたことを報告した。 与以上の役員の出席により特別常任理事会を ついて審議し、相談役1・副主幹2・副理事 総会は前たもつ副理事長の司会で開会、は

利息・寄付金等の臨時収入によって当期剰余 誌代改定が今期決算にはまだ反映されておら たが、前期総会での論議をふまえて実施した から通常収支は大幅なマイナスとなり、受取 次いで寺川弘一常任理事が会計報告を行っ 前期と同じく収入と支出のアンバランス

> 号議案を拍手で承認した。 を行い、これらに対する質疑応答があって1 に続いて、川端一歩会計監査が会計監査報告 金を生じたという会計状況を明らかにしたの

弘一氏が予算案を提案、質疑応答・意見発表 会は11月から明年3月まで5回にわたって実 に移った。 ねばならないことを強調した。この後、寺川 誌友の減少が著しいので、早急に対策を講じ 施すること、誌上大会を計画していること、 塔まつりを10月5日に開くこと、昼間本社句 頭で事業活動計画を報告したが、明年の川柳 これに続く2号議案では、前たもつ氏が口

諷人・西田柳宏子の各氏が発言したが、事前 して常任理事会で検討することを要請した。 氏が特別常任理事会に提起した誌友の増加 目立った意見発表はなかった。ただ田中正坊 に特別常任理事会が開かれ、あらかじめ総会 坊・山本三郎・田中正坊・出口セッ子・中原 ての提案」の骨子を紹介、これを文書提案と 議案の説明と検討が行われたこともあって、 今回の総会では、提案をめぐって春城武庫 頁数の抑制を含む「運営につい

> 会のあいさつを行った。 代表のあいさつの後、西口いわゑ新参与が閉 いて提案、全議案を拍手で承認、新・旧役員 終わりに板尾岳人理事長が役員の選出につ

## 事業活動報告

13年10月7日 14年2月8日 11月17日 第7回川柳塔まつり(ホテル 特別常任理事会 川柳塔碑合祀法要(23名参加) アウィーナ大阪・260名)

3月25日

5月4日 京都塔の会30周年記念句会 臨時同人総会▽『川柳塔』9 京都市北文化会館62名参加

7月8日 路郎忌本社句会 00号記念大会 (343名)

9月30日 特別常任理事会 川柳塔みちのく15周年記念句 会(弘前プリンスホテル・70名)

(その他)

を再掲載。 『川柳塔』1月号から東野大八「路郎物語

9月から選者交代「水煙抄」奥田みつ子

〈主な受賞・表彰〉

茴香の花」政岡日枝子

橘高薫風·小林由多香·野村太茂津·田中正坊 森下 愛論 小林由多香 大阪川柳人クラブから功労賞 本社句会月間賞永久保持 鳥取市文化賞

社)全日本川柳協会から功労賞

橘高薫風『橘高薫風川柳文集』 句集等刊行

故高杉鬼遊『高杉鬼遊川柳句集』 藤井正雄『私の百句─パートⅡ 鴨谷瑠美子川柳句集『花と恋』

京都塔の会30周年記念句集『千社札・其の六』 森下愛論川柳句集『独り酒 川上大輪・富湖句集『流れ星の詩 城北川柳会合同句集『城北川柳』第7集

小寺花峯百句集『ひたすら酒に』 岬川柳会10周年記念合同句集『みさき』

斉藤 劦百句集『花絨毯』

橘高薫風編『朝日なにわ柳壇同窓会抄』 黒川紫香『音をなくした子猫』(奥山美智子)

西出楓楽・西原艶子・小島蘭幸・新家完司 両川洋々(5月13日・鳥取県郡家町文芸公園 9月28日・笠岡市古城山公園

板垣 菱田 奥山 寿美子 美智子 草丘 (物故者) (11名) 平成13年11月2日没 同 百 平成14年1月31日没 百 3月11日没 3月7日没 2月13日没 11月26日没 4月22日没 96 70 90 70 74 58 68 82 81 歳歳歳歳歳歳歳歳歳歳歳歳歳

6月29日没 5月19日没

伊藤博仁(大阪市)笠井欣子(東大阪市)能

麻生アート 橋本多哥由 同 7月30日没 7月23日没 81歳 69

## 一新任役員 (役職50音順

常任理事 寺川弘一 籠島恵子·鶴田遠野 井伊東吉・太田扶美代・亀岡哲子 中原比呂志・西口いわゑ

## 一新同人(45名

谷孝美 (鳥取県) 加藤茶人 (鳥取市) 下田茂 市)山本宏至(八尾市)高橋宏臣(松山市 崎市)南原正和(大東市)星野きらり(大阪 代(和歌山市)武本碧(和歌山市)三島凇丘 かり(鳥取市)西沖彰雄(鳥取県)村上直樹 坪井孝一(西宮市)小谷はるみ(鳥取県) **懂子(鳥取市)有沢せつ子(鳥取市)福永ひ** 大川桃花 (大阪市) 福島庸二 (鳥取市) 田中 取県)田村邦昭(鳥取市)宮脇道子(鳥取市) 市(鳥取県)鳥羽玲子(鳥取県)山宮愛恵 雄(高槻市)西谷治三郎(高槻市)中村叡子 登子(鳥取県)生田義一 (河内長野市)渡辺さだを(堺市)上地登美 (鳥取市) 録沢風花 (鳥取市) 平井栄翁 (鳥 (大阪市) 山岡冨美子 (河内長野市) 鳥羽直 (大阪市) 仲谷弘子 (岸和田市) 松江市)乙倉武史(高槻市)山田耕治(尼 吹田市) 浦田綏子(大阪市)小泉ひさ乃 (高槻市) 左右田泰 岩屋美明

> 妙(東大阪市) 代菜月(大阪市)飛水ふりこ(生駒市) 西川更紗(大阪市)古手川 中岡

〈同人総会出席者〉(順不同・98名)

田村邦昭·松本文子 岸本宏章 亀岡哲子 増田紗弓 中原諷人 長浜澄子 西出楓楽 北野哲男 穴吹尚士 川端一歩 山本玉恵・森本弘風・福原悦子・奥田みつ子 江口度・大石あすなろ・吉岡修・宮崎シマ子 河内天笑・坊農柳弘・米田恭昌 田中正坊·南原正和·吉村一風 野下之男・小林妻子・櫻庭順風 藤村メ女 春城年代 古川奮水・藤井正雄・太田昭・波多野五楽庵 西内朋月・山本三郎・早川棲世・矢内寿恵子 大内朝子・寺川弘一・伊藤玲子 田辺鹿太・板尾岳人・三島凇丘 籠島恵子・坪井孝一・阿萬萬的 水谷正子・石森利昭・村上直樹・山岡富美子 ・米澤俶子 · 乙倉武史 ·海老池洋 ·山本義子 ·木本朱夏 ・島ひかる・村上玄也・川島諷云児 ·岸本孝子 ·都倉求芽 ·植田一京 · 松原寿子 · 恒松叮紅 ·遠山可住 鶴田遠野 ・玉置重人・竹治ちかし ・宮口笛生 ·森山盛桜 ·加島由一 · 川久保睦子 ・栗田久子・西口いわゑ ·吉川寿美·長谷川春蘭 塩満 鷲見正子 稲葉冬葉・山本希久子 木村正剛 西原艷子 ・鴨谷瑠美子 ·小林由多香 ・中原みさ子 ·春城武庫坊 ・和田つづや · 園山多賀子 ・冨山ルイ子 ・岩佐ダン吉 ・小泉ひさ乃 ·西田柳宏子 出口セッ子 政岡日枝子

# 誤読もまた楽し

### 道 夫

心に語った。なおこの冊子は50部刊行、参 子を作成、この資料をもとに薫風作品を鑑賞 加者全員に贈呈された。 し、正しい読み方、その魅力を45分に亘り熱 風川柳句集』全句索引というB5判9頁の冊 プであり、薫風川柳愛好家である。『橘高董 一貫校の国語教諭の氏は、川柳塔の若手ホー お話は川柳塔わかやまの桒原道夫氏。中高

「檸檬」と叙勲記念の『橘高薫風川柳句集 これまで先生は六冊の句集を出されたが、



道夫氏 桒原

価されるに必要な作業と思ったからである。 読むだけで一句全体が鑑賞できるよう全句索 る上で、索引がないのは不便であり、 引にし、その上総ルビを打つことにした。 には初句索引がなかった。薫風作品を勉強す 薫風作品が後の世に広く読まれ、正しく評

恋人がいま肉眼に入り来る

確認した。 か「ヨ」か等、作者の思いを聞き、読み方を は「イク」か「ユク」か。「夜」は「ヨル」 が表現される「イリキタル」である。「行く」 「ハイリクル」でなく、きっぱりとした語感

について先生から多くのことを教わった 句集の中には誤読をしていた句もある。 索引を作成する過程で句の読み方や、解釈 古稀の屠蘇壺万里酒羅生門

ケ」「コバンリノサケ」と誤って読んでいた。 「壺万里」で切るとは思わず「ツボバンリザ 恩借に父の容態ねぎらわれ

ンジャク」と読んでいただきたいと言われる。 「オンシャク」と読んでいたが、先生は「オ 忍耐も少し異なる美女醜女

「カショウ」を「ヤケド」と訓で読んでいた 「シコメ」ではなく「シュウジョ」と音で統 した方が語呂もよく、響きがやさしい。 原爆忌 鳩ら火傷の脚運ぶ

> が「カショウ」と読んでこそ原爆の非人間的 なすさまじさが表現される

読み方、言い方にこだわって、息づかいを感 らしく「ヒチ」と読む。「七十」「七五三」す じとりたいと思った。 べて「ヒチ」となっている。徹底して先生の 「七月」は標準語の「シチ」でなく、大阪人

## 少年の幾人いても毬一つ

うなお葉書を頂いた。 作に殊に心が惹かれると申し上げたことがあ 等の申入れもあった。重複した句については る。「新しい句境を開きたいという思いから 先生の意向により削除する句を×印で示した。 に示し、先生から「花」を「華」に改めたい よい仕事をしたと自負している。 ン」と読んでいたが「イクタリ」が正しい。 工夫をたえずしている」と答えられた。 「肉眼」の有名な句である。ずっと「イクニ こうして拘泥りの全句ルビ索引が完成し、 最近の薫風作品の中で「黄なコート」の連 句集の誤字については正しいものを括弧内 索引の体裁が整った段階で先生から次のよ

あります。面白いものです

「句集とまた違った感触で私に迫るものが

先生も殊の外喜んでおられたようである。



←よろこびの 六賞受賞者



河内 天笑主幹→



↑披講へ真剣そのもの



↓和気藹々の懇親宴





↑熱唱

# 各賞表彰・記念句会

しい第8回のまつりとなった。 のまち」川柳の選のため欠席となり、些か淋 あった。薫風名誉主幹が、青森県蟹田町「風 いただく出足にとっては、まずまずの日和で 予報通り夕刻から雨となったが、 参加して

ちあふれていた。 柳句集』全句索引集が配られた。広い会場は、 にぎやかでなごやか、旧交を温める笑顔で満 念品とお話の桒原道夫氏作成の 当日参加者は20名、受付では、紀州梅の記 『橘高薫風川

幹の挨拶から始まる。司会は奥田みつ子副主 一時からの表彰式・記念句会は河内天笑主 鶴田遠野新常任理事が担当をした。

が手渡され、桒原道夫氏のお話へと続く。 同人部長から新同人45名の紹介があり記念品 属句会からは花束が贈呈をされた。長浜澄子 に河内天笑主幹から賞状と楯が授与され、所 路郎賞と同準賞の順で受賞者9名(1名欠席 化賞・愛染帖賞に続いて、川柳塔賞と同準賞 各賞表彰式は各地柳壇賞・一路賞・茴香の

閉会の挨拶をし終了となった。 理事長が「また来年もお会いしましょう」と 記念句会は二時半から始められ小島蘭幸副 月間賞は富田林市の藤田泰子さんに輝く。 (記名―月子・澄子・朝子) 清記—義·尚士

避けたのにまた乗り合わすエレベーター

女装して乗りたい女性専用車

## 兼題「のりもの」 山本希久子選

行方不明のあの子を探す木馬の背 終バスへ十一桁を折りたたむ 月のゴンドラ星の王子と乗っている とくとくの切符卆寿の血が騒ぐ 中古車もわたしも走るたび軋む ベッカムと馬車で銀河を駈ける夢 のりものが便利で足が弱くなる いつまでもかぼちゃの馬車を待っている 敷かれたレール脱線したくなる男 宇宙船に乗るヘソクリをはじめよう しゅっぱつしんこう未来へかける縄電車 選挙には行かぬ真赤なスポーツカー アバウトなのりものだった父の貨車 傘寿未だ早いぞ冥途の渡し舟 青春切符朱を足しながら流れよう 渡し舟二〇〇二年に生きている 未来まできこきこ走る一輪車 天国へ行くケーブルを予約する ハンドルをつかんで鳥になっている 同じ時間におんなじ人と逢う電車 歳取っていますが女性専用車 頂点で指切りをした観覧車 ブランコは人待ち顔で夕暮れる 番列車荷物が先に乗ってくる 人乗るエレベーターが怖いです (早) 富美子 ひかる 武庫坊 みさ子 ますみ 諷云児 ふりこ 可 富子 扶美代 柳宏子 弘

> 偶然のように二人で乗る電車 ママチャリが知ってる子育て奮闘記 同窓会タイムマシンに乗って来た 鈍行で日本の秋をひとりじめ 銀河鉄道の駅で賢治を待っている あれも乗るこれも乗りたい遊園地 共に来た自転車だから光らせる エアポケット悔いが一度に押しよせる

> > たず子

再会をゆったり包む観覧車 バス降りてそれから遠いマイホーム 時間通り来ない故郷のバスを待つ 身に合った各停でゆく終の旅 風景をやわらかくする乳母車 ケイタイをオフにして乗る縄電車 駅まではバスを横目に歩きます この世にはいらぬ物です戦闘機 プライドで走らせているのはベンツ リストラで手漕ぎとなった舟を押す 秋晴れを腹いっぱいに観覧車 朝日さす家玄関に三輪車 自転車でプイと出てゆく妻の乱 人力車絵になる花の嵐山



()) 美津子 かすみ みつこ

90

みつ子

大勢の中	好奇心。	底辺の草	太陽が火	懸命に主	椅子ひと	年輪を重	風の子の	才能が海	手話の比	李是	t to	春夏秋夕		間違いの		幼少を取		乗り切っ		メルヘン	もう誰	ブランコ	通学の白	お静かに		終点に皮	砂丘から
大勢の中で光っている人だ	好奇心あふれる瞳よく光る	低辺の暮しへ光る子がひとり	太陽が当たれば無印も光る	懸命に主婦業できた手が光る	椅子ひとつ存在感が一人いる	年輪を重ねて光る母と居る	風の子のQちゃんの汗光ってる	才能が海を渡って光り出し	手話の指キラリと光る恋の色	· ·	元 5 書	春夏秋冬自転車でゆく女坂	軸	間違いのまま乗っていた電車	天	幼少を駆け抜けて来た三輪車	地	乗り切って生きる小船は僕だろう	人	メルヘンの国ヘカボチャの馬車に乗る	もう誰も追っては来ない霊柩車	ブランコが横にゆれ出す反抗期	通学の自転車バスを抜いて行き	お静かに天使が眠る乳母車	佳	終点に来るほど霧が深くなる	砂丘から駱駝に乗って何処へ行く
能子	ルイ子	ひさ乃	美代子	せつ子	はじめ	春	妙	鈴美	愛論	てたる。	入いら建			治代		大輪		う 寿子		乗る茂代	美代子	春雄	玄也	(古)和		風花	く 螢
障害を越えて一芸光り出す	汗光る農一筋に生きる八十	どっしりと構えて光る床柱	何気ない仕草が光る妻の日々	目の光る仏に逢うたことがない	ベソかいて笑って少しずつ光る	光っても光らなくても僕の妻	まんまるい月が薄を光らせる	光ります線香花火が落ちるまで	どの子にも光るものあり明日がある	検査検査すんで光が見えてきた	束の間の恋に光っている鏡	皇后さまスピーチ光る児童展	夕映えに勝者敗者の目も光る	神の慈悲藁一本が光ってる	光るまで磨く私という愚石	クレヨン画ママとボクとに陽の光	光るほど星はだんだん遠くなる	拉致の子へ浮き灯台の光る海	光っても光らなくても子は宝	園児みな光って見える運動会	汗だけが光る取柄のない私	彼に勝った僕のタイピン光ってる	まっすぐが一本光る真人間	抱いた子に光を当てる親ごころ	玉よりも磨けば光る石が好き	夢いまだ消えず心も瞳も光る	ピカピカのあなた裏から見ています
句多留	セッ子	光久	正和	保子	玲子	俶子	(水) 正 子	章子	る かりん	英子	たず子	久峰	和香	安泰 子	つづや	哲子	浅房子	(古)和	諷云児	一步	大輪	孝一	欣之	鹿太	則彦	寿子	すあやめ
あなたとの出会い魂光らせる	軸	みんなで光るみんな友達なんだから 日枝子	天	銃を持つ子等の悲しい目が光る	地	ひとすじの光に今日も生かされる	人	包んだり解いたり光くれる友	人間のどこかに光るものがある		山の父今日も無償の汗光る	うつむいたままで光っている稲穂	佳	よちよちと目を光らせて見る未来	一瞬の迷い光を見失う	年輪を重ねて五感光らせる	光らせた石を過保護にしてしまう	僕だけに光って見える亡母の星	捨て石が光って前へ進めない	前向きになると明日が光り出す	自分史へ光るところも入れておく	本物のダイヤは控え目に光る	子が光るまでじっくりと待ってやる	欲望を捨てると見えてくる光	自分史に光をくれた五七五	争いは止そう万物光ってる	さりげない介護の指が光ってる
		日枝子		修		みつ子		紗弓	たもつ	小房子	妻子	扶美代		りつえ	昌枝	あすなろ	美羽	利昭	いわゑ	楓楽	一京	宏章	ミツ子	治代	千秀	隆盛	更紗

## 下 西原

ケイタイの天下横目に書く手紙 パパの手を天下と思う児の産湯 天下をとってピエロ性が極まった 塩壷に天下の頃の姑がいる 無一物天下にこわいものは無い なにもかも捨てるとまるくなる天下 待ちましょう金は天下の回り物 好きなことしてます天下取ってます 大下泰平奥様のいう通り 大守閣天下は取れるものでない 大守閣天下取ったは夢の跡 いずれ子にゆずる天下がはずかし 大下取る望みはポチも持っている 大仏さん天下を今も見つめてる 天下取る手相へ持たす期待感 この敷居一歩またげばわが天下 少子化の天下を甘えっ子が回す 遺言で天下一だとほめてやろ 花束をもらって少しだけ天下 やりくりは天下無双の自負がある 三人で組めば天下も夢でない 凡夫でも天下に俺は唯一人 私にはトイレの中が天下です 十日程天下を取った彼岸花 兄ちゃんが留守で一日天下取る コーヒーで天下国家は語れまい V (鷲 りつえ 寿美子 みつこ Œ 重 悦 由多香 春 日出子 弘 宏 たもつ 碧 風 子

> ちびっ子の天下に足も手もとられ にっこりと天下は愛子さまのもの 石垣に天下の重さ問うてみる 迷惑にならぬ笑いで取る天下 家中へ釆配ふるう母がいる 天下晴れて静かに持っている誇り 天下泰平女の歩幅広くなる 潔く天下をゆずる父である 熱い血があって天下を論じあい 軍人に天下を盗らせないように パソコンが出来て天下を窺う気 ロボットに天下取られる日も近い 一階から天下こっそり降りてくる 爱 緑保俶 楽 子 京 司 恵

天下盗る夢と遊んだ木守柿 十一桁ほくは天下にただひとり わたくしにおまかせなさいませと妻 今日ぐらい天下を取ろう誕生日 天下一品花それぞれの自負で咲 穏やかな陽を注がれている天下 天下取る椅子が吹き矢の的となる かすがいが取れて天下は妻のもの 物干し場ここが私の天下です 天下の計地球の芯がずれてきた ひとりの余生ひとり天下の彩をぬる (古)和 富美子 比ろ志 朝 みさ子 盛 風

> 桜井 千秀選

ひたすらに耐えて天下の現住所

みぞおちの中に天下の芯がある

陣の風が天下を盗りにくる

天下取る夢の火種は絶やすまい

諷云児

天下とる野心が湧いて眉を引く 天下摂る器に美学盛ってある 霧が這う天下の罪を消すように 天下ごめんになったらしたいことがある

ミツ子

昌 代

枝

昭和史の天下を探る血の匂い

おいしいもんばっかり止めるお医者さん おいしいぞ妻子を起こす寿司の折 素朴さをすするおいしい手打ちそば おいしいもの今日も仏と分け合うて むかしの鍋で今をおいしくたべている 囁きのおいしい話こげ臭い おいしかった話で貯金みんなとび 働いた汗がおいしく食べさせる セールスがおいしい話置いていく 日本人旬のうまさを知っている 一枚目の舌がおいしいことを言う 安泰 諷云児 寿恵子 日枝子 玄 子

快方へとてもおいしい七分粥 おいしい風私一人が降りる駅

少年の天下を掴む豆の夢

天下取る決意男の眉静か

天下は乱大事な本を読んでいる

兼題
雑
魚
小島
蘭幸選

いつふみ

おいしさの陰にかくれた添加物 体重計おいしい秋に目を瞑る

弘一 比ろ志 かすみ 富美子 五楽庵 達 富 水 チンをしただけでうまいと誉められる 阪神の優勝おいしい夢だった おいしいと言わねば妻の目が怖い 嫁の炊くカレー一目おいている 肥えはったおいしい汁を吸うてから 耳コミのおいしい店の列に居る おいしい音に目を覚ます腹の虫 安心でおいしいですね無農薬 しなやかな指でおいしく食べている 紙芝居屋さんの飴はとってもうまかった ミツ子 正 緑 金 扶美代 民 ね 枝 太

枝豆にほどよく利いた塩の味 縄のれんおいしい嘘で盛り上がる アフガンの子供に不味いものはない おいしくて世襲がしたくなる政治 ビフテキの味国籍にこだわらぬ 沢和 ちかし 茂 子 伸 美

うれしい誤算嫁の料理が口に合う

森林浴五感をゆする美味い風 駅裏のおでん待ってる午後六時 母の味だけは確かな舌音痴 試食品どれもおいしいお昼時 おでん屋のあかりを探す風の町 味覚探訪不味いと言えぬレポーター サービスの悪いおいしい店がある いびつでもおいしい母の握り飯 試食して選んだ土産だったのに パソコンにおいしい話保存する 飛びついたおいしい話にあった罠 味噌漬のおいしい宿の国訛り 夢売りからおいしい話買ってくる 店頭に行列続くラーメン屋 おいしいと信じ込ませた口

ひかる

多賀子

おいし い米作る棚田に籾をまく ますみ

きみえ

太茂津

つづや

おいしさが落ちた老舗の代替り 夜干し汐風うけた味を買う

東

吉

1

女

利

昭

風

おいしいと言わずに全部食べてくれ おいしいと言わぬが箸がよく動き おいしい話乗ったばかりに臭いめし おいしさが老母のほたもち大きすぎ うまい話に乗るなと祈る子の脱皮 おいしさについつい負けた皮下脂肪 旬のもの賞味期限を食べている 究極のうどん生醤油だけで食べ おいしおす京の魚もよろしおま 美味しくて腹の八分に目をつむる

法善寺横丁の味温かい

ビンラディン雑魚の中から出られない 生まじめでとても情けにもろい雑角 雑魚だから絆大事にしています 群れるだけ群れて雑魚には策がない 泣き砂に雑魚の恨みが少しある だしがらになっても尾頭つきのザコ 以下同文私も雑魚の一匹で 御用提灯もって頑張る雑魚の群 雑魚と呼ぶ魚はいない母の海 味噌汁は煮干しに限る秋の天 だし雑魚とするめで鍛え上げた骨 雑魚の子はやっぱりざこで泳ぎ切る 手を叩くだけの雑魚にもある本音 新聞のコラムが好きな雑魚である 生き方を知ってる雑魚は群れにい 八間のにおいの好きな雑魚の群 る みつ子 寿美子 富喜子 真理子 八千代 かすみ

花も嵐もふみこえてきた雑魚だ 方言が雑魚の佃煮うまくする つけられた十一桁が重い雑魚 ミツ子

雑魚の意地内部告発いたします コンビニに群れるさびしい雑魚たちよ ますみ

出し雑魚の冥利は旨いおみそ汁 天に地に雑魚は祈りを欠かさな 雑魚なりの哲学があり生きていく 名刺にも雑魚とはっきり書いておく りつえ

93

群れを出て雑魚には雑魚の志 雑魚の群生きるヒントが有りそうだ 陽が落ちて仕切り直しをしてる雑魚 父に会う時はいつでも雑魚で居る じっくりと見たい縮緬雑魚の顔 胸張ってボクは鰯だぞと言える 個性ある雑魚が一匹ずつ抜ける 末席の雑魚から乱が始まった 雑魚でいい真っすぐ駆けてきた道だ いつの日か雑魚もひとりで生きていく 無党派の雑魚ほど強いものはない 少子化へ喝ぼてじゃこの多産系 清流の監視員ですメダカです 雑魚でよし春夏秋冬マイペース 大海をすいすい泳ぐ雑魚でいる 出汁じゃこをおやつがわりに食べた日も 精いっぱい生きてる雑魚の立ち泳ぎ 群れを離れた雑魚に注目しておこう 或る時の目線は雑魚になり切って 原点は雑魚鮎も鰯も人間も 雑魚も私も大きな事は言いません キュウリもみちりめん雑魚の目と出合う 王様よ雑魚の歯軋り聞こえるか 大物の顔をしている雑魚もいる 雑魚の中に紛れ込んでる出世魚 握の雑魚からもらう土性骨 ローワークから出直しをする青い雑魚 藤泰 安泰 瑠美子 いわゑ 能 武庫坊 澄 柳宏子 ひかる つづや たず子 エンドレス希う二人の観覧車 呪いの火テロの火種は無限大 限りなく続く細菌との戦 川上るもう雑魚だとは呼ばせない 雑魚だけどドナーカードを持っている 十指みな開いて夢は無限大 人類の争い無限とは悲ー 無限の欲をなぐさめる

することがあって長生きしてる雑魚 雑魚というやさしい呼び名いただきぬ 金子みすずへ雑魚がメールを打ってくる 清流でみがきつづけてきた鱗 雑魚たちのいのちもらっている命 (古)和 希久子 寿恵子

匹の雑魚一本の太い骨 欣 Ż

美津子

父は生涯雑魚の臭いを持っていた 日枝子

河内

赤ちゃんのこぶしの中にある無限 エデンから無限の悩みまで貰う 限界を知らない妻の好奇心 充しても充しても湧く人の欲 織女いるかぎり牽牛会いに来る さだを ちかし まさと つづや

> 親と子の絆 無限に綾を織る しっかりと無限の命抱く稲穂 限りない家事は手抜きですり抜ける ゆめ未来どんどん胸に降ってくる 言い出すと切りなく続く妻の愚痴 夢無限 少年キック繰り返す 風媒花 無限の種を飛ばしてる 無限ではないぞ瑞穂の米つくり 瞬の命 無限の欲を抱く りつえ あすなろ 比ろ志

どの子にも変らぬ母の愛無隙 母さんの財布は無限ではないよ 生かされて無限の慈悲に手を合わす てにをはへ十七音字夢無限 ふりこ ますみ

秋の空澄んで限りの無い高さ 錯覚で無限の愛を誓い合う 選択肢 無限にあってフリーター 閃いた無限の夢を作曲家

限りあるいのちを惜しむ愛無限 寝転んで蒼天に描く夢無限 命張るわたしの愛は無限大

浅房 子

茂

セツ子

夏の空星が無限を奏でてる 愛無限 天の岩戸の昔より 三十億光年心配せんとこう 大自然シャッターチャンス無限大 ミツ子

無限でもきっと空気を買う日くる

(古)和

限りなき輪廻を生きて今ここに

無限の愛貰う苗木は天を向く

94

富美子 日出子

えんぴつを走らす夢は無限大 終りない仕事と思う草を引き 信じれば無限に湧いてくる愛よ 無限にお金あったらきっとつまらない 命水 無限に醸すぶな林 無限だと思った天が綻びる ポケットの無限と遊ぶ一行詩 愛無限いのちに限りあるものを (鷲) 正

限りなき思いを抱いて潮満ちる

とし子

登場。三味線・尺八・横笛に鮮やかな和服の

続いて本日の余興の日本民謡千洋会さんの

京

由多香 ひさ乃

いつまでも青い空見て暮らしたい 出し合えば人間の知恵限りない 地球儀を回し無限の夢の旅 無限大の翼を持っているネット

なんぽでも金あるように子は思 主人だけ無限信じる夫婦愛 無限だと信じて吸うている空気 無限ではないと蛇口の水止まり 滴の水は無限の旅をする (矢)五

遠 しげお

子 野

島ひかる

川柳塔おおとり 井上照子

桒原道夫

小糸昭子

堺川柳会 桜井千秀

川柳塔きゃらぼく

小島蘭幸 土橋 螢 川柳塔鹿野みか月 奥田みつ子

籠島恵子 吉川寿美

安藤寿美子

板尾岳人

岩崎みさ江

御芳志御礼

(敬称略·順不同

臍の緒が切れても絆無限なり

かすみ

雲が湧く如く悪人湧いて出る

完

司

粒の種は無限を抱いている

藤田

泰子

愚かさを数えあげればきりがなし

万歳三唱。皆々さまのご健勝を祈る。

森山盛桜 前たもつ

山本希久子

波多野五楽庵 本田智彦

政岡日枝子

美研アート 山本蛙城

三島松丘

森井菁居

長浜澄子

山本義子 寺川弘

中原諷人

都倉求芽

中居善信

西原艷子

西山

山本三郎 西口いわゑ 寺井弘子 川柳塔まつえ吟社

### 懇 親 宴

は葛城の間にて開催された。 司会は、大内朝子・木本朱夏が担当する。 予定の時刻に93余名のご参加を得て懇親宴

ひかる

氏。お国訛での口上に会場を沸かせ、温かい 旧交を温める歓談と御馳走に舌鼓を打つ。 笑いのうちに乾杯。各テーブルは再会を喜び、 な挨拶に懇親宴の雰囲気が盛り上がる。 はじめに乾杯の音頭は、松江市の恒松叮紅 開会の挨拶は、河内天笑主幹。ユーモラス

黙祷の一分間にある無限

扶美代

いわゑ

ませる。 には吉川寿美さんの詩吟いりの唄が満場を和 鳥取県グループのお歴々が唄い踊り、 み郷愁をそそられる。リクエストの貝殻節は 黒田節に始まり祇園小唄、 女性も交え総勢十余名。皆さんの耳馴染みの 明治一代女とすす 武田節

塔まつりに会うことを約束しあう。 詩吟、なつかしのメロディーあり、新曲あり で、お名残はつきませぬが、また来年の川柳 れも恒例になった「星影のワルツ」の大合唱 と数々のご披露にますます熱くなるなか、こ ワイアンダンスを皮切りに、丹後屋肇さんの 恒例のカラオケに移り、河内月子さんのハ 閉会の辞は、板尾岳人理事長。ひき続いて

ションの民謡

# 第八回川柳塔まつりに参加して

順不同

# 躍進・川柳塔まつり

### 都 倉 求 芽

賞状を受取り所属句会から花束贈呈。にこや めつくす盛況ではじまりました。 披講に先だち各賞の表賞式。それぞれ楯と 第8回川柳塔まつり。今年も金剛の間を埋

将来の路郎賞が続々生れる日を楽しみにして います。そしてここでも女性優位が印象的で んだ希望に満ちた顔が圧巻です。この中から なところにも人間性がうかがえます。 続いて新同人の紹介。総勢45名。ずらり並

かあり緊張あり、また照れくさそうに、こん

訓、熟語、字余りの追究、気の遠くなる話に ルビつきという手間にまず驚嘆。そのうえ音 労作。薫風句集を分析しての苦労話。全句に お話は「誤読もまた楽し」桒原道夫さんの

> 見事な句が続きます。六題2時間は、あっと い句を作られますね。私などまだまだ勉強べ いう間に終りました。それにしても皆さんい すごく感銘を受けました。 いよいよ披講です。張り詰めた空気のなか

また来年のお楽しみ…。 番の唄に和気藹々のうち名残惜しくも散会。 **肇さんの詩吟、続いてカラオケ。十八番十九** り上げました。月子さんお馴染のフラダンス、 応えた貝殻節。どっとばかり鳥取勢が声を張 笑いを誘います。そして唯一のリクエストに 満席の出席者なのに、いない県ばかり選んで はずみをつけます。奈良から出張の民謡女史、 パーッと盛り上がったところへ三味線の音が が出雲弁でいきいき乾杯音頭。もう最初から 開口一番「これで挨拶終ります」。叮紅さん さてお待ちかねの懇親宴。天笑主幹の挨拶。

の雨。パーフェクト「没」の私の幕切れでした。 阪急「烏丸」地下から上がればドシャ降り

## あおば句会

## 五年連続の快挙

## 句多留

せて頂きました。 ありません。大会に鈴美さんと二人で参加さ さぞ小躍りして喜ばれただろうと想像に難く 田鈴美さんが選ばれました。あおばとしては した。各部門句の受賞者の一人にあおばの芦 くなり半年、恒例の川柳塔まつりが行われま 五年連続の快挙です。満秋氏が居られたら、 この春、私どもあおば句会の満秋主幹が亡

だ。決して諦めちゃいかんよ」と励ましと批 私もそんな経験を幾度も積んで今があるん 留さん、まだ一人善がりの自己中なんだよ 度も全没の憂き目にしょぼくれた私を「句多 ました。この時間が一番疲れます。過去に何 の一体感。いいですねえ。好きですね。 にか打ち解けて行きます。川柳を愛好する者 るのは入り口までで、皆さんと会いいつの間 ない人を本当に気安く迎えてくれる。緊張す です。これと同じように、川柳塔大会は知ら は一昨年まで在籍していたクラブの歌の冒頭 さて表彰式、講演と続き本日の披講に入り 「誰に会っても、やーといおうよ」。これ

うとなんだろうと、会場は優しい人達で一杯 だ未熟者。今に見ておれです。そんな気持ち 評をくれた満秋氏だった。そうです、私はま た逢う日まで。 った事。お世話さま。お疲れさまでした。ま でした。楽しい一日のフィナーレでした。惜 を半分背負い懇親会に臨みました。全没だろ しむらくは天笑月子ご夫妻の漫才が聞けなか

# 川柳塔賞を受賞して

### 松 丘

あり何かほっと暖かい心に触れるようでした。 らかに運営しよう、という意味合いの発言が 柳人同士あまり規則に囚われないで親しく大 剣な意見交換など、川柳を愛する皆様の熱意 に胸を打たれました。議事の最後に、お互い 張と興奮で胸が高まる一日の始まりでした。 方の句会しか経験のない私にとりましては緊 まれて快適な一日のスタートでした。一昨年 五月の九〇〇号記念大会と今回で二度目。地 て頂いたばかりの私は、本社句会への参加は の十二月誌友に、そして今年八月に同人にし 同人総会では将来を見据えた誌友拡大の真 柳塔まつりを祝福するような秋晴れに恵

> させて頂きました。 にも漲る熱気は、川柳の魅力をますます高め 勉強になりました。また句会場の和やかな中 者の思いを私なりに感じ取らせて頂き大変に すが、選者先生の説得力溢れる披講、そして、 の句会、未熟な私が言うのもあつかましいで 花束を戴いた時は本当に感動に心躍りました。 と記念品を、まつえ吟社の恒松叮紅会長から に余る賞を戴きましたが、天笑主幹から賞状 と続きました。私も川柳塔賞という本当に身 入選句の一句一句にあるユーモア・個性・作 安心、午後一時から六賞の表彰式・記念句会 いよいよ披講が始まりました。流石に本社 十二時締め切りの投句を済ませ先ずはひと

らの川柳への取り組みに大きな刺激になりま した事を心から感謝申し上げます。 今回の川柳塔まつりの参加が、私のこれか

# 誤読もまた楽し」を

### 庭 聴いて 順

で、御礼参りと思って…。 に本社から薫風先生以下十四名参加されたの んでいます。川柳塔みちのく15周年記念句会 第8回川柳塔まつりに参加出来たことを喜 風

> ビを打った資料です。 配布、それは作品が正しく理解されるようル ました。「橘高薫風川柳句集 全句索引」を まつりでは桒原道夫氏のおはなしに感動し

これで先生の句へまた一歩前進したと思います。 おろおろしている私には望外の収穫でした。 来ない句が沢山あり、辞書を引くにも引けず、 て、心から敬意を表したいと思います。 七五三、七面鳥、七月、七十… 夜の波にふたりの心縫わせおり 先生の御教示に従った氏のご努力に対し 籠の鳥とらわれの身の顔してず 鯉のぼり囹圄の身の置きどころ 恋人がいま肉眼に入り来る |古稀薫風』|橘高薫風川柳句集』で理解出 おはなしの一部紹介、ルビ について

黄なコート について

みちのくの雪とりんごと黄なコート 腕の無いヴィーナスの像と黄なコート 御堂筋金の公孫樹へ黄なコート

共に、まつりを運営された皆様へ厚く御礼申 など氏の解釈は面白く、楽しく思いました。 最後に、喜んでまつりに参加した皆さんと 陽炎へチーズの如し黄なコート

## 7 順不同 総数 ・敬称略 五五名

神奈川 青 森 芦田鈴美 櫻庭順風 小野句多留 波多野五楽庵

島ひかる

増田紗弓

滋 稲葉冬葉 久保和友

丹後屋路 都倉求芽 高島啓子

中後清中

福本英子

福井桂香

森下順子

松原寿子 掘端三男

宮本三喜夫

古久保和子

沢田和子 田中節子 栗田久子 川原章久 太田 岡本久峰 榎本舞夢 阿萬萬的 木村無禄 北村賢子 笠井欣子 浦田綏子 极尾岳人 石堂潤子 森子 志田千代 神原 岩屋美明 井尻 穴吹尚士 田辺鹿太 坂上高栄 桒原道夫 木村正剛 加島由一 岩崎公誠 安達忠央 河内月子 海老池洋 **奥村五月** 大橋鐘造 人川桃花 江口 吉川寿美 籠島恵子 乙倉武史 内海幸牛 井伊東吉 浅野房子 田中正坊 河内天笑 梶本哲平 大谷篤子 池田淑子 河井庸佑 石森利昭 昭子 久保田半蔵門 岸野あやめ 川久保睦子 神原まさと 神夏磯典子 榎本日の出 指宿千枝子 岩佐ダン吉 安藤寿美子 安達はじめ 安芸田泰子 鴨谷瑠美子 片岡智恵子 生嶋ますみ 川島諷云児 太田扶美代 太田とし子

> 矢野 森本弘風 中井アキ 土田欣之 寺井弘子 村上玄也 藤井正雄 山岡富美子 もちづき遊美 八十田洞庵 宮本かりん 平松かすみ 米澤俶子 山本蛙城 南原正和 則原正美 滕田泰子 早川棲世 西川更紗 寺川弘 西出楓楽 中澤伽羅 吉岡 安永 水谷正子 藤井則彦 中岡 寺井東雲 矢倉五月 **秤下愛論** 則たもつ 本田智彦 **板東倫子** 山本希久子 渡辺さだを 宮崎シマ子 星野きらり 風 籾山隆盛 山本三郎 町田達子 中川 長谷川呂万 三好專平 中崎深雪 鶴田遠野 寺田甚 吉村雅文 村上直樹 早崎和子 野下之男 山本半銭 滕村メケ 村上ミツ子 松岡久留美 山川日出子 長谷川春蘭 出口セッ子 西村りつえ 富山ルイ子 津守なぎさ 高田美代子 篠原いつふみ 古今堂蕉子 西田柳宏子 徳山みつこ 津村志華子 局須賀金大 源田八千代 小池しげお

> > 川上大輪 田中みね 竹内満寿蔵 山本義子 ひとり静 鍛原千里 和歌山 松下比ろ志 乾 山口光久 嵯峨根保子 武本 河合茂雄 牛尾緑良 楠見章子 宮口笛生 牧渕富喜子 西口いわゑ 春雄 西山 米田恭昌 坊農柳弘 大内朝子 桜井千秀 木本朱夏 春城武庫坊 上地登美代 飛水ふりこ 居谷真理子 野村太茂津 田村あき子 渡辺富子

山宮愛恵 西原艷子 田中憧子 松尾和香 岸本宏章 鳥 録沢風花 中原諷人 新家完司 田村邦昭 植田一京 森口美羽 森山盛桜 土橋 鷲見正子 柏原優子 戸本孝子 政岡日枝子 中原みさ子 小林由多香 有沢せつ子

佐藤治代 島 三島松丘 恒松叮紅 伊藤寿美 松本文子 恒松素子 銭山昌枝 伊藤玲子 吉岡きみえ 竹治ちかし 園山多賀子 小白金房子

貝森南花 黒田茂代 小島蘭幸 山本玉恵 小林妻子 福原悦子 土居ひでの 大石あすなろ

玉置重人

小泉ひさ乃

西内朋月

古川奮水

春城年代 長浜澄子

坪井孝一

遠山可住 北野哲夫

門谷たず子 久保田千代

亀岡哲子

黒田能子 井本清山

奥田みつ子 緒方美津子 和田つづや

井上松煙

# 波多野五楽庵選

弘前市 高瀬 霜石 冗談もほどほど落ち穂拾いする 触れないでおこう紫陽花散るまでは ドレミファの音符に乗ってくる蛍 淋しいか人なつっこい秋の蚊よ 誤作動か愛の絆が切れかかる

森子 髪一本抜いておとこの背に残す 手を伸ばす握手範囲がテリトリー 東京都

富田林市

池

草枕 童話の主人公になる 青空を担いで麦の子は麦に

コンパスが軋んで愛が見つからぬ 打たせ湯に俄か菩薩のあばら骨 和歌山市 弘前市

分相応に喜怒哀楽をくり返す 老母の死を大往生と言うなかれ 和歌山市

消印に海の匂いのする手紙

通の迷子郵便から時雨

弘前市

高橋

岳水

真人間の前でおどおどしてしまう 逆転の日もあるものとおじき草

和歌山市

朱夏

私の朱 収穫祭を真ん中に 雑音をいっぱい食べた森の耳

米子市

白根

ふみ

万華鏡 今日も仮面が外せない 出雲市

疑いが解けてブランコよく揺れる 格式に背く私に急な坂 和歌山市 八尾市

煩悩を横目に風は通り抜け

真夜中のバラに野心を嗤われる 自分史の芳香剤にむせている 打って出る朝はブラックコーヒーで 終章の末尾にとっておく微笑

東京都

一本のバラが私のキューピッド 市 和田つづや

誕生日きたら女に羽化します 西宮市 門谷たず子

弘前市 斉藤 力力

和歌山市 桜井

千秀

やまぐち珠美

唐津市 宗 水笑

福井 桂香

福士 慕情

西山 幸

富田林市 中井 アキ

伊藤

玲子

吉村さち子 井尻

> 緑青の湧いた夫婦のほろにがさ 和歌山市

> > 櫻庭

順風

つなぎトンボ闇の深さを知りつくす 山根めぐみ

窓ごしに他人見ているビルの街 大阪市 前

たもつ

無限大の欲に流されながら生き 蒔苗

鳥取県

西川

和子

犬と居る人間超越した心地 弘前市

松原市 小池しげお

夢はでっかく独身寮の世界地図 西宮市 牧渕富喜子

つぎの世へ何を残すと言うのだろう 京都市 都倉 求芽

鳥取市 夏目

一粋

夢を織る機の部品も老朽化

花びらのように浮いてた金魚の死

仮の世や尻尾振ったり畳んだり 綾部市 藤田 芳郎

ヴィーナスも楊貴妃の絵もやや太目 三田市 北野 哲男

昭和史を背負う背中で痩せてきた 尼崎市 春城武庫坊

唐津市 坂本兵八郎

掴まれぬうちに尻尾は切っておく 相槌を打てばほどなく妻は寝る 富田林市 大橋

枚方市 海老池 洋

本物になろうとしても影法師

民

	気ぜわしくみんなが走るから走る鳥取市 岸本 宍真天の裏にぽっかり落し穴	市ぬ市中島浦		岩市 相馬	イメージが広がりすぎた白い画布 横り向けば点景となる母の笑み 高取市 大坪 三 高取市 大坪 三 でめてみろよとポツリ子が言った を良県 渡辺 宮	ジェンジ ・デ・・・一・「月」「江口寝屋川市 江口
郁 寿	四 宏郎 章	志 強 一	鉄 雅 治 城	一 早 稚 花 智 子	虹 天 富 子	度
女の灯ともしつづける髪染める 美しい暗示と思う流れ星 大阪府 大阪府	引き出しに蝉殻ひとつ夏が逝き良心がいつも私に意見する	燃える火を爪に塗り込む五十坂 鳥取市 原病で波打ち際で生きている 京良市	ボーホーと鳩笛を吹く弱い鬼 和歌山市 おいま	第取界 の表情で上される の表情が揃う萩の寺 を川県 を用いた石で浜辺に大人しい の表情が揃う萩の寺 を川県	いもうとが先に嫁いた無院花序いもうとが先に嫁いた無院花序いい人だ大きい声でよく笑ういい人だ大きい声でよく笑う和歌山市植木屋の鋏一歩も譲らない 藤沢市	鳥取市
小栢こずえ	西沖 彰雄 正子	米田 恭昌	ヤ保	土橋 睦子 玉置 重人	妹尾	徳田ひろこ
空蟬となっても私 まだ女 空蟬となっても私 まだ女	製工の 質け犬の肩に小さな刺がある に小さな刺がある がある	鬼火かも知れぬ夕陽の彼岸花亡くなって惜しい人だという無情でくなって惜しい人だという無情	歩き遍路にたっぷり時間だけはある 九回の裏でおんなに騙される 日立市 加	大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	好得して v ます十年 バフォート 次 何して v ます十年 バフォート 意 愛	こ申 ニュミーミッス・寝屋川市
米 州 田 野	川本林	生明四	加養橋	花 中 保田	中服 山居 部 中	岸野
幸 克 枝	小林久美子	生嶋ますみ	権   悟   螢	順 清 絹子 史 子	善 康 信 典 子	岸野あやめ

ネクタイの疲労漂う終電車 秋風にドレミファソっと萩の舞 粗末にはするなと墓に叱られる 逢うてならぬ人に逢いたくなる秋よ うっかりとその気にさせる褒め言葉 たよりない戸主と鏡も苦笑い 十一桁なにか企みありそうな 炎天下 凍りつくよな計が届く くちもとでつぶやいてますおはら節 夢を織る元気迎えが来る日まで 生き甲斐になってしもうた苦労性 鬼の首取った両手が嘲笑う 転結のあたりを流れゆく余生 終着駅のぼくも仏になっていた 坪の庭にも戦の音がする 羽曳野市 徳山みつこ 熊本県 交野市 箕面市 大阪府 岡山県 鳥取県さえきやえ 倉吉市 野口 節子 大阪市 鳥取県 高槻市 和泉市 竹原市 神夏磯典子 石谷美恵子 高野 澤田 北川ヤギエ 山本 玉恵 乙倉 正畑 山川日出子 渡辺さだを 西岡 山本希久子 宵草 武史 洛酔 半覚 和重 疑えば何も買えない食料品 相談に乗って噂にまきこまれ 病院のどの科も歳のせいと言い 鬼退治家来もみんな鬼だった 残照の歩幅を亀に教えられ 泣いているのに忘れなさいと言う他人 きき耳の方に席とる老人会 ウインクのままのダルマで負け戦 絞っても鈍器のような脳である 辻褄はどうあれしらを切り通し 本心が知りたく盃注ぎにゆく 騙されていた幸せがなつかしい 終着駅は神が握って居る余生 ごめんネが君と僕との潤滑油 切々と恋文書いた若かった 寝屋川市 奈良市 美祢市 鳥取市 今治市 横浜市 唐津市 西宮市 海南市 久保 月原 美田 井上 秋元 録沢 三宅 山梨 安平次弘道 谷口 平田 田中 坂上 西口いわゑ 松煙 和可 風花 正剣 高栄 旋風 雅子 義男 春雄 保州 宵明 実男 みね ゼロの数慌てて眼鏡掛け直す 試着室いつもOKくれるけど そうしたくて親の介護をひき受ける 改革の長い助走にみな疲れ 飛ぶ鳥を落とした事がある策士 波乱万丈だった自分史詠んでいる あかんたれ抱えたままのヒロイズム 蚊帳吊って四角に生きている余生 ささやかに一木一石通す自我 秋の風お花屋さんに足が向く 省みることのみ多し遠花火 リストラも知らずに花は咲き誇り 難民のニュースが鍋にへばり付き 盆彼岸過ぎて沈澱した思い 大阪狭山市 寝屋川市 平松かすみ 寝屋川市 和歌山市 泉佐野市 米子市 唐津市 八尾市 宮崎シマ子 大阪市 尼崎市 横浜市 出雲市

三浦千津子

田辺

鹿太

森

茜

玉置

当代

小塩智加恵

芦田

鈴美

園山多賀子

稲葉

洋

市丸

晴翠

金利ゼロ長い老後をくもらせる

田岡

九好

松丘

羽田野洋介

# 誹風柳多留二四篇研究 4

《本秀信· 粕谷長生八野秀二· 小栗清吾

田昭夫・伊吹和男

清

博美·佐藤要人

# 33 かぶらすに来る女房へ小附食ひ

本国語大辞典』) 本国語大辞典』) 本国語大辞典』)。

た。

清 わからぬ。亭王吉原へ、悋気の女房、日

女房が外出するときには頭巾を被ることが女房が外出するときには頭巾を被ることがのう。小附飯を食っているところは仲人宅で、ろう。小附飯を食っているところは仲人宅で、のではかぶらずに来るとあり、正式のは、

こつけめし二た箸喰ふと根からなし

態)にかけ込んで来た嫁(恋女房)の句では橋本 新世帯(親の許さぬ恋人と同棲した状間と一番を表達の重荷に小付飯 ニニュー 明八宮2 明八宮2 明八宮2 明八宮2 田舎茶屋恋の重荷に小付飯

で飛び出した状態なので、食事もとれなかっ帽子はかぶれないのである。家人の目を盗ん帽かからうか。正式の婚礼は出来ないので、綿なかろうか。正式の婚礼は出来ないので、綿

ので、新世帯の女房、どうやら女郎上りらし房になった女は湯漬飯を好んで食べるという佐藤 大体橋本説に賛。綿帽子を被らずに女本堤で湯漬飯を食う?

354

そら色へ禿の目にも青く見え

ろう。

食べる習慣が身についているので、世帯を持

い。妓楼のあてがいぶちの飯を湯漬けにして

ってからも小附を好んで食べるというのであ

北京を

③不祝儀の時に着る水色の疑問も当然ある見えるというのでいいと思う。 紺屋が吉原へ見えるというのでいいと思う。 紺屋が吉原へ通ったことがあるのかなどの疑問も当然あるのだが。

をしているという。②薄藍色のこと。 商家の

称。藍に染めていて、空の色のように青い色つの意味が記載されている。①紺屋の手の異

空色については、『川柳大辞典』に三

中年者などの四季施を指していうのである。

小栗 「青い」は「未熟だ。拙い。特に、粋道に十分に通じていない」(『江戸語の辞典』)道に十分に通じていない」(『江戸語の辞典』)の意ではないか。つまり、礎稿のいう②または③のような手合は、禿のような幼い者の目にも色街に慣れていない無粋者とわかる、という意だと思う。「空色」と「青い」を縁語いう意だと思う。「空色」と「青い」を縁語いる。出い。特に、粋小栗

主題句は③を取りたい。 を目でそれと判る。そら色には②説もあるが、 と目でそれと判る。そら色には②説もあるが、

清大一座説に賛。

うすがきやそら色で来て初会ぎりそら色で行よし原は久しぶり

Ті 18 大一座黒とそら色はわけなり

佐藤 大一座の客に賛。それも葬式帰りの一流 プー座記し

# 55 きつい事男にせずにつれて出る

♥こ めていう。たいしたものだ。(『日本国語大辞めていう。たいしたものだ。(『日本国語大辞とれが普通でないことを感嘆の気持ちを込大野 ⑦ある行為やことば、状況などに対し

吉原の遊女を身請けして連れ出すことを詠吉原の遊女を身請けして連れて出るのはたいして女の姿のまま堂々と連れて出るのはたいしたものだ。金もかかっているが、遊女を身請けける心意気を誉めているのであろう。きつい事女の形りで連って出る E7

天五智4

天一義2

たのもしい客丸わたをかぶせる気

小栗

賛。自分は男になる。

### 清·佐藤 同。

356

富士の夢丸綿めすと乳母判し

「一富士、二鷹、三茄子」の最上の吉夢であ大野 娘が見た初夢は富士山の夢であった。

丸わたをたしかにかぶる不二の夢 一五22 た。

小栗 賛。丸綿は富士の冠雪からの連想か。 富士の縁語の如く使われている。 四五4 大綿へ不二の山ほど高く盛り 四五4

情力の大い雪で、ご言る所しる。 『四回 「新本一賛。乳母は実母以上に、育てた娘の将 「神子」と言うと言る所しる。 『四回

大野

「がたがた」は、堅いものが触れ合っ

清礎十小栗説賛。

# 33 玉むしハあぶない役をいゝつかり

一・那須與市の事参照。(『川柳大辞典』) 一・那須與市宗高が馬を波打際に乗り入れて、女。那須與市宗高が馬を波打際に乗り入れて、日の扇を揚げた船に乗って源氏を招いた官日の扇を揚げた船に乗って源氏を招いた官

とつ間違えば自分に当たるかもしれない。 ひとつ間違えば自分に当たるかもしれない。 かとつ間違えば自分に当たるかもしれない。 かとの間違えば自分に当たるかもしれない。 かとの間違えば自分に当たるかもしれない。

土弓の玉虫与一さんちとお寄り ニカ8 玉虫の外ハ官女の名はしれず ニカフ、両軍の拍手喝采となる。

清·佐藤 賛。

# 38 がたくとするとさんまを焼て置き

片付ける音を聞いて、食事のためにサンマを米搗き道具を片付ける。そのがたがたという米搗屋が仕事を終り、または食事時になり、て発するような、騒々しい音を表わす。

あを向てつき屋さんまをふつり喰 焼いておく。

追ィだきの下ゥへさんまをつつくべる

ます。 **粕谷** 賛。こはだ、このしろなどの句もあり -- 八30

このしろを買ハつきやじろく一見

やきたてのこはだつきやへちそうなり

めじかをばにこりくとつきや喰イ

安元智2

8

清·佐藤 賛。

## 女性コーナー

# 前者のさ

## 政岡日枝子選

きゅっきゅっと心を磨くガラス拭き あぶったら海に戻りたがるスルメ 夢多き蛸が迷うた蛸の壷 鬼は鬼らしく仁王立ちがいい シャボン玉割れて少うし安堵する ザワザワと竹の林が噂する 拭き直して鏡に奥のおくを問う 思いきり高く飛んでもしゃぼん玉 機関銃の口へ対抗策がない 柿も蜜柑もいくさを終えた色になり 謎めいた部分も拭いておく鏡 愛は錯覚もうすぐダイヤ婚になる 朝顔乱舞立ち去るものは美しく 立ち止まり流れるものをせき止める 直線を引くと味方が消えてゆく したしさの中でゆっくり折るけじめ この森で休む満たしてくれるもの 人間にもどると泣けることばかり

古鍵の中に私の小さい罪

鳥取県

石谷美恵子

影法師いつかわたしも陽をあびる

誰にでも尾を振る犬で頼りない

米子市 西宮市 出雲市 尼崎市

和歌山 羽曳野市 富田林市 和歌山市 藤井寺市 和歌山市 富田林市 東大阪市 大阪市 愛媛県 西宮市 高知市 吹田市 米子市 西宮市 米子市 米子市 弘前市 福井 中井 白根 中井 徳山みつこ 楠見 川久保睦子 門谷たず子 山本希久子 牧渕富喜子 鴨谷瑠美子 小川てるみ 田中美弥子 ふみ ツネ

ダイエットなにもしないで秋が来る 秋の雨この子の通夜を悼むよに じゃがいもの芽には丈夫さかなわない じっくりと川の流れを読んでいる この街のまたうどんやの灯が消える 亡父母の忌を終えれば道は暮れるのみ 日本の音だカラコロ快い 手で掬う重みを増した秋の水 繰り言はいつまで続くガラス拭き 孫のひまわりゴッホより味がある 天井に素顔を描いている時間 湧き水は昔むかしの母の井戸 Eメール人の温度は読み切れぬ 歩きます有情無情を道連れに しばらくは至福の時をブラームス 煩悩が乾かぬように飲むお酒 釣瓶落とし立てるプランは少なめに カルチャーへ弾むスカート踏まれそう せっかちで一つ飛ばしの数え唱 やさしさに蝶を深追いする花芯 自己主張持って生まれる鉋屑 大好きな景色を消しにくる残暑 筋の煙が恐い玉手箱

和歌山市 藤井寺市 和歌山市 寝屋川市 藤井寺市 富田林市 大阪市 櫃原市 岡山県 今治市 鳥取市 鳥取市 倉吉市 鳥取市 三田市 八尾市 大阪府 八尾市 倉吉市 八尾市 米子市 中島 米澤 野坂 居谷真理 塩路よしみ 桜井 野口 録沢 平松かすみ 山中 福田 久保田千代 古久保和子 太田扶美代 土居ひでの 村上ミツァ 徳田ひろこ 高田美代子 片岡智恵子 宮崎シマ子 なみ

逢えそうな夢も果敢ない酔芙蓉 さあ早く拍手あるうちアンコール 心機一転 髪は二センチ切っただけ 今度逢うときはわがまま言ってみる 万葉集に取っ組んでから偏頭痛 ここだけの話が飛び火曼珠沙華 誤字混じりでも読み返す娘の便り 行く道を照らしてくれる御念仏 奇跡とも言うべき二人結婚する 抹茶飲み今日は日本の女です ささやかな贅八月の土瓶むし 常識を踏み外してた深呼吸 病葉が秋の名残りを知らす窓 歳月をこぼして今日もサンマ焼く 神様の死角の多い世になった 日本の夜明けに残る相聞歌 心の疵にバンドエイドが届かない 百日紅百日私癒される 私だけの海が瞳のなかにある 他人には報せたくない雨期乾期 それぞれの事情を抱いて見る花火 張り紙が犬の散歩に物申す 痛む心を大きな栗の木にくくる 神様にもらった素顔だから好き わだかまり抱いて向き合うはめになる

> 尼崎市 香川県 東京都 鳥取県 鳥取市 後藤 川崎ひかり さえきやえ

池田市

寝屋川市 和歌山市 海南市 太田とし子 松原

大和高田市 愛媛県 鍛原 茂代

鳥取県

八尾市 津守 髙杉 淡路ゆり子 柳伸

アルゼンチン 和歌山市 倉吉市 香芝市 米子市 米子市 木村 松井美稚子 瑞枝 英子

> 見た目より強い女房感謝する 顔色を読むからノーが出て来ない ふんばってふんばって老母丸い背な

> > 箕面市

奈良県

渡辺

切り抜きも貼って三年日記終え

老い二人切れては繋ぐ点と線

降るごとに何時しか山の衣更え

かなかなの声も淋しい晩夏光 病院で様と呼ばれている私

夕焼けに抱かれて風が嫉妬する ぎらぎらの目がバーゲンを掘り起こす

こおろぎが秋の暦を知らせてる 愛という土産を置いて人は去り 親離れする娘が二人その覚悟

両親を成長させる不肖の子

久びさのヒットに脳が弾み出す

優しい風よ夏を越せたよありがとう

東大阪市 今治市 尼崎市 熊本県 鳥取県 横浜市 藤沢市 米子市 米子市 妹尾 安水 野村 西川 田中 岩切 門脇 内田美也子 笑 安

和歌山市 寝屋川市 鳥取市 大阪市 大阪市 上地登美代 星野きらり 坂上 松尾柳右

だり、光ったりする者は出て来るものです。夢は力なり、強さなり ると友達になれると昔の人は言ってます。 切ってあって、素直に頷いてしまう句である。 心の強さが見えてくる。情報化時代の対人関係の難しさをズバリと の人柄もよく出ている句である。アキさんの句―直線を引く作者の はいかに生きいかにあるべきかを、この句によって教えられ、作者 です。富喜子さんの句一今、最も大切な事はこういうことです。人 で片付けられる世の中であるが、されど弱者の中からでも高く飛ん んの句一深読みをしても、句の通りに解釈しても、たかが「何何 心身共に落ちつけて満たされるその場所に私は惹かれる。美弥子さ きます。生につながる森はとてつもなく奥の深いものであるのだが 田鶴さんの句―この句からは魂が癒される不思議な音が聞こえて しかし、ほめてあげ

和歌山市

東京都

やまぐち珠羊

出雲市

園山多賀子

喋

る

## 黒田くに子選



うれしさをリズムに乗った字が喋る 本のたばこ喋らす黙秘権

ヒサ子 りつえ ぼけている母は昔をよく喋る お喋りが過ぎて墓穴を掘っている 口下手の婿 飲むほどによく喋り お喋りをしても痩せない下半身 氏素性しゃべる女に気を許す よく喋るワインだ女酔うている お喋りは禁物ひとり友が逃げ 喋らせるコツ心得て調べ室

村民がお喋りに来る駐在所 よく喋る母さんのいる大家族 救急車喋る力があり安堵 愛子さま喋られる日が待ち遠し おめでとう その一言でいいんです

(種)

夫

み

いまノーと喋らねば核吹き溜まる 言が喋れた病床安堵する

洛

酔

みつこ

弘

お喋りがとても楽しいレモンティー

お喋りに拾う知恵あり二つ三つ 口止めをされると無性に喋りたい うまい酒 無口な父を喋らせる

お喋りの元気にどっと電話代 責任の無いお喋りに花が咲く 親の私語チャック付けたい参観日 ガムテープ口に貼りたい孫五歳

たもつ 智加恵 脱線が好きな生徒と先生と

言の情けに溶けた黙秘権

鐘

喋ることない古里に老母独り 饒舌で笑わせ上手なさんまさん お喋りがぴたりと止まるカニが出る 片言のお喋り家を丸くする ひまわりがもえてゴッホを喋り出す よく喋る孫だがトイレだけ言わぬ 子を生んで無口な嫁に語彙が増え 携帯は喋るが口は喋らない

重みある一 言だった床柱

小西

雄々

線香の煙で亡父を呼ぶお盆 乱世の煙が老いの目に染みる

島民の絆を強くする煙

劦

ユーモアをまじえ講演受けている

百点の鼓動伝える子の喋り

喋るほど辻褄合わぬ朝帰り 父ははや新聞屋さんと喋ってる

一ぱい喋り笑いを取り戻す

(西)和

水

シマ子

失言がいのち取りにもなる世相 古徳利ちちの苦楽を喋り出す お喋りはまっかなバラにまかせよう 無駄の無い喋りで丸くなる家族 喋るのが下手で手紙を書いてい ミツ子

こずる ひかる 度 知 涯 栄 匠 重 佑 D51の煙苦しくなる上り 永らえて煙のような日向ほこ 煙幕を張って噂に遠くいる D51の煙を追った少年期 マンションでけむりの出ないさんま焼く

噴煙に不安が続く三宅島

セツ子 順

香煙にしばし浮世を忘れてる 煙幕を張った不正が多すぎる

禁煙に孤立無援の父の旗 コマーシャル煙の出ない魚焼き 砂煙飢えになく子の国がある 廃坑に煙を知らぬ月が出る

たず子

智加恵

老いてなお子には煙たい父である 手紙焼く煙と消えた青い恋 飛び火した煙が怖いうわさ撒く 木炭車煙なつかし少年期

たもつ 鉄

睦子

煙

## 高橋

粋

岳水選

噴煙を上げて地球が病んでいる 湯煙がみんな美人にしてくれる 民のかまど永田町から見えますか 今日子

ミツ子

あずま

#### 路

禁煙ができたら凄いなと思う 揉み消しの中途半端に立つ煙 年金が好きでたまらぬ湯の煙 煙立つ無関心ではおられない その一服命を刻む煙かも サンマ焼く煙の中にあるいのち 湯煙に心のひだが一つ溶け 線香の煙に亡母が咽せている 煙霧茫々富士山頂で待つ日の出 ゆらゆらと線香亡母の形して 香煙をゆらし遍路の経つづく 硝煙に晒してならぬ日章旗 無に還る煙ひとすじむらさきに 条の煙となった会者定離

> ヒサ子 中 百の窓百のくらしの影が舞う 幸せな家だね窓に花いっぱい 窓全部月下美人に明け渡す 窓の鉢きっとやさしい人だろう 満月を猫にも見せている窓辺

> > みつこ

お隣の窓から洩れるドレミファソ 御近所のホットな噂聞く出窓 どこよりもわが家の窓の灯がぬくい 窓ガラス二回拭いてもまだ淋し 小さくとも明日の見える窓を拭

智加恵 りつえ たもつ

窓

寿恵子

バーベキュー煙とともに盛り上る

#### 宮野みつ江選



兵八郎 ふるさとの見えるこころの窓がある 恋の文窓辺の月に覗かれて 窓越しに雲の流れを見て昼寝 借景の窓が絵になる秋になる カタカナの花が落ちつく飾り窓 窓ガラス拭いてきれいな山にする 窓の灯を皆しあわせと決めている 窓閉めてから夕焼けにさようなら 大都会ビルの窓拭く職もあり 白い雲うつる高層ビルの窓

草

美也子 螢 天窓を透かし星座と対話する

煩悩児

ショーウインドーに猫背を映される 窓越しに彼が小鳥の真似をする 焦ったか鳥も激突ガラス窓 モナリザは窓を開けても来てくれず 人が好き心の窓は開けてある

奥五

K

今日子

窓際でなければ見えぬ視野がある

守るべきひとあり二重窓にする 窓越しに隣へ分けるふかし芋 窓開けてピーターパンを待っている 窓全開何も失うものなくて 学などはないが子の窓磨く母 風船とボクも弾んで窓を翔ぶ 窓開ける訳にもいろいろあるんです 窓からの予期せぬ風が謎を解く 裏窓から覗けば本音落ちている めぐみ 敏 ちかし 朝

亡母の星に逢える小窓を持っている 淋しい窓だね花いっぱい咲かそ

宮崎ヒサ子

天

涯

子

湯煙の中で再起の背を流す

働き蜂の狼煙が上がる縄のれ

霜

石

裏窓に油断があって出る噂

虚も実もあって煙草をやめられぬ

土橋

螢

北窓へやさしい花が競い咲く こころの目開き大きな窓にする

巳代一

北の窓ぬくい便りに飢えている いい夢は東窓からやって来る 警鐘として見る対岸の煙

俊

子

手紙焼く煙に消えていく迷い 落葉焚く煙が秋を深くする 約束が煙と化した玉手箱 煙ったい父の一語が効いてくる 湯煙の中に至福の首が浮く

107

## 和步数室

#### 叩

田だ公意

じ方は異るが、その感じ方の度合いが問題で だと言われますが、これは川柳だけに限られ あると思う。 い。同じ一つのものを見ても人それぞれに感 を見ているようでは何事にも進歩は望めな ても大切なことである。他人と同じ視点で物 たわけではない。芸術の世界や産業界にとっ 川柳は見付けつまり着想とか着眼点が肝腎

ことは、実際には容易なことではない。それ は自らの経験が中心となって、事象を看る。 奇の目を向け着想を豊かにされているようだ。 から感覚を研ぎすまし、一寸した事象にも好 からだと思う。川柳作家といわれる人は平素 だが同じ人にとって視点を異にするという

▽師の門を叩けどいまだ道見えず )師の門を叩き生涯道照す 修業のむずかしさを詠めば

> ▽叩かれた師匠のおかげ今の芸 ○成績が上がり叩いた師を思う 〇ストレスを吐き出し叩く布団干し 喜 う。少し視点は異るが 「成績が上がり」が説明句にしていると思 明

▽布団干し溜めたストレス叩き出し ○針ほどの汚職も叩けば棒になる 倒置法で考えてみることも必要では 栄 呼 子

▽どの椅子も叩けばホコリ出る議員 原句もいいと思うが

▽逆らったツケやってきた肩叩き ○豊作の叩く太鼓の村まつり ○叩かれた肩が知ってるリストラを 叩かれた肩・リストラは類語といえよう。 内容が連想される言葉を並べては無駄 豊作=村祭り=太鼓同想異句。 つまり同じ ゆきの トシエ

▽叩かれて覚えた技が身を助け ▽豊作へ太鼓の音も冴え渡り ○若い頃技磨くのに叩き込む 同じ内容だが少し視点を変えて

三喜夫

▽行く末を案じて叩く親の愛 〇叩く手に愛を信じて母を追う 分らぬでもないがややつくりすぎの感

▽マニュアルでマルチ商法叩き込み ○マニュアルを叩き込まれて悪商法 下六はできるだけ避けた方がいい 英

> ○久々に雨が地球を叩く音 球・戸を叩くという同想句が多かった。 人間が詠めていない。肩叩き券とか雨が地

▽旱魃へ大地を叩く雨を待つ )雑念を叩き出すよな座禅場 警策(座禅で雑念を除くため肩を叩く長い

▽警策が雑念払う水平寺

板状の物)等小道具を用いるといい

)幾たびか叩いた息子五十歳 上五の表現が冗長。

▽ごんたするたびに叩いた子も五十 一子を思い辞表へドアが叩かれず 子のために思いとどまる様子だから 惠

勇

▽叩きつけたい辞表に子等の顔浮かび ○今時の子叩けばガラスの心破れ 裕

ガラスとあるからハートの方が

▽現代っ子叩けばガラスのハート破れ ○窓叩く風に空耳亡夫の声

空耳が冗句

▽窓叩く風に亡夫の声を聞く 子を叩き後で理屈を考える

弘

之

説明句と言える

▽子を叩く躾に理屈などいらぬ ○ライバルに肩叩かれて気が抜ける

更

旺

私なら下五を

子

▽ノックして安否気遣う老母の部屋 具体性が乏しいため内容が把握できない	○今日もまたいつものドアをこつこつと 洋 介	▽先生が首を覚悟の愛の鞭	全くの説明句。反対の見付けをすれば	○先生よ僕を叩けばクビですよ 栄 一	▽実力のあった男も肩叩き	上五が冗長。肩叩きだけで十分	○窓際で肩叩きされ職場去る 忠子	▽蚊を叩く夫の頬を思い切り	こんな時にしか叩けない夫の頬を――	この見付けは面白いだけに上五がいけない。	○ゴメンナサイ夫の頬の蚊を叩く 山雅 子	▽披露宴義理の拍手も盛り上げる	義理客以下の表現が今一つ	○披露宴義理客まばらに拍手され 勝 久	▽訪朝で扉叩いた拉致疑惑	二句を合成してみると	〇叩いても叩いても出る疑惑たち 真一	○北朝の扉を叩く小泉さん	▽軽口を叩いて妻の退院日	もう少しさらりと詠んで欲しい	○妻快気軽口叩く癖戻る 和 輝	>大掃除叩く畳もない暮らし	原句もいいが、マンションなどを思うと	○なつかしい畳たたいた大掃除 欣子
願いごとひとつを胸に鐘叩く 敏黙がそっと胸底ノックする 美疏	あの人も叩けばきっと出るほこり アヤ	立っち出来手を叩いてる十ヶ月線	叩かれる前に逃げ出すのが次男照	肩叩きされたぐらいでへこたれず 郁	佳句	▽ほろ酔いが椀を叩いてとるリズム	上五が冗長。	○宴会の微酔いリズム椀叩く節	▽叩き上げ職人みごとな桧皮葺	何をものにしたのか具体性を欠く。	○叩き上げ年輪積んでものにする 大	▽質草の足元を見て叩かれる	詠まれたらよいのでは	質の草(種)は勝手な造語。ここは素直に	○足元を見て叩かれる質の草   昌	▽叩かれてから根性がもたげだし	同じ内容を	○叩かれて頭もたげる本真もの 章	▽肩叩きする人明日は我が身かも	下五を断定しない方がいいのでは	○肩叩きする人明日はされる人 侑	▽二学期へ教育ママの尻叩き	尻を叩くのは励ましであり、中七は冗長	○さあ二学期しっかりせよとしり叩き 文 江
敏子 叩かれて素直になった少年期美弥子 私の句	アヤ子(擬人法。上手い見付けと表現)	錦叩かれて揉まれて旨いパンの生地	彦(表現に無理なく立派)	代神技に酔って拍手の鳴り止まず	(ユーモアの句。見事)	皺のばすためなら顔も叩きます	(中七の表現がいい)	子叩き上げ腕一本の自信作	娘が残すピアノ叩けば海の詩	窓叩く風かそれとも待ち人か	へ 鯰 叩かれて耐えて磨いた名演技	子を叩きながらも涙母の愛	大口を叩いて座る場所がない	<b>弾に 叩いても出ない血管医者泣かせ</b>	D 鼓 うっぷんのモグラ叩いた憂さ晴らし	叩かれてやっと目覚めた日本ハム	叩かれて正気にかえる惜しい夢	一 司 叩かれた釘が大きな仕事する	むだ口を叩ける人の横がいい	叩かれて叩き返した手のつらさ	F 子 ポンと背中叩いて見れば人違い	たたかれた日もあったけど今は幸	<b>1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.</b>	へ 江 もう叩くことない五寸釘が錆び

つ 栄 フヨ菜 ふ 嘉 鈴 円 ヤ 九 敬 輝 宏 弘 満 こ 登志 和 ま シ ジ 枝 月 こ 彦 美 女 エ 好 介 夫 子 子 え 子 友

安子

## 秀句鑑賞

### 同人吟 早 川 盛

夫

はなくてもできますが、も一つ生涯の趣味としいは、 和菓子製造技術と同じ一級です。川柳は体力 はなくてもできますが、スキーとなるとそうはなくてもできますが、スキーとなるとそうなくてもできますが、スキーとなるとそうないますが、スキーとなるとそうなるとそうないきません。かつて長野のゲレンデを滑走です。

そんな私に、秀句鑑賞の依頼が舞い込み、そんな私に、秀句鑑賞の依頼が舞い込み、

ウェーデルンするのが精一杯です。

求められていくものと思われます。人間の生求められていくものと思われます。今ち、軽み、対不可欠の条件となっています。川柳も時代とものを求め、時代を先取りした発想と視野がものを求め、時代を先取りした発想と視野がものを求め、時代を先取りした発想と視野がものを求め、時代を先取りした発想と視野が絶知がある。

いはずです。 然川柳もそれに伴って変わらなくてはならな活も変われば考え方も変化していきます。当

## いやがられ煙たがられて頼られる

付いた時に懇ろにお詫びをすれば。
うかね仏壇の花も。いいじゃないですか気が
あ三回忌か長くても七回忌ぐらいまででしょ
あ三をいりますが、ま

## 機械には人の未来は任されぬ

三好專亚

冗談じゃない、人間がなぜ機械に将来を託ることか。それを思うとやがて人間も機械にあことか。それを思うとやがて人間も機械にることか。それを思うとやがて人間も機械に陥れてしまう。

### 六時には帰る夫をもてあます

ちょっと待って下さいよ。家族のためと思えばこそ同僚の誘いも断わり、好きなパチンコもやらないで会社から真っ直ぐ帰宅しているというのに、それはないでしょう。それはそれとして、今時そんな生真面目なそれはそれとして、今時そんな生真面目な男性っているのでしょうかねぇ。確かに私も男性っているのでしょうかねぇ。確かに私も男性っているのでしょうかねぇ。確かに私もりにこれは決して思っていませんでした。ていようとは決して思っていませんでした。でしろ感謝されているものとばかり思ってたけにこれはショック以外の何者でもない。だけにこれはショック以外の何者でもない。

### 生む方も生れる方も必死なり

た感動の瞬間。

### お化けよりお菓子が怖い血糖値

ーでケーキなどに比べても遥かに低い数値な 饅頭一個(約50グラム)の値は九十二カロリ る。言っておきますが、和菓子は繊維質も多 きていくより手はない。かといって川柳で食 ちとら堪ったものではない。ただでさえ売上 くカロリーも少ないダイエット食なのです。 べていけるはずもなく、思案のしどころであ れなくなったら廃業して好きな川柳一本で生 げが底をいっているというのに、これ以上売 真っ直ぐにお菓子を標的にされたんでは、こ れたものだ。糖尿病の気があるからといって お化けよりお菓子が怖いとはよく言ってく

饅頭もあなたも同じ位好き

ぞ川柳という楽しい句である。 りあげてみましたが、どちらの句も正にこれ っと相思相愛のすてきな夫婦だと思います。 で、誰よりも愛しているのだと思います。き んな句を詠める奥さんは人一倍あなたが好き ある。それにしても可哀想なあなた、でもこ ってしまったのか。随分見下げられたもので 私は饅頭屋であるから、饅頭の句を二句採 男もとうとう饅頭一個の価値でしかなくな 山昌

### ふとした縁で生涯の友に会う

る。そんな思いを誰もが経験したことがある 会い、縁というものは真に不可解なものであ とは誰が予測し得ただろうか。人と人との出 と、生涯に渡って親交を交えることになろう 酌み交しながら語り明かした行きずりの旅人 がけない所に手蔓ができる。というのである。 遠方の名産などを口にする。何かの縁で思い に縁者ができると、そのために思いがけなく るれば唐の物を食う」という言葉があります。 (国姓爺後日合戦) 家族が結婚をして、遠く 鄙びた山宿の薄暗いランプの下で、地酒を 全くその通り、中国のことわざに「縁につ

## 研修会ちょっと勉強しては飲む

勤めをしていた頃、たびたびこの研修会とや らに参加して羽根を伸ばしたものだ。 題視されてきた。今だから言えるが私も会社 の海外旅行はその最たるもので、たびたび問 主に公務に携わる者に多いようだ。議員など てはできている。叱られるかも分からないが 単なる口実で、始めっから飲み食いのお膳立 これだから川柳は止められません。研修会は たハハハハ、何と楽しい句であることか。

### 旅慣れて鞄一つのJALパック

展してきたのです。 シャツ、スニーカーというスタイルにまで発 重ねる度に簡素化されていきジーパンにポロ のでした。しかしそれが二度目三度目と回を はじめとする嗜好品から、電気カミソリに三 ーロッパへ旅した頃には、二週間分の下着を されていくものである。私の場合も初めてヨ つ揃いの背広まで詰め込んでそれは大変なも 海外旅行も回を重ねるにつれて準備も省略

ることです。 ルに巻き込まれてしまうケースが多発してい 慣れてしまうとつい油断をして思わぬトラブ

でも気をつけないといけないのは、余り旅

### 走らねば倒れる僕も一輪車

とになろうか。 番不安定で危なっかしいのが一輪車というこ かは運転する人の技量にもよるが、やはり一 り、一輪車もある。どれが最も安定している なかろうか。四輪駆動車もあれば三輪車もあ 宿命を負っているのが「にんげん」なのでは 人間どこまで走ってぶっ倒れるか。そんな

賞させて頂きました。 たくさんの句の中から楽しい句ばかりを鑑

#### 水

-10月号から

節 夫

### 完璧へ塗り足せば画布黒くなる

く。巻頭に相応しい一句だと思う。 から色を重ね深みを増し、完成に近づいてい 水煙抄10月号巻頭吟。絵も人間もデッサン 田芳郎

#### 石一つ水の流れを変えている

石一つの存在は本当に重く大きい。 石一つの重みを、さらりと詠まれているが、

### 散骨は戦友が待ってる海がよい

は無いが、戦友との絆は非常に強いと聞く。 わたし自身も青い海への散骨に憧れる。 十歳のとき終戦を迎えたので、戦場の経験

#### 言う事を聞かぬ頭だ手だ足だ

く、手足のアンバランスな動作、驚くばかり。 日に日に脳味噌がハイペースで減って行 田かず枝

## 負けて勝つ知恵を拾った回り道

人生に本当に役に立つ回り道だった。 がある。苦しかった二年の経験が、その後の 単身赴任で二年間、過疎の島で過ごした事 森下 知

## 役人が技を極める二枚舌

誠

は朝めし前かも。わが国は役人天国だ。 家や国民のことは眼中に無く、二枚舌くらい ために得意な法律を縦横無尽に駆使する。国 役人は己の保身のために、いや立身出世の

### 莫山の穂先は海を飲み尽くす

る書は雄大で実に壮快だ。正に芸術の書。 筆の穂先を利かせて、一気に文字を書きあげ 榊莫山先生、ふとい筆に墨をたっぷり浸し、

### 北極の海が泣いてる温暖化

て人間は地球へ生き残れるか不安である。 かりでなく、地球全体を汚染している。果し 人間のエゴの付けが、氷山を溶解し、海ば

### 砂に水吸い込むように母の愛

の愛情は、砂が水を吸い込むようであった。 なって惜しみなく愛情を、そそいでくれた母 苦しい時、楽しいとき、陰になり、日向に

## 太鼓判押して彼女を連れて来る

りましょう。大臣も社長も役人も信用出来な い世だからこそ、腹を痛めた息子ぐらいは。 自分の息子が太鼓判押すのだから信じてや

#### 夏の夜星を眺めて宇宙論

だった。縁台で見た星座の輝きが、目に焼き 息子や孫と宇宙について語り合いたい。 ついている。流れ星にも何度も願い事をした。 少年時代から夏の夜空を眺めるのが大好き

## せんべいで写真に入る奈良の鹿

かり写真にハイポーズ。奈良の鹿は役者だ。 っているせんべいを鹿が食べている。ちゃっ 呼びもしないのに何時の間にやら、手に持

### 隣席の美人へ顔が向きたがる

もそぞろだ。気になって仕方がない。 自然と目がいく。まして隣に美人が居ては気 世の男性の多くは、近くにいる女性には、

#### 年金が介護保険で薄められ

険料は年金から待ったなしで差し引かれる。 に大丈夫なのか不安である。しかし、介護保 先行き不透明で、年金も介護保険も、本当





若葉キラキラ ちがいなく 完司 この世



平成14年9月29日

原艶子 れるので、 瀬戸の海を見おろす古城山は、 名のテー 並びに句碑除幕式が、 名は第2の故郷を持った喜びを、 一人・家族約50名が見守る中いっせいに除幕された。 川柳塔同人は、 天気予報が外れ上天気になった岡山県笠岡句碑公園で、 立派な句碑公園が完成する。句碑建立句募集はずっと続けら 第3回井笠川柳大会の天位の賞として贈呈されるもので、 (第3回) プカットに続く句碑除幕は15基。 井笠川柳会「蘗」 ·新家完司 西出楓楽 午前11時30分から行われた。 へぜひ挑戦してほしいとの事である。 (第1回) (川柳大会) 4氏という快挙である。 町おこしの一環として今後整備さ 懇親宴で分かち合いながら、 ·小島蘭幸 蘗 誌上大会1~ 第2回 市の関係者8 開 、園式 4 西 JII 

地踏 む足だ太め 0 方が U 11



ゴルフなど知らぬトップの作業服 楓 楽



### 毎月24日締切・30句以内厳守

#### JII

久保睦子報

ハーブ園香り十分吸うて来た

今年の花みなせかせかと咲き急ぎ 諺は昔の人の良い教え W杯気力で進んだハングリー せせらぎに蛍は愛のランデブー 振りすぎも足らぬも愚痴の梅雨の雨 日の丸をきれいに振ったW杯 子を探す猫はいらつく声を出す 御気軽に有名店の初夏の味 日本晴れ無欲の心透き通る 今夜また薬の助け睡眠だ 一人生き長らえて日々むなし

はじめ

不景気は財布開いてまた閉める 何処までも歩くつもりで市街地図

弟子もなく師もなく壁と向い合う 俳人は当用漢字に飽き足らず 妻病みて当用買いが板に付き パソコンに小二の孫にお弟子入り 兄弟子に技も遊びも教わった

陽が沈む前に戦を語らねば 座布団三枚只今昼寝中

ふる里の青田を渡る亡母の風

志華子 久留美 あい子

守

回避せぬ戦争責任 元兵士 美しく生きる戦いつづけてる

とし子

手話教室偲ぶ奥山さんの句誌

舶来の野菜気になる農薬度 美しい花に意地悪したくなる 雨水を受けて艶なる花壇草

> さわやかに国旗を振って敗者去る 紅いバラ娘がくれて罪がない 朝からの迷いが晴れるレモンティー そのうちに光る気がする床柱 父の日父珍しくよく喋る 医者と縁切れぬが無事に暮らしてる 腰抜けが腰抜け笑う茶番劇 族議員いて改革の道遠し 幸せに近いところに君といる 青春の海で拾った玉手箱 ムードなど要らない妻の酌で飲む

長谷川呂万報

中元のまつり万灯偲ぶ人

みよ子

判決の情けに遺族割り切れず

サークル檸檬

(前月分)

泥かぶる次の一手に事情あり

八情の温みに根付く北の果て

ここはまだ人情生きる青テント 七転び八起きで人の情け知る

佐津乃

岸和田川柳会

ピンポンで隣の中元ばかりくる ささやかな恩を忘れぬお中元 わが名前当用漢字に無い誇り 黒ころも仏の弟子はジャズを聞く 都合よい話のうらに落し穴 何とでも都合つけます招待日 御都合は如何でしょうかデートの日 お上の都合十一桁の背番号 坊さんの都合で決まる法事の日 お中元受取ったらし黙礼され 柳宏子 さよ子

登美子

トヨ子

達

あやめ ひさ乃

子のためと情け心を鬼にする

長生きの師匠で未だ弟子のまま 携帯が当用漢字忘れさせ 家計簿が当用日記を兼ねている

当用日記白い八月十五日 隠しても当用日記で嘘がばれ さしあたりこれだけしてと妻寝込む 情けない 老母に劣る記憶力 大阪の情けが好きで人が好き

ダン吉

ゆり子 みつ江 緑

故小林 一夫報

敵国の人もやっぱり戦没者 歯科の椅子無神論者も祈る場所 戦いに疲れて庭の虫を聴く 六十路なお薄闇つづく転び癖 炎天下マナー違反を許し合う みつ子 希久子 いわゑ

究極の贅沢だろう在宅死 初化粧女のいくさ始りぬ

戦いの名で征ったきりいいなずけ 象の花子は飢え死んだ

あずき たもつ

海行かば 兵は木の葉に乗ったまま

#### 高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報 義 7

老い二人ご意見無用平和な日 浮気だなまた一ツ消えてる釦 世の輪廻生きる不思議を拝み合い 絵に描いた餅を焼いてるのは詐欺師 積乱雲に背中おされてする決意 親父のような入道雲が笑ってる 天平の甍の背なに積乱雲 **夢弾ませて積乱雲に紛れ込む** 木の釦秋の噂を聞いている 甘えたい背なの釦は外しとく 私の飾り釦は恋が好き 胸の釦外した恋の熱い風 かけ違うボタンで愛が崩れだす うかうかと相槌打ってからの修羅 うかうかと飛んで風船ひとりほち うかうかと浮世の甘い風に酔う うかうかとメールの誘い閻魔かも うかうかとラベル信じて食べている 乱行の記憶を辿る二日酔い 脱線をしたとこで会う酒仲間 また何か脱線しそうな電話口 ガラス玉人のこころを値踏みする 窓ガラス曇りが許せない律儀 ステンドグラスの影に私が裁かれる カクテルが透けて揺れてる軽い嘘 砂輝守 スミ子 恵美子 柳宏子 比ろ志 満寿蔵 稲 五 イク子 尚

> 積乱雲海の男は風を読む 太陽があり年金があり生きている 身の丈に合うた倖せサンマ焼く

禁断の実だから触れてみたくなる

活澄

山崎 君子報

包みこんだ自分ときどき日に当てる オミナエシやさしい風と秋をよぶ すり切れたつむぎばんてん身になじむ 食べ物が嘘つく国になり果てた

人生の稔りの秋だ御用心

みつ子 キク子 ミサラ

あの頃はメルヘンだったお月様 バラ色の人生だった頃二十歳 好きなのは君だけなんだ憎い嘘 あの頃はローズみんな若かった 欲出した小さな嘘が大ごとに 節約が美徳であったあの頃は あの頃は愁いは青く道遠く

まさお

トミア

貴代子

もどらない記憶の中の青リンゴ あの頃は弾んでいたね影法師 倖せはあなたのいた頃アルバムに 盆も過ぎ祈る姿で蝉転ぶ われながらきょうは優しい妻である 武庫坊 いわゑ

W杯未来を期待して終わる 三宅 保州報 よし子

マリ子

藍染めのゆかたに遠い無言劇

ーゲンで得したように無駄を買う

四季がある日本に生まれた幸思う

タイマーにけしかけられている期待 甘い期待に酔いしびれてる茶番劇 期待したラストチャンスも流れそう

> 諷云児 礫 出囃子に期待の星が武者震い 期待せず飽きられもせず茶粥炊く つまずいた数は期待の数だろう

凪いでいる水面を軽く見ぬように 呼び水へ一気に蕾笑い出す 渇水も洪水もあり夏の陣 子を支え夫支えて水浸し あの夏の焦土を偲ぶ堀の水 八間に触れると水が濁り出す

異常気象地球の脈が乱れ出す 振り乱す髪の先から夜叉になる 乱脈の経理見破るマルサの目 遅刻するだけで信用乱してる 飽食のカラスが乱すゴミ袋

男には乱したくなる髪である

ね

佳句地十選 (10月号から)

澄

ゆかた着ると金魚すくいがしたくなる たばこ買うぐらいに車走らせる 祖母の余暇 集印帖の埋まる旅 七福神のこぼれ話を手に受ける 十八の頃の気持で立つ港 雷の音も流れてくる受話器 ハイレベルついて行くのも息が切れ 一寸だけ覗くつもりがのめり込む 昭 扶美代 由多香 ひさ乃 美代子

115

美しく老いてもしもの文を書く 歌う声もしも出たならアベマリア 非常袋のもしもに期限切れも有る もしも明日晴れるならばの予定表 救急車今日ももしもが呼んでいる ペイオフのもしもと腹に巻いている もしもの事思い名義はみな私 もしもと思いそっとのぞいたコンパクト 乱気流避けて正座は崩せない 標準語で返事をされる妻の乱 登美代 かず子 1 正

#### グラス手に旅の思い出生き延びる おしゃれして旅行の度に若がえる いそいそと旅に出ました夫婦鳥

思い出は亡妻と旅した伊豆下田 据膳へ主婦の座はなれ旅の宿 幸せな余生と思う夫婦旅 いまいちど日本情緒へ古都の旅 旅心誘い出すよな秋の風 目標は温泉旅行する貯金 旅の宿富士山ながめワンダフル マイペース憩いもとめて一人旅

子

もしもの時の自給自足に取り掛かる

美枝子

東大阪市川柳同好会

猪太郎

通販でひげそりを買う十五歳 屈辱をバネに明日へ花咲かす 歳でんな体のバネが効きまへん 凛として女を生きるバネーつ 八生のクイズ少年分かりかけ **PIC** 

介錯の太刀研ぎ上げてある情け 姑の情けがわかる蚊帳の外 群衆の中で埋没する情け 病人の弱気を叱っている情け 他人ごとには無関心だが顔は出す 猫の目の前をゆっくりねずみゆく 無関心が隣人愛に欠けている

シマ子

的

少年と戦を語る元兵士

奥の奥仰山金のいる八卦 拘置所の少年Aにある軌跡 少年よ円周率は三じゃない

食って寝て巡回介護待つ身分 風鈴の鳴る音も止まり暑さ増す つまみ食いなどはしませんダイエット

いさむ

瞳の奥に昔のままの里がある 密やかな中傷奥に火を孕む

小西 雄々報

鈴弘 公美枝 枝

代

都会の灯虚飾に泳ぐ雑魚の旅

#### 柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

壮大な野望雑草生き続け 明日へと伝家の宝刀研いで置く 髪染めて女も一度咲くつもり 傘寿きた翁に税が追ってくる(介護保険) 嘘よりも真実が重い時もある 焼鳥になって雀が落ちるかも 炎天にやすらぎくれる百日紅 激辛については行けぬ食文化 あきら 放 八重子 かおり ひかり 賢

愛 美弥子

食い扶持をくれとは言わぬ肥満体

輝

夫

## 宮崎シマ子報

暑いのに何を探しているのだろ ポケットの数だけ探す乗車券 平和に住み平和を探す敗戦日 入れたとこ忘れてしまう探しもの 徘徊の老母が探す悲しい目 自分の目で探してみよう蟻の足 コンビニがあるさ困らぬプチ家出 自慢すること探したが何も無い コンビニの明りにホッとする夜道 コンビニが味方の顔をする深夜 求芽報 あずき シマ子 喜美子 欣史子 能

冷奴やたらに崩しうさ晴らす お薄一服 私に戻り帰路に着く 風向きのしょっちゅう変る人と居る 八月が来ると終戦ふりかえる 真夏の須磨駅で降りてみる若さ 武庫坊

もう二度と転ばぬつもり申し上げ あり余る何を捨てれば粗にかえる 祖母の名の一字もらって祖母に似る のれん分け元祖をしのぐ味で売れ あの世の祖母へ三文のつけまわしたい お粗末な娘と嫁にやる宝 前の日から小豆コトコトたくおはぎ 兄嫁のおはぎの味は亡母の味 弘 高 栄 的

粗茶ですが 緊張の糸ほぐれゆく

出稼ぎの父より土産待つ家族 決心をしてはいかがと茶をつがれ 病状はいかがと窓の月が訪う 送り火へいかがにおわす父や母 正面にいかがですかと特価品 手土産がいつも決まっている安堵 夫には内緒の人へ買う土産 降りる度土産が増えるバスツアー いかがかと自信の程を見せながら いかがですか病院の朝動き出す 政治家はいかがなものかと逃げ口上 通販のいかがにまたも乗せられる 決断がいかがいかがへ難しい プロポーション粗食素食で保ってる 癖ひとつひとつ受け継ぐ先祖の血 百合子

子 破産したとたんに友が離れだす リストラはチャンス自立の道を選る 破るには余りにかたい夢だった 死ぬことを恐れぬ変り者である リストラのように母校が消えていく 約束を破って夫が先に逝く 辞令という紙一枚が夢破る マンネリを打破する風の中にいる 不景気に破れかぶれの日を過ごす あえんない今でも熱い恋ができ リストラで失業世間夏休み 愛し子はリストラ知らず戯れる 退職で肌の手入れも緩みゆく

金

螢

リストラの呻き行き交う路地の裏 堪忍袋いつか破れる時がくる 人類が破滅する夢うなされる 変り者世間なんかは気にしない 久保 澤裕 正剣報 はつ江 毅

朝焼けの中をカラスは出勤し 本人も納得してる渾名つけ 辻ごとに一息入れる老いの脚 どことなく天敵めくがいい女房 天そばの中身は全部輸入品 今日生きた証しタオルの汗の量 美人の背の目ん玉四囲を睥睨 平八郎 實

> トンボの目借りて世間を広く見る なあ蜻蛉僕が何人おりますか

目標は孫と競泳できるまで カタカナを絵にしたような赤とんぽ

民節輝厚敬

哲学者ほどではないと自負してる

あえんないパートにだって意地がある

あけみ

偽ブランド心豊かに身へつける 因習を破れと誘う風に会う わたくしを作った神は変りもの あっさりと許され急に怖くなる

こ先祖に背いた私変り者

(山)

美恵子

良 瑶

幸

節くれた指にリストラ言い聞かす

川柳ふうもん吟社

リストラに夏でも寒い風が吹く ピンと来ぬ独居老人言われても 破損したうつわ名器に見えてくる

岩風呂の手引きは何時も大学生

真夏日を背広で泳ぐ戦士たち 泳ぎには自負を持っているメダカ ほうり投げてごらん泳げるようになる 犬かきでやっとここまで来た夫婦 ハローワークを馘になったらどうしよう 赤電話中でケータイ使用中

茂登子

貧乏神追い出すチャンス狙ってる あえんないまだまだ女磨きます

竹原川柳会

志げ緒

ドンと鳴る花火と父の雷と 遠き人静かに思う遠花火 遠花火こころにちさい花が咲く 日が暮れぬ線香花火待つ子供 美しい横顔だけがある花火

ぽい捨てをジロリ睨んだオニヤンマ 野仏にとんぼやさしい風になる 夕焼けに赤とんぼ飛ぶふるさとよ 愛唱歌孫に聞かせる赤とんぼ 想い出が押しよせてくる遠花火 ロナウドの頭を真似た鬼ヤンマ キラキラとダイヤの光浴びてみる 友達の夏便り来て白い雲 赤蜻蛉スイスイ飛んで秋はそこ

幼き日父の背中で見た花火 夕焼けに恋をしたのか赤とんぼ 遠花火亡母に聞こえる音で鳴れ 汎節夏房 史 子枝枝 居 子覚

はるみ

正四 郎

時広 剣

— 117 −

定

子男

パン食もよいがお米の余る国

しづ子

ネクタイを結び男の顔になる

色どりよく結んだ糸に夢たくす

何時までもロマンを胸に夢を追う

コスモスの迷路でロマン捜す蝶

時たまのパンが身につく老いの朝 パン食を淋しく眺む休耕田 家計簿の合わぬ財布を覗かれる

乾パンを齧った遠い夏の空 戦中派ご飯大好きパンおやつ 難民の飢えを聞いてるパンの耳

> かほる つや子

退職へ割引きを待って急ぐ足 子育て時食べたパン味なつかしい 墓石を洗い近況告げる今日

正 里

丸い顔して若い日の苦労見せず 塩辛あり男ひとりもよしとする

吉太郎

自己中もここまでくればお祭だ 昼と夜の狭間で男ためいきす

比ろ志

大森

孝恵報

堂々と振る舞っているあなた好き 毒のある花も愛しいとりかぶと 堂々と真正面から勝負する 捨て生えの朝顔堂々昼に咲く ブランドとイミテーションを使い分け

不信は消えずクレソンの青鮮やかに

堂々と手刀切って勝名乗り

欠席の返事真夏日の三回忌 曼珠沙華語りはしない昭和悲史 お仕置のよう炎熱の秋九月 死に絶えた屋敷の庭に咲くカンナ

武庫坊

いつからか大声出さず曼珠沙華

鳴き止まぬ蝉に別れをふと思う 月中天生臭きもの浄化する

> 評判へたがわぬ花が咲いてみせ 遠山 可住報

乾パンを分け合った日の夾竹桃 美智子 八重子

とみ子

彼岸会の経すき透る紗の僧衣

彼岸詣り墓前で亡夫に話しかけ 色褪せる地球に燦と彼岸花

夕月夜句集の上に枯葉舞う 寄席に行く落語の好きな人だった 彼岸会は親孝行の顔で行く

満寿蔵

お彼岸に家族が集う墓の前 男と女結ばれるべくして長い坂 掌を結んで開いて変りなし 点と点結んでドラマ産みおとす

半額のパン満腹にしてくれる 車庫覗く嫁のアリバイお見通し

美緒子

美紗子

割引きのわたし一人の過疎のバス 川柳塔打吹

惚れた故きれいな毒に虫ばまれ かつみ 子恵枝 子

> 堂々と裸で歩く風呂上り 愛妻のお尻つまんで叱られる 目の毒になるような本大好きよ フランド品意地でも買わぬへそ曲り

ブランドが夜店の角にぽっとある 知りながら毒がおいしい二人です 堂々の海が夕陽を呑み込んだ 美しい言葉づかいで毒をはく 堂々と無職と書ける歳になる ブランドで固めて中味伽藍堂

和歌子

よしえ

堂々と朝帰りする大旦那 毒を飲む覚悟の上の一芝居 農薬が効く頃なのに寿命延び 極上の大トロつまむ指おどる

督促状つまんで投げているんだよ 極楽で宇治の玉露をのんでいる 鼻つまみ一気に呑んだ蝮酒 さて次は誰をつまもうかと閻魔

火鋏でつまんで捨てた火の女 太陽に腹の底まで見てもらう のど飴をなめて毒舌吐いている

堂々と真中歩くのも勇気

石花菜 光 良

田辺 鹿太報

尼崎尾浜川柳会

ふところを狙う上手な口車 お上手が言えぬ武骨な亡父だった 食欲の秋を気にする皮下脂肪 2

玉江 枝美の太

年重ね思案ばかりではかどらず

完 玲

御木本真珠鼻やおへそにぶらさげる

アメリカの恐怖九月十一日 虫の声呼びに来ました秋ですよ 約束の小指の先に孫の顔 子が親をこえるうれしさ淋しさも 門限を越えて鬼顔ママの顔 支えつつ夫婦で越える人生路 前回のタイムを越えたうれしい 赤道を今越えましたハネムーン 口先で上手は言わぬ夫婦なか 深む秋新本の帯見のがせぬ 線を越えてしまって堰が切れ H

> イサミ 亀与子

3

カズ子 よし子

懐の深さも時に落し穴

母さんの心はきっと海だろう

子を殺す親よつばめに学ぶべし なんは愛尽くして足りぬ親子愛

自力本願他人の事は気にしない

香生蘭久子

自分では軽い嘘だと思ってる 萩咲いて名残を惜しむ綿の雲 吉か凶首相が越える日本海 **肩組めば学園祭の風が越す** 有難い法話上手に舟をこぎ そくりは睨んだとおり額の裏

> 満寿蔵 十四郎

分からない女心のしたたかさ

治

JII

ほたる川柳同好会 田辺正三郎報

ほどのよい深さは情けだと思う 原潜の寄港は蹴ってほしいもの 深い訳知らない人がよくしゃべる 席蹴れば留め役来ると思ったに 単純に生きて深入りなどはせず コンビニの都会の夜によくなじみ 転勤を蹴った辞令の蚊帳の外 遠花火消え元の闇より深くなる 蹴る妙技超一流に育つまで 蹴ることも叶わぬ椅子を守る日日 ヤギエ 吉太郎 昭 子 骨 童

> バラ色のサングラスかけ待って見る 切れた子の誰にも言えぬ深い理由 席蹴って井の中蛙旅に出る 深々とお詫びの裏で儲けてる 結末を知っているから蹴る話 高僧の説話深くて眠いもの コンビニのように手軽な亭王です 一蹴りが世界を熱く燃やす人

高木

募金箱一円玉にある心 なんぽでも夢は広がるニキビ顔 忘れまいわだつみの声夏の雲 カクテルにのぞかれている下心 安心は母の手の中子守唄 トンネルを抜ける自力を信じよう

諷云児

トマト熟れ心満たしてくれた朝 知るほどに夢がふくらむ旅日記 物知りはジャンボな耳と好奇心 千羽鶴胸の思いに嘘はなし 衣食住足りて心の病増え プロポーズ決心させた付いてこい 手話知って優しい人になりました 言わずとも心が通う花一輪 知らなけりゃ済んだ話に踊らされ

なんぼでも金使うがな好きやねん カビはえた野心いまだに持っている

> まつお花 美 花

> > やせ薬地獄の苦しみするなんて

満天の星を味方にするテント

産んでくれたのが鬼だった虐待死

理に適う蒲鉾形にしてテント

久信

兎 子男

よしろう

正三郎

自力では良い女になれないの

行詩の心は盗めない他人

隆直喜芳弥春章楽

無意識の所作の中にぞ我を知る

たこ焼きにナニワの心また来てね

楽

巳

金 人道太月 移り気は紫陽花だけが誰かさん 王将を残して英雄不帰の旅 心にも無い事いうた腹の虫 三歳の我が家の孫はフーリガン

重青 功

す鉄川一和柳洛が 心童歩子弘酔 比呂志

柳弘報

ひろゑ

本蔭棒

信

男一匹生きるロマンよ青テント 献血の善意ひろげて待つテント ルンルンと飛んで毎日気が若い 人の道飛んでふまえて味が出る 究極は一人だなあと午後のお茶 釜茹でに遭った所で目が覚めた 深海のシャトーのような青テント

半額の値札待ってる午後六時 飛び込めば終るレールが二本ある 登頂の歓喜テントの回し飲み 飛び跳ねた頃もあったと膝を抱く むつみ 秋 美和子 ふりこ 泉

恵美子 子

登美子

-119

子子

午後からのノルマへ焦る棒グラフ 白の修羅百の地獄を見た女 父の樹の高さ飛べない竹とんぼ 地獄見た男あれからよく笑う 魂を売って来た日の地獄責め 親と子の絆深めたキャンプの火 頂上を目指すテントは早寝する めらめらと嫉妬の炎生き地獄 どん底の地獄で友の手がぬくい 糸切れた凧が未来へ飛びたがる 灼けついた街が死んでる白い午後 チリンとも鳴らぬ猛暑の午後 飛び込んで来いと言われた厚い 人生の午後よまだまだ孫の守り 八月の空をめくれば地獄絵図 ダン吉 風

> 占いの梯子している悩む恋 良縁が二つ易者も迷ってる 手のひらで易者がくれた幸せ度 悩みごと解く糸口を探る易 夫の嘘飾り気なくてまた信じ 飾らずにひとこと好きと言うてほ シンプルな言葉の中にある誠意 シンプルな願いは神に届きそう シンプルな笛の音古都の宿に聞 句読点の下に隠れているドラマ

易学と正反対に出たみくじ

海原にうかぶ小島に母が住む 海鳴りと違う音もつ老いの耳 ひとり居も退屈はせぬ花がある のんびりとこの退屈を楽しまん 退屈な午後です花を買うてくる 弘

脳役にまわると広くなる視界

尾市民川柳会

宮崎シマ子報

脳役で終わる男の目ではない

ダン吉 頂留子

脳役が半分ずつの 共稼ぎ

北の海眺めつづけた拉致家族 宵待草だあれもいない秋の海 夏の浜思えばしずか秋の海 海の家跡形もなく秋の浜 本道山のつづきに海がある

きよみ

政岡日枝子報

コンビニとケイタイ命若い群

あずき 欣史子

明日があるさ歌い度胸の窓を開け 足枷になってはならぬお賽銭 回廊は百合の花の香ひとり占め 初

枝

ひょっこりと帰省両親よろこばす ひょっこりと地雷を踏んだ足がない ひょっこりの客に慌てる台所

弥桜欣

柳宏子

淋しさを隠す笑顔が歪んでる 名陶は隠せぬ傷の数をもつ 姦しい朝ですカラス殺そうか 母は愛零しうるさいのが取り得 うるさ型らしい眉毛がそり返り 見つかったことがうれしいかくれんぽ 身の程を知る脇役にいる安堵 脇役にまわった美人目立ち過ぎ 忠義者秘書が主人の罪かぶる

> ますみ シマ子 ひさ乃 結び目を解くとむかしが転げだす 噴水が煌めく待ちびとを忘れ

とみを

息つめて鱗いっきにとりのぞく どなたにもいらっしゃいませ自動ドア

てい子 な

\$

宮崎シマ子報 シマ子 洋

扶美代 加津子 直

> 煌めいた日々をほっこり抱いている クーラーをつけた切ったと眠れない 健康が宝で分けるものはない 停電日日頃の恩が身に沁みる 蹴鞠のルール知らぬ私も燃えました 引きこもり疑心の轍深くする 天皇皇后プラハの夏を楽しまれ 命綱縒りかけながら生きている 近道に危険の札を立てておく 生におそらく二度とない祭 本の絆に迷う鬼瓦 日枝子 富美子

子

家出して二十日ひょっこり猫帰る ひょっこりと無沙汰の友と鉢合わせ ひょっこりと孫の宿題解けました ひょっこりと来られて困る夏の客 打ち水で嬉しい客を待っている 古傷を水に流してやり直 方円の水が逆らう暴れ 水を買う暮らしに慣れてきた怖さ

地蔵盆ひょっこり出会う幼友 喜久子 たけし

120

徳山みつこ報 柳宏子

はびきの市民川柳会

書いて消し書いても出せぬ片思い すばらしい人生だったと消えたいな 華やかさ消えてしっとり生きる老い お財布が消えたと騒ぐまだらボケ 悲しみもようやく消えた三回忌 込み入った話になると居なくなり 肩書きが消えて気楽に物が言え 消しゴムがあれば消したい過去がある 核ゼロへ掃除を託すペンを持つ 丹念に掃除をしてる仕舞い風呂 ストレスを吸った掃除機重くなる 開発へ秘境が一つずつ消える 戦火まだ消えず地球のうめき声 流星の如くに消えた無二の友 老い二人隣も同じ明かり消ゆ 掃除機の中から漏れる妻のグチ 酷暑中掃除しばらく休みです 哲子報 扶美代 りつえ さとみ かつみ 久仁子 満寿蔵 ダン吉 みつこ 志 獏 敏

肩書の元を外したうまい洒 愛らしい目元口元愛子さま 倦怠期元はまっ赤な薔薇でした 立ち止まるゆとりをくれた交差点 夫との未来図立体交差する 交差した儘で男が消えて秋 頑固さがとれて平行線が交差する 逆風に向かって行けと交差点 ほどほどに朱に交って生きている

OBになっても生きていた序列 糠漬を毎日まぜる母元気

十三工

弘

タマちゃんが人気をさらう夏休み 飛行雲ながなが北へ向く慕情 ながながと口説かれ後は京茶漬け 盆提灯揺れてご詠歌ながながと

歯が抜けて明るい顔になりました 柳塔鹿野みか月

ほっかりと雲よわたしも旅に出る

そこまでは言うなと友の言包む

春江

首のあるおかげで名札かけられぬ 名札一枚ずつ親族を連らねている 賑やかな女だ眼までよく動く まだ六十惚れたはれたで賑やかい 賑やかをささえる役の方が好き 賑やかに幸せそうな嘘をつく 賑やかに地区対抗のテープ切る

リストラの背中見つめる昼の月

月にさらす男心のセレナーデ ちょっと欠けすこし横むく月がいい

比ろ志

義

帰郷した実感が増す月の彩 月明り黙ったままで分り合う そう言えばこの頃月に会ってない

富喜子

西宮北口川柳会

亀岡

編み笠に月が寄り添う風の盆

手を振って別れたままの交差点 幸せが降ってきそうな丸い月 借景の庭に静かな月が差す

> 交差するまでのあなたはまだ他人 諷云児 嘉代子 たず子 松澄鹿 子太子

野正霸坊 満寿蔵

しげお いわゑ 子重子 川柳塔みちのく

じっとしていてもまわっている地球 じっとしておれぬ貧乏性だから じっと待つ一分間の長いこと 情念をじっと抱いてる 花暦 いかにも静かじっと呼吸を整える

交差点待ち草臥れる赤信号

鍵穴を覗くとガードマンが来る 鍵みたいな男がそばに来て座る どこよりも大きな鍵の兎小屋 ややこしい鍵は持たないことにする 鍵かけておいたおふくろ様の唇

> みどり みさ子

かつ乃

立

午後になればだんだん頭冴えてくる 午前より午後は仕事がよくできる 気がつけば午後のテレビにはまっとる 病みあがりやっぱり力尽きる午後 あてにした午後の夕立まただます 留守番の午後は缶ビールと午睡 謎をとく鍵はわたしの北にある 汲 くに子 富久江 はるお

人生の午後は大声ひかえてる 宣 かおる

亡中閑 午後は川柳人になる 昼さがり蝶も私も安らかだ 地球儀の向こうはきっと午後だろう いのち午後から真剣を抜いている 父になる午後の満潮信じよう

孔美子

小寺

和八

節

子

竹しなり雪の重さに堪えている 台風一過それも束の間孫台風 しなやかに根曲竹は耐えている 孫台風妻のストレス蝶となる 妙

喜与志 きみ子

ヒサ子 きよし

121

日曜も安息もない逃亡記 日曜日人間くさい貌になる 日曜日寝そべる夫が鼻につく 台風にいのち儚いものばかり 台風の目になりそうな美女が来る 台風となってやんちゃな孫が来る 猫とわたし天地静かな日曜日 しなやかに鍵盤たたくピアニスト 日曜日今日は何して過ごそうか 台風一過お日さまはしらんぷり しなやかに脱皮を終えた赤トンボ 台風が逸れて安堵の発泡酒 台風一過落ちたりんごの泣き笑い 千加子 ふさゑ 女匠

夕涼み人さまざま浴衣着て 鼻息を受話器で聞いて満足し 重ね着の肌しとしとと梅雨半ば 老々介護後姿が泣いている 秋暑し背すじを汗の流れおり 温かい人の心にふれた朝 生かされて喜びいっぱい盆供養 豊作がつづきうれしい悲鳴です バリアフリーそろそろ歩く手摺棒 一人目の男のひ孫と産み上毛 人居て明日があるから急がない

#### 川久保睦子報

台風の目からきれいな星が見え

かわはら川柳会

俊路報

子

五楽庵

私には甘いドラマに縁がない 子等みなに心配かけて長寿なり 芽の出ないパチンコ台に意地を張り 鍵穴の中でドラマが生きかくれ 主婦病むと家の歯車みな狂い 宝石に埋まる暮らし雲の上 登美子 ただし 政 枝 子

がまんした私誉めたい空仰ぐ 遺されて背負った義理の荷が重 四天王寺の亀に長寿の秘訣聞く ツーカーと答すぐ出ぬもどかしさ メイキャップギャルが気ままにする車中 日々好日こんな幸せ怖くなる 苦労性無事終わるまで肩が凝る あい子 トヨ子

鈴虫だうっとり夜の台所 豊作で案山子ゲストで祝膳 嫁ぐ娘の荷を積む夫の玉の汗 孫が来て積み木に夢中時刻がすぎ 国宝の積み上げた技息を呑む Ⅲまわし夢を積み上げ演技賞

丸い背は母の苦労の積み重ね

毛利

定

子 子

生傷は元気印の勲章だ 活発な子で未知数に挑んでる 活発な人は静かな人を友にする 活発なあの子がドナー探してる 活発な質問サクラかも知れぬ 家の中嫁姑いて凛とする 孫がいて家らしくなる星祭り ちっちゃな家だけどスキップはずませる

生

寝転べば粗大ゴミだと掃き出され

木造りの家に安心して眠る

そろそろと素敵なあなたロマンスグレー ふさえ まさ子 信 寿 夫 近道を探し寄り道回り道 少し美人少し不敵な妻がいる

情風

人立ちそろそろ嫁に行こうかな

母の膝涙を置きに行くところ 幸せに生きているから愚痴が出る お遍路の鈴はドラマの捨てどころ 身勝手な話やんわり母の釘 何もかも許してのみ込む母の湖 ふるさとを捨てふるさとの風を恋い

ます美

美喜子

江口

活発な胃は夏痩せを寄せつけず モラルのない街を何処まで行けばよい 百の風百のモラルを読んでいる 孫達に煙たがられているモラル ロボットはモラルきちんと守りそう モラル地に堕ちた親子の保険金 あやめ

勇太朗

換気扇粗食二人によく汚れ 長電話すっかり用件忘れさせ リストラの死角にいると信じてた 高ぶりをしずめ灰皿引きよせる 終の棲家となるやもの家見に行く日 かくしごと一つもなくてEメール 爽やかな若者ばかりボランティア 師の芸を勝手に盗む舞台裏 とし子 公 ひさ乃 しげお あやめ

たもつ

122

朝のお茶心を洗う記事探す 顔洗う今日も確かに生きている 農作業秋の気配に急かされる 励ましのことば重たいときがある 先祖を訪ね私に戻っている墓前 カロリーがどうあれうまい物たべる 栄養よりさっぱりがよい夏の膳 残りものだけで栄養足りてます 栄養の話はしない夢二の絵 粗食でも栄養豊富母の味 手術するお腹ゆっくり洗ってる 洗濯が好きでしょっちゅう脱がされる 議事堂を洗えば誰も居なくなる 立秋の三十二度に昼寝する 自分史の余白を少し残しとく 大声でどなられるのも栄養素 **力馬券夢見て足が洗えない** とし子 弘 ルイ子 かすみ 波留吉 冬 佳

池

同郷の好と交わす縄のれん バスに乗る前に小銭を確かめる

佑

身の内に可愛い鬼を飼っている 点滴の遅いしずくに生かされる

線香花火の終りを告げにくる

あかり 慧 雪

男と女夏の鏡に裁かれる

かき氷わっと泣きたい時たべる

四世代集いて興じ花火の夜 秒針がしずかに命刻む音

アドリブで尖った空気丸くする

アドリブで全て間に合う老いの日日 ドカンと一発妻に花火のプレゼント 千年を刻んで古都の新しき 鳩尾に刻み込んでる風の紋 夕日にも未練が長くながく伸び 治を座して乱を睨んでいる器 今のうち小さく切っておく嫉妬 花火果て普段の闇に戻される 臥たきりの母へ手を貸す遠花火 曲者を刻む赤青黄のレシピ 三途の川渡る練習しています 一つ覚え三つ忘れて今日も暮れ 本の木を刻んだら阿弥陀仏

わが歴史鏡の裏に刻み込む 裏切りのわたしを刻むさめた音 句読点どこに打とうか余生の詩 空蝉の風よりかるく吹かれたし

郎

年輪を刻んで丸くなる噺 真っ直ぐに上げる一度だけの花火 アドリブの海で吹雪いている命 アドリブに乗せてスパッと世相斬る ご予算に二度びっくりの大仕掛け 年浩 人子 惠 冬 誠

楓楽報

サークル檸檬

邪魔者の雲を生かして夕日映え 神話にも誰が付けたか色がある 男より女が強いのは神話 神話読む楽しみワイン飲みながら やがて神話の川へ帰ってゆく蛍 みつ子 希久子

> 胸の火はまだ炎えている歩まねば テロ爆破以来神話もくずれ出し ふる里は恋の神話で村おこし

ひろこ かなこ

初太郎

風

親と子の違う溜め息 新学期 山小屋にギリシャ神話が降ってくる 自信回復軽いタッチで歯を磨く いろいろとあって相寄る友の通夜 万事休す妻に読まれたEメー 知恵くらべ八咫の烏の末裔と タイムマシン神話の国へちょっと旅 石鹸の残り時間が怖くなる たもつ代 あずき

智恵子

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報 亮 幹 扶美代 アキ 紅紫朗 奈保美

蘭之

名吟が刻まれ石が生きてくる

夫 虹 勇 物言わぬ墓石だけど頼り切る 別居して指輪はめたりはずしたり 輪の中で持ちつ持たれつ生きている あの夫婦 輪ゴムで止めてあっただけ ステッキの父が元気な写真帳 ねじ曲げた輪からアイディアが生まれ ステッキを捨てて介護の手に縋る 暇すぎて雑談の輪にいつもいる

思春期の出合い拾った文化祭 無人駅白いステッキ捨てたまま 君に会うおしゃれの杖を持って出る 手術して杖の重さを感じとる 三回忌 父のステッキ掌に馴染む ステッキで星座を示す里の夏 何所へでも気負わず歩く母の杖

ことぶき つえ子

実

-123

柳宏子

これもかな赤信号の輸入品 残やかな一日でした美術館 セスナ乗りグランドキャニオン俯瞰する 風鈴が似合うおんなの黄八丈 和を保つ付かず離れぬお付合い スキャンダル拾い読みした週刊誌 クーラーに負けた風鈴ふて寝する 拾うた子猫 可愛い鈴を付けてやる 悪知恵を風が拾うて行きました つきあいはきっちりとする紙コップ 直訳意訳希望訳 千里志 満寿巳 しげお

**南大阪川柳会** 悥 寿美報

改札で頭下げてる無料パス 校長と摩擦教頭あきらめる 赴任地の夫の部屋がきれい過ぎ 太陽がぷんぷん匂う夏野菜 信管を抜いて摩擦をさけている 人形にもノラにもなれず菜を刻む

見なければよかった彼の女癖 婚約の彼女の部屋はフリーパス いつの日か夢咲かせたい種をまく 地獄前パスして弥陀の膝もとに 白菜でキムチソールの母の味 メロドラマに似た待望へ降る時雨 履歴書のところどころにある摩擦 甘えてくる夫に猫は爪を立て やきもちを妬かない妻が怖くなる なぎさ たもつ ひさ乃

的

文

久

糠床へ詰めた菜っ葉に亡母の味

待望の雨にひといきつくダム湖 この暑さ冷菜添えて食進む 待望の部長になって社がつぶれ 菜の花とおぼろ月夜は風物詩 女系家族待ったかいあり鯉のぼり 無愛想パス吸いこんだ改札機 待望の初孫要らぬとこも似る 原因は摩擦で起こる静電気 ライバルの目が突き刺さる回り椅子 旅に出し息子大きくなって来た

母ちゃんの声まで変わった試験パス 菜の花が源平のロマン語り出し 菜ばかり並び週一休肝日 川柳塔まつえ吟社 津川 紫晃報

久

別姓へ摩擦を避ける共稼ぎ

日出子

ダン吉

シマ子

志華子

そよ風に会ってスパイス欲しくなる 雑学が積木崩しの風に逢う 温い風往き交う町にすんでいる 笑えそうな風だ無花果まで笑う 深呼吸緑の木々を抜けた風 安幸 子

多賀子

きみ子

憲太郎

風は秋足引き止める虫の声 高さで負ける重さで勝っている 迷ったら一番高い樹に登る 尊んだ個性に高いつけがくる 高い樹に大きな笑い吊っておく アンテナを高くしてみる秋の空 風少し下さい酸欠のわたし 水嵩が高くて君を渡せない きみえ ちかし 主詩朗

伸

まだ足も口も達者で燗のほど 地団太を踏んだとこから出直そう 幸せを願う百度の母の足 すぐ来ます足止めされた待ち時間 いいひとと言われ手になり足になり

初太郎

しゃべるだけしゃべって気づく人違い 慌てると自分の席がもう見えぬ 慌てない明日のことは明日決める 慌てると何故か失敗ばかりする 慌てまい二本の足で立っている 慌てはしないカマキリの鎌の先 下車近し切符探しに慌ててる

噛み合わぬ会話で気付く人違い どこにでもある顔だった人違い パソコンは人違いなどしてくれぬ 人違いしてお若いとほめられる

歩かせて立ちどまらせて人違い

川柳さんだ

まだまだのつもりでズボン二本買う まだ消えぬ背に感じる震度七 誕生日飲むなと言った子から酒 目の前が崖っぷちでも夢を見る 缶ビール陽の目も見れず腹の中 ゴミ出し場ムードはないが喋る場所 IE 月朗子昭 行

さりげなくもらった土産が高くつき 口達者その分腰がやや重い 定番の手土産持って重い足 通販のカタログ妻の愛読書

注 紅 枝

124

たけし

黒猫が道草食って荷が遅れ 郵便のバイク遠近法で来る お返しはいらぬと義姉の宅急便 配達を終えて一服夏木立 救急車達者自慢を乗せてゆき ちあき 千代子 代 子

高田美代子報

しなやかに音符が踊る童唄 しなやかな指で恋文書いている しなやかに床の間にある生けっぷり しなやかにうねる夕日の沈む海 しなやかがなんだかんだとごねてくる しなやかな手付きでそっと王手飛車 マジシャンの指しなやかに鳩が飛ぶ 瑠美子 終

不登校なんて勿体ないことを 石谷美恵子報 美代子

肝冷やす内緒話を子が喋り リストラの予告なんにも手が打てぬ 目覚めると耳のコーロギ聞く日課 飛びつけぬ蛙浮かばぬ水すまし スランプを救ってくれた愛燦燦 隙のない男貧乏ゆすりする 予告のないお客の当てにスルメ焼く

水光ぬ子

あるものがあるので怖いものはな 道草はいつか力にきっとなる 力いる時だけ声が掛かります ここ一番電池切れした底力 パソコンに慣れて貧しい記憶力 朝の散歩犬の力で歩いてる 金と力ないけど僕はまじめです

> 婦美枝 喜代子

一つ三つ若返らせた格子縞

悦鐘

知

桂

子

肉よりも魚が好きなお爺さん 真剣が過ぎると喜劇めいてくる 出直して来いよ頭を冷やしてな 冷えきって修復きかぬ自在鉤 鏡よ鏡毎日暗示かけてます ロゼワイン今日の日課を締めくくる 家事育児主婦の日課は手が抜けぬ 正眼の構えに隙が見当らぬ 隙のないひとでだんだんいやになる 冷やしても治りはしない僕の欲 赤は駄目冷えた私が目を覚す 野節 圭 一 郎 夫 よしえ かつみ 睦

扶美代

ヨシ枝

愛と憎縞の形でからみだす 縞シマの虎と浮いたり沈んだり たて縞が好きでファンをやめられず たて縞を眉間に刻む苦労性

横縞はゼッタイ着ないお母さん

みつこ

ビルが建つ予告が読めぬ鬼瓦 事故死にも癌にも予告編はない 抱かれても雪のお山が呼んでいる 許す気になるとなんでもない隙間 冷やさねば頭が割れてしまいそう さそり座の女で隙は見せません 日課のように逢う人がいる散歩道 カンバスの隙間に夢を埋めておく 夢を見る日課つくって癒される スランプは神に貰った句読点 きみ子 希久代 石花菜

粋

歌

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

とは言えど覗いて見たい壷の中 こだわりを水に流して仲直り 秋冷えに留針はずれている疲れ たかが水ただであるよなないような インテリのつまずくさまを見ておこう 老妻の引出し未だ覗かれぬ 止り木でまず一杯の水の味 価値観の違いそれぞれにある思い 湧き水は末路も知らずひたすらに かつ子 はるみ ちよえ

#### 柳高 知

川竹

松風報

あばかれた古墳よ今日も風が哭く

難聴が内緒話に耳を立て 補聴器に内緒話は入らない 三ヶ月もう内緒ではすまされず 病名は内緒笑顔で看てやろう ブランドで飾る内緒は火の車

参観日母親同士のしなやかさ しなやかな女形も走る舞台裏 女ひとり竹の撓りを地で生きる 君にだけしっぽを振ろうしなやかに 妻の希望で派手目の縞を着ています とら猫の縞を数える暇つぶし しま柄に産まれ子猫の名はトラに うっとりと今日を着こなす縞模様

しなやかに踊る背中は玉の汗

スランプの底でまさぐる蜘蛛の糸

功 風

-125

アセチレン風鈴が鳴る夏まつり 風鈴をねだる浴衣の可愛い子 打ち水に風鈴妻の消夏法 風鈴の下で流れる汗を拭き 風鈴の前で薮蚊が平泳ぎ 風鈴の音に心が癒される 風鈴の音が惰眠を深くする 尾鰭つけ内緒話が泳ぎだす

風鈴が時代の風に捨てられる 風鈴屋涼しい夏を売りにくる 風鈴の音がストレスなぐさめる

竹信 照彦報

生

K

長々と梨の皮むく呆け防止 梨可愛い今日はお前を嫁に出す 鷲峰の下で川柳夢フェスタ 見て見て見て聞いて聞いての三歳児 大小と見た目じゃないよ梨の味 大山と鷲峰山がケンカする 喜美子 節

忠

お隣の消毒梨が被害受け 足首のほくろが痒い明日は雨 インドから曳っぱってきた鷲峰山 ホクロの位置で話が盛り上がる おめでとう梨さん御無事天の声 歳食ってほくろ大きくなっただけ モナリザが僕を見つめて動かない ソバカスもほくろもあざも個性だよ 鷲峰山あなた年はなんぼです かつみ 石花菜 和歌子 十三男 賀寿恵 きみ子

兀気かと見に来てくれる友がいる

ゆり子

胃袋がキュキュッとちぢむ救急車 居留守した家も顔だす救急車 救急車に乗って気がつく身のまわり

ライバルの位置が上座に近くなり

貯金通帳見ると涼しくなってくる 線香の移り香のする梨を剥く 心臓もほくろにも毛が生えて来た

僕の顔ほくろに髭で目立ち過ぎ

投げ売りの皿にほくろがついている 梅を見るこめかみあたりから唾液 お帰りと翼広げた鷲峰山

てるみ 江

鷲峰をキリマンジャロと思い込み 道のゴミ人は見えないものらしい 見るからにいじの悪そなつらをする あなたしか知らぬ所に有るホクロ 愛嬌のほくろ一段人気呼ぶ 後継ぎが見ている梨の百年樹

光子子郎

柳塔おおとり 原 みさを報

鷲峰の山は動かず世が動く

国自慢方言が出て盛り上がる 青春をお国に捧げ老い最中 わだかまり国境線を太くする 国連が地球を丸くおさめたい 静かなる国でおいしい水を飲む 命まで国に捧げて負けいくさ あわてるとお国訛が出てしまう 熱いので寒い国へと旅に発つ アメリカの愛国心について行く 四季のある国で素敵に歳をとる 由多香 風美 幸次郎

涯

救急車秋晴れの中遠くより 境目の命を運ぶ救急車 人生の秋まあまあの暮しなり **人影が消えた浜から秋になる** 

弘

待っていた秋本番の夢フェスタ ほっとする時コーヒーがそばにある 日々せわし芒がゆれて秋を知る コーヒーがお酒に化ける奥座敷 コーヒーのにがさを知った恋になり コーヒーが好きコーヒー色羽織る せつ子 艷 富貴子 宏

睦 玲玲 日出子 司

子

あの人とコーヒー飲んだ日遠くなり コーヒーカップ民芸調のひとりごと 二日酔い苦いコーヒー飲んで活 ブラックで今日のアンテナ張り直す ストレスを撹きまぜているティータイム コーヒーが冷めても話切り出せぬ みさを

川柳クラブわたの花 嚞 風報

長病みの祖母を迎えてクリスマス しんみりと話せば心開けてくれ ライバルに負けたが贈る大拍手 隠さなあかん歳はまだまだとってない クラス会横目で指輪比較する お静かにうるさくすると殺される 脇役を演じて実はボスの顔 脇役がやっとつかんだトップの座 力作もはかなく消える本ばなれ 還暦を越えてはじめるコンピューター (増)道 (馬) ミツ子 民 子

美子光生

隠したと大騒ぎした置き忘れ シンプルな食事したくて別世界 鳴く蝉のはかない命思いやる 喜寿になりプライド胸に秘めておく 脇役のうまさが主役引きたてる 終電の酒の匂いのない不況 幸せに雷のよな大いびき トンボ釣りも蝉とりも見ぬ夏休み 深い仲隠し通してゴールイン 相手の身になれば無茶でもない話 そのウソに気付かぬふりをする平和 我が家族表札いらぬ同じ顔 いい湯だな七福神の顔が浮く 星空を見つめて浮かぶ母の顔 全快し温泉も良し湧く涙 かっこ好くシンプルな服着ています 七五三シンプル横目で超豪華 (赤) 体たえこ 妙 知佐子 美代子 いつふみ トシエ ますみ 友 奈良司 俊晴 まさと 道

Ш 柳 河内 月子報

御気分は如何ですかと聞いてくれ

気分よく今日の余韻を持ち帰る にせ物ももの言いたげにのみの市

私かてむかしゃ美人でようもてた 人情にもたれて生きる野のすみれ 惠 忠和俶 三勇敬香 肩の荷が下りて夫婦の息乱れ 乱れ咲く萩のひと枝欲しい月 女湯を平気で覗く窓の月

励ましの言葉が気分重くさせ 諦めの気分で夫婦仲直り 菜園のサラダへハムが畏まる

> 呱呱の声聞いて口笛吹く無口 うちの子はトマト胡瓜の旬知らぬ 最高だホールインワン決めた時 お喋りがはずんでいます気分上々 似たような者が集まり飲んでいる お野菜を食べると妻が上機嫌 匂わない松茸よりもしめじ買う 秋茄子を嫁と仲よく食べてます いい方にとって気分を落ち付かせ にごりえと戻る紙幣に望まれて 偽者が猛スピードで伸びてくる 介護人居るときゃお婆しおらし 土女様の気分にさせる美容室 赤は嫌ピンクが好きなお婆です 掃除機で吸い込むほどの軽いうつ 一坪に花と同居の野菜達

> > 日の出

梓

手作りの野菜で話盛り上がる 賑わいが戻るだろうか呑み屋街 もうママの気分でもらう母子手帳 人間のものさしだから伸び縮み 一世帯で持ちつ持たれつのびやかに

八千代

虹

つづや

逢いたくて乱れる心文字にする 加島 由一報

平気ではおれぬ同志また欠ける 三和子 和 IE

費

夕立に慌てて走る千鳥足 男カメラに日々の乱れチェックされ 遊び好き平気な顔で午前様 乱筆を詫びて見事な筆のあと 夕立を浴びて飲んでる生ビー ガン告知平気な顔で聞き流す ル

扶美代 みつこ りつえ

少子化の風に逆らう鯉のぼり

一十年猛者を通した呑みっぷり

振り袖を着ると乱れる長い脚 夕立が迷う心を決めてくれ 馴らされて平気になって行く怖さ 平気ですあなたと苦労する覚悟 秋晴れに祭り太鼓の乱れ打ち

飛び込んでおいで平気さ僕の胸

さくら

文

式場も決り乱れる父の酒 乱れ籠宿の浴衣にある愁思

さだを

夕立が虹のおみやげ置いてゆく これからも平気を通すかたつむり けい子 子 たけし 正 IE 和 潤武 \$ 慧 子 男 治 美

野 Щ 合 祀 法 要

於高野山霊園

集合場所 日 時 南海電車「なんば駅 十一月九日(土) 二階中央改札前 雨天決行

かりん

九時五十分発「高野号」乗車 九時十分集合

参拝ご希望の方は、十月末までに 本社事務所宛申し込んで下さい。 五千円(交通費・昼食込み)

#### **柳**界

月30日締切られ、次の2氏 ★第1回寺尾俊平賞は、 そのうちに人間に貼るバ ーコード 6

の本社関係者天位句は次の 加を得て開催された。当日 祉センターで、180名の参 は、9月1日浜田市総合福 文芸フェスタ2002年 ★島根県川柳大会 (しまね 三宅保州 木本朱夏(和歌山 が優秀賞を獲得。 ってくる す 冥界の母来て白い花降ら 無人駅不意に降りたくな ▽表 (海南市 彰△ ほか4句 ほか4句

関係者秀句は次のとおり。 化会館で167名の参加を得 て開催された。当日の本社 大会は、9月15日堺市栂文 ★第16回堺市民芸術祭川柳 になる 吉岡きみえ 名誉主幹·黒川紫香·西田 を表彰する。なお、活動支 平成14年度の文化活動への 援への感謝状は、橘高薫風 坂上高栄・岸野あやめさん 貢献者として、太田とし子・

ドア開けて笑いの中へも

とおり。

ゆっくりと庭の隅から秋

セツ子さんが佳作を獲得し ★第7回鶴彬川柳で、出口 さんの笑顔 どんな立場にたっても母 ぐりこむ 大谷 門谷たず子 篤子 前たもつ氏 園10月1日発行67号) 日 表彰式は11月3日(文化の ★『川柳春秋』(NHK学 (副理事長·大

市 してエッセイを発表。 根日々新聞に「黄昏」 出雲市)は、9月25日の島 川柳を」と題して執筆。 欄に「深くて味わいのある ★園山多賀子さん(同人・ 阪市)がわたしの川柳作法 」と題

判 · 46頁) ■NALC「天の川クラブ」 50回記念として、合同句集 「天の川」(1)を発刊(B6 前たもつ講師) ▽出 では、第

柳宏子相談役に贈られる。 ■寝屋川市文化連盟では、 て、青森県蟹田町行。 回風のまち川柳選者とし 鹿野町行。 せのため、 日の国民文化祭の事前打合 ★薫風名誉主幹は、10月26 ▽人事往来△ 10月6日、 9月5日鳥取県 第 10

守口市現代南画美術館 を得られた。 青画伯は次のとおり白寿記 念「玉青展」 ★表紙の絵を揮毫の直原玉 を開催、

月21日~10月27日) ・もり

#### 新 同 人 紹 介

手で 川かわ

・みのり

.

美津子推薦

光紫

高加 宏な 臣就

・みのり・

美津子推薦

能 薫風·天笑·春推薦 代 菜な 月書

飛去 天笑・寿美・春推薦 永なが ふ りこ

伊い 天笑・寿美・春推薦 藤さ 博は 仁也

26日~10月8日) 京阪百貨店守口店 ぐち歴史館「旧中西家住宅 9月2日~10月27日)・ 9月

訂正とお詫び▲

川柳塔碑合祀祭へ参列依頼

#### 儀は10月6日親族により営 ■小林一夫氏(同人・神戸 は、 計 10月5日死亡。葬

まれた。行年42歳。

満秋 結美→結実 P11上段23行目、 雨を行く一雨を待つ 下段29行目、応援→応援歌 10月号=P8下段13行目 P 101

について、議案書(会計報 最終確認 塔まつりについて各担当の 企画事業部 上の役員23名出席) ★特別常任理事会 活動方針等)の説明-①平成13年度同人総会 P118下段19行目 企画事業部 ②第8回川柳 (参与以 満州• 9 月 30

報告、 と中間報告―総務部 1名承認—同人部 人推薦9月分10名、 10月分

を討議 うお願いします。 塔』誌バックナンバーをご 編集部宛お知らせ下さるよ 者を、担当者はすみやかに の秀句 (天位)、各賞受賞 アウィーナ大阪20号室 ★11月5日 (火) 13時から 法)。ほか武庫坊、ダン吉、 ンスについて、経費削減方 誌友拡大のための 各地の記念大会での同人 歩氏などからの提案事項 ▽常任理事会△ 各地句会実態調査中間 (同人・誌友数のバラ 正坊氏の文書提案を ⑤その 二川柳

笠かさ

井い

欣意

子二

ご遠慮願います。 ます。ただし号数の指定は 申し出下さい。誌代無料 希望の方は、事務所までお 送料のみの負担でお送りし

担当いただきましたが、平成十五年(二〇〇三年)

月号から三宅保州氏と交替します。誌友の方は

初歩教室」は平成八年六月号から吐田公一氏に

初歩教室」担当者交替のお知らせ

ふるって応募して下さい。

JII

塔

社

西日 1112 更

天笑·寿美·春推薦 紗さ

岡が

中なか 天笑・寿美・春推薦 妙な

天笑·寿美·春推薦 見み 蘭ん 香か

國台

#### 高 額図書 の勧誘につい T

近頃、 ありますので、十分注意して対処下さい。 承諾してから高額な値段を請求する会社 句を掲載すると称し、参加を呼びかけ、 (社) 全日本 ]]] 柳 協 会

天笑・寿美・春推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯 の 花	14日(木)正午から 目頭・ぬくぬく・鉄・不思議 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
堺川柳会	14日(木)午後 1 時から 想像 (共選)・あとで ぶどう (折り句)	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2─16─3 河内天笑
城 北川柳会	16日(土)午後1時から 灯・呆れる・ゴール・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会梨 花	16日(土)午後1時から 何・叩く・胡椒・パーティー 雑詠	鳥取市勤労者総合福祉センター 1 F会議室 (鳥取駅南 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 続き・手作り・通し・名前	市立福祉総合センター 2 F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 断つ・待つ・疑う・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後 1 時から ハンドル・酸っぱい・釘 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から マスコット・逃げる ちょっぴり・帳尻	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの 市 民 州 柳 会	24日(日)午後 1 時から 混む・喧嘩・オーナー 「くよくよ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日)午後 1 時から 予・何もかも・グッドバイ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都	25日(月) <b>吟 行</b> 当日雑感・背・やたら・凹凸	(11月号P.52参照) 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求寿
川 柳 塔みぞくち	25日(月)午後7時半から 雫・顔・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後 6 時から 力士・異・ウニ・首輪	王造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
東大阪市川 柳同 好 会	30日(土)午後 6 時から 読む・時間・生きる・罪	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖原

<sup>★</sup>日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

句会名	日時と題	会場と投句先
尼 崎いくしま	1日(金)午後1時から 放浪・米・雑詠(A·B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔唐津支部	2 日 (土) 正午から 20 周年記念句会	唐津シティホテル (9月号P.128参照) 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
富柳会	2日(土)午後1時から 流れ・冴える・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉川柳会	2日(土)午後1時から 畳・ベル・剃る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	3 日 (祝) 正 午 か ら 第49回八尾市民川柳大会	八尾商工会議所 (10月号P.113参照) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 ねやがわ	3 日 (祝) 正 午 か ら 第26回寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立総合センター (10月号P.113参照) 〒572-0063 寝屋川市春日町 9 一 9 高田博泉
川 柳 塔 わかやま	3日(日)午後1時から 百・裏表・さまざま・遮断機	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔なら	7日(木)午後1時から だるま・軸・応募	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡選鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔打 吹	9日(土)午後1時から グループ・余韻・産む	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔まつえ	9日(土)午後1時半から 空元気・都会・筋金	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	9日(土)午後4時から 悪友・割る・コマーシャル	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
西宮北口川 柳 会	11日(月)午後1時から 万・過ぎる・本心・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 ブレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる川柳同好会	12日(火)午後 1 時から 駅・並ぶ・だらだら	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼尾浜会	12日(火)午後1時半から 生涯・抱く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス優番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

#### 記

ともに知れている。 引っ掛るヒントが、 バサンのこと、アンテナに 質·量

集後記欄だが、川柳に関す 同心を一つにし努力したい。 をお届けするため、部員 行することができた。これ スタッフのお陰で無事に刊 ☆毎月書き続けている当編 からもよりよい「川柳塔 ふり回される態であったが、 不慣れなために「編集」に 丸2年が経過した。最初は ンクするほどのご参加を…。 ないけど、来年は会場がパ 減った。鬼が笑うかも知れ 回、出席者が昨年より少し 厚くお礼申し上げます。今 で無事終えることができ 同人・誌友の皆様のご支援 ☆今月号で編集を引継いで ☆第8回川柳塔まつりは だから、その時が来るのを じるようになり、書くのが は「最適のストレス」と感 そうだが、筆者にとって月 かも知れないが…) 待っている。(永遠に来ない 楽しみになってきたという。 落ちている石でも拾いたい を連載した作家が「最初は 話題も避けている。 話をしてはいけないと聞き 乗って政治・宗教・野球の 心境だった」と述べていた なるほどと納得、そういう はパス。以前、タクシーに ☆週刊誌に30年間エッセー で、ニュース性の高いもの ☆その上2ヵ月前に書くの 回でも同感。その後作家

#### 乾杯は日本酒で

か?ということがある。 ることに、宴会での乾杯をなぜ酒 もちろん日本酒)でやらないの 前々から不思議だなと思ってい

フランス料理にシャンペン、 中

ひとこと

ていいほど、乾杯はビールである。 も相応しいのではないだろうか。 やはり日本料理には日本酒が、最 席料理や懐石料理でも必ずと言っ 飲めないのだが…。 然しながら、肝臓癌で断酒の私は い酒(私の造語)に限るのである。 い、加水しない、濾過しない三な

紛い物の酒は駄目である。 は、工場で大量生産された添加物 欲しいものである。ただしその酒 からは、ぜひとも酒で乾杯をして わないので、来年の川柳塔まつり いっぱい、しかも水で薄められた もちろん純米酒で、火入れしな そこで提案だが、今年は間に合

華料理に紹興酒なら分かるが、

書きたい人のために。④き える。②美しく豊かな日本 世界史のなかで日本語を考 語のすすめ。③いい文章を ①日本語の未来のために= ける。副題に次の見出し。 日本語」言葉の力を身につ ○目についた本に 美しい ンギデスワ。 もどそうと結んでいる。 口からでるのはホンマ い日本語を目では読めるが わたくしにとっては、美し て素晴らしい日本語をとり しておいていいのか?そし ○さて、大阪弁どっぷりの ナ にその土地の言葉にはなら

かしさは十分とりあげてい ○この本も方言の優しさ懐 密着したアクセントがいい。 粋さ、豪快歓喜など生活と スト審査員が選曲の間違い あるのではと思う。コンテ の味は出せない。その逆も そうである。西のひとがど ない。そのひとつに民謡が おられる。土地の泥臭さ、 ですね。出身地はと聞いて んなに頑張っても東北民謡

○しかしアクセントは容易 使い分ける向きも多い。 る。嬉しい限りである。テ レビ普及で接客用の方言を は何卒よろしく。 弁でお電話いたしました節 ○皆さま ケッタイな大阪

いる。が、何分フツーのオ 駄文を連ねさせてもらって ので、半分以上身辺雑事の

の素。頑張ろう!

日本語の乱れをこのままに ⑥美しい日本語の条件。⑦ 本人の性格や文化の根幹。 本語と日本人=日本語は日 い人のために。⑤日本と日

という。作句の苦労も健康 に生きるため必要不可欠だ る話題だけでは埋まらない

☆適切なストレスは、

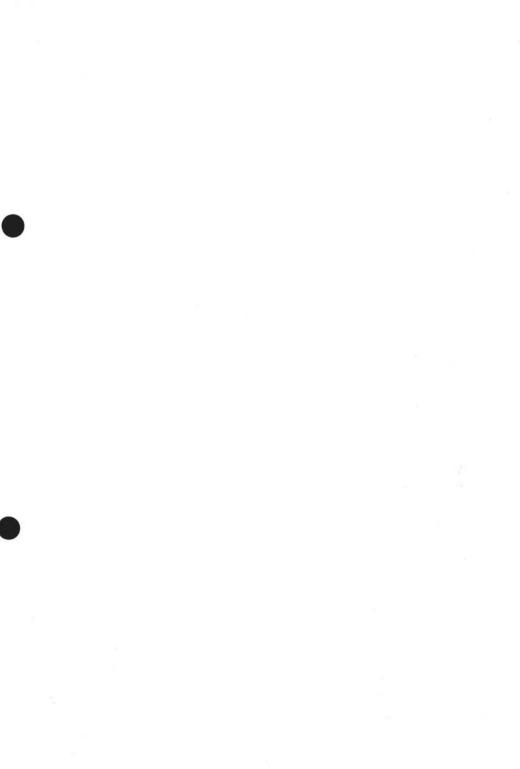
れいな話し方を身につけた

132

髙須賀金太

	川柳坪	答・水煙を   	少投句用紙	種目 「
◎8句を楷書で正確に書き、				」発表(1月号)
				地   2
15日までに到着するようお送りください。				地名 姓·雅号

同人・誌友マルで囲んでください。



#### 品募集 作

水 JII 課題吟 香の花 染 煙 柳 (3句) 帖 抄 塔

運 白

3句 3句

(8句 8

3 天

笑

」「段」

波 奥 711

Ti.

楽庵

句

ti 多野 安芸田 神

泰

選 選 選

坊太郎

選

宅 保 津子 州

初

步教室

初

(3句)

2月号

初歩教室「漬ける」

日枝子

#### 夜市川柳嘉集

短

第6回「家 新家完司選 ハガキに3句 11月末締切 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺 川 柳

₹545 -0005

100二年(平成十四年)十一月 年分 大阪市阿倍野区三明町 発行人兼 九千八百円 干 円

日

治

振替〇〇九八〇-五-三三二六八番 ウエムラ第2ビル202号室||倍野区三明町二―一〇―一六 電話 (0公)公元一六九 JII

#### 本社11月句会

会 席

費 題

0

000円

投句料

500円

平川

ます。

1

月号発表

11

月15日締

切

天王寺区石ヶ辻町19

F

吉

月2日

1

午

後

1

時

時

#

JII

アウィー

ナ大阪

3

信 2

開会時間

・会場階変更にご注

遺形で

12

電06.6772.14

宅

ジンクス

85

3

信

自

3 福

当日発表 (各題2句以内)

英 美代子

内

本

選選 選

本社12月句会 12月6日(金)午後1時から

兼題 「アリバイ」「他 人」「つかむ」 「明 日」「築 <

してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使②愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩 (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願 (3)各欄への投句は、 -日の10時から16時までにお願いいたします。| 柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、紀 年分以上前納の定期購読者)に限り、川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へ 投句用紙を使用してください。 必ず氏名と住所 の投句につい 人、水煙抄欄へ (県・市名)を 、本誌最終ページ 祝日を除く

明

11

定 八 百 円 送 料84円

(送料共)

# **『全日本柳人写真名鑑』発刊について**

名鑑に名を連ねられますよう、お勧めいたします。行したいと存じます。皆様方には一人残らず、このさらに体裁・内容を一段と充実した平成15年版を刊好評を博してきました。前回から5年目にあたり、好評を博してきました。前回から5年目にあたり、日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人

容 各人ごとに、①氏名 (雅号) ②生年月日 ③職業 ④所属柳社 ⑤住所 ⑥電話・FAX ⑦メールアドレス ⑧顔写真 ⑨自薦作品 でメールアドレス ⑧顔写真 ⑨自薦作品

内資

#### 紀州梅干

参加費

4

000円

切

平成14

年11月15日

T530-004

大阪市北区天神橋2丁目北

1

11

702

社

団法人

日

本

JII

会

FAX TEL

0606

635

2 柳

2 協

6352-2433

刊体

行

平成15年3月予定

(参加者に1冊送付

A5版・本文アート紙約50頁

·美装本



#### Sanki 三幸農園

〒640-8412 和 歌 山 市 狐 島 5 0 8 TEL 073-455-8899 FAX 073-455-8773 地方発送承ります。

商品パンフレット差し上げます。 ご注文は **2000120-04-8899** 

●インターネットでも、ご覧頂けます。 http://www.naxnet.or.jp/~sanko